



■劇団未来「手紙」—エピローグのある2場 作・瓜生正美／演出・森本景文

■劇団潮流「カチカチ山」 作・太宰 治／演出・藤本栄治



さあ、なかまたちの出あいだ！

◇東会議演劇ゼミナール◇

＜サマーフェスティバル・イン・雨畑＞

- と き 1986年8月23日（PM 3：00）～24日（PM 2：00まで）
- と ころ 山梨県南巨摩郡早川町雨畑 VILLA雨畑（0556-45-2213）
- 参加費 ￥8,500
- 内 容

記念講演	島田 豊氏（日本福祉大教授）
小形式公演	京浜協同劇団 *さんねん峠、 劇団はぐるま *地球は青かった、 劇団 静 芸 *淡墨色の桜たち、 青年劇場 *国家機密法、
分科会	メーキャップ（西沢由郎）舞台のための身体訓練（千田隼生、塩屋洋子、汲田正子）・島田豊氏を囲んで・劇団における中堅の仕事・生活と演劇・劇団の活性化
- ☒ 連絡・問合せ 実行委員会事務局
甲府市青沼町1-8-5 梅津方（0552-23-9556）
または、やまなみ演劇センター（0552-63-3483）

東会議総会は同一会場で、22日（PM 3：00）～23日（PM 4：00）

◇西会議演劇講座◇

- と き 1986年8月23日（PM 6：00）～24日（PM 3：30）
- と ころ 京都市右京区八瀬野瀬町48 養福寺会館（075-721-8575）
- 参加費 ￥8,000
- 上 演 狂言「雷」 茂山千之丞社中の上演と茂山氏指導による演劇サークル *瞬、の上演。
- 講 演 茂山千之丞・安達元彦氏
- ☒ 連絡・問合せ 事務局 劇団息吹
東大阪市中野224-14（0729-64-4441）

西会議総会は同一会場で、22日（PM 3：00）～23日（PM 4：00）

- 総会参加者は必ず、東・西各事務局へ申込んで下さい。
東会議事務局 岐阜市西野町1 劇団はぐるま内（0582-65-1852）
西会議事務局 明石市東野町1-5-1009 梶武史（078-911-1513）



■東京芸術座
「新・さるかに合戦」
作・村山亜土
演出・清洲すみ子

■劇団・伊丹市民劇場・やぎ
「ねんねの森の子守うた」
作・小島真木
演出・うま・たろう



■劇団同胞
「冒険者たち」
作・齋藤惇夫
脚色・大門 正
演出・沢田和彦



■劇団月曜会
「獅子」
作・三好十郎
演出・矢野 弘



■劇団2月・コーロ
「きいろいばけつ」
原作・もりやまみやこ
構成・演出 三沢和子
(あかね書房刊)

■関西芸術座
「西成山王ホテル」
原作・黒岩重吾
脚色・梅林貴久生
台本・演出 道井直次





■東京芸術座
「新・さるかに合戦」
作・村山亜土
演出・清洲すみ子

■劇団・伊丹市民劇場・やぎ
「ねんねの森の子守うた」
作・小島真木
演出・うま・たろう



'86 7 5

■劇団同胞
「冒険者たち」
作・齋藤惇夫
脚色・大門 正
演出・沢田和彦



■劇団月曜会
「獅子」
作・三好十郎
演出・矢野 弘



■劇団2月・コーロ
「きいろいばけつ」
原作・もりやまみやこ
構成・演出 三沢和子
(あかね書房刊)

■関西芸術座
「西成山王ホテル」
原作・黒岩重吾
脚色・梅林貴久生
台本・演出 道井直次



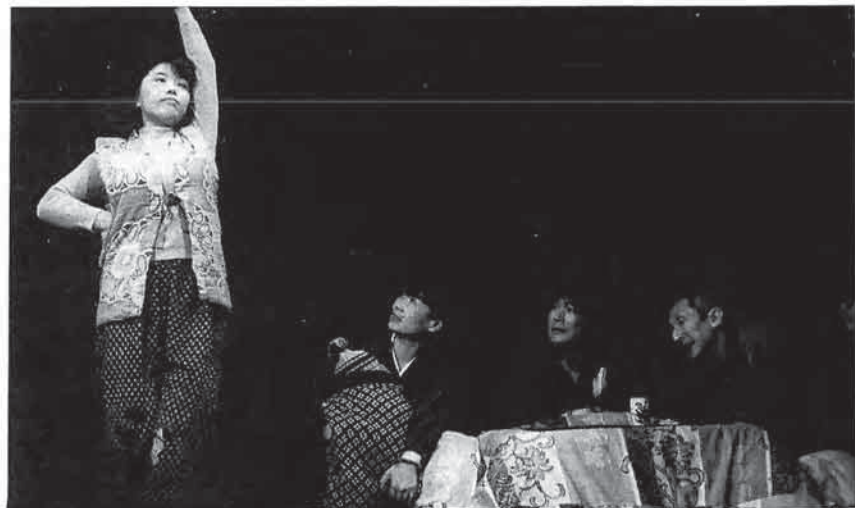


■青年劇場「シシとササの伝説」 原作・大谷直人「春雷」より／脚本・演出 瓜生正美

■演劇集団未踏「さよならエデンの谷」 原作・R・C・オブライエン／脚色・演出 立川雄三



■劇団名古屋演集
「釈迦内枢唄」
作・水上 勉
演出・浦はじめ



■劇団どろ
「とおoryんせ」
作・岡安伸治
演出・合田幸平



■京浜協同劇団
「ある馬の物語」
原作・トルストイ
脚色・ロゾーフスキイ
訳・桜井郁子
演出・細田寿郎



■演劇集団わたち

「炎の街から」

作・奥村知己 佐伯 洋

松本喜久夫 宮階延男

演出・又川邦義



▲ ■神戸職演連

「グッド・ラック」

作・V・ローソフ

演出・梶 武史



▲

■仙台小劇場

「ある馬の物語」(再演)

演出・石垣政裕



▶ ■テアトル・ハカタ

「シーズン」

作・中村ブン

演出・野尻敏彦

第12回北海道演劇祭(美唄)に参加して

萩坂桃彦

1

ことだった。

ことしの七月五、六日にひらかれた美唄市での第12回北海道演劇祭はいつまでも記憶に残りそうである。まず七月六日は、衆参同日選挙の投票日なので、いくら後日になってもあれはいつだったかなアとウロおぼえになる気づかいはない。自民党三百議席、圧勝。社会、民社の大敗と、政治上の語りぐさになりそうだが、ぼくには、そうだ、あの日は北海道美唄で芝居があった日だったのだ、とそ

の方が確かな記憶になる。

勿論ぼくにも政治軽視はありえない。不在投票は済ませていたし、居住地川崎では、議席奪還直前の、親しい特定候補者もあつての

美唄訪問の直接の目的は、演劇祭の中に組

みこまれた記念講演「私の見た演劇のなかにわたちとその仕事」を課せられたためであったが、北海道が初めてなら飛行機も初めてというカミさんのご気嫌をとったというたくらみも、正直、言っておく必要があるだろう。

しかし話はそれだけだ。遊び下手のぼくら、あながち経済的な理由ばかりでなく、支笏湖というのを覗いただけで、演劇祭の翌日さっさと帰って来てしまった。

七月五日早朝に羽田を立って昼にはもう札幌だった。駅の構内の電話で、劇団さっぽろに到着を知らせておいて、二時間ほど、百合

原公園で「花と緑の博覧会」というのについやした。花の名前に無知なのでこれ以上の説明はできない。

札幌から特急で四〇分ほど、夕方五時、美唄に降りた。往時それなりに栄えたらしい名残りをとどめながら、この駅はどこか悲しく淋れてみえる。モゼリアニの絵のように愁いをひそめている。こんなところで「演劇祭」大丈夫なのかな、と思う。

この灰色にくすんで見えるおもぎしも、その奥深いところでは絶えることのない、炭坑の町にふさわしい燠を抱えていることに気づいたのは、会場の市民会館に着いてすぐだった。

迎え入れてくれた劇団さっぽろの飯田氏、

林中氏、そして北海道でしか会えない道演集のなかまたちと握手を交していると思身がはたつてくる。一回の面識がなくても「演劇会議」を仲立ちにして、たとえば、三笠の劇団湖の加藤元・佳子ご夫妻などは、初めてに思えない。一九七四年の東日本演劇フェスティバル（札幌・真駒内）、一九七八年の北見演劇祭以来の、顔を見れば思い出す懐しいなまたちの包囲を受けて、立ちどころにぼくは渦中にはいる。

定刻の午後六時に、道演集副理事長渋谷健一氏の開会の挨拶で、第一日目の幕があく。美唄市教育委員長だったと思うが、その歓迎のことばに、投票日とぶつかつたのは政治と文化の接点として美唄市はこれを記念すべき日として受けとめるといった意味のことを言われた。

こんどの演劇祭の特徴は、何といっても美唄市が、その文化を高めるために丸がかえでとりくんだすさまじさだ。

正確を欠くおそれがあるので多くは書けないけれど、教育委員会も市民会館の館長以下職員の人たちも地元の劇団ひしの実をはじめとして、青年・婦人の農商工のクラブの人た

ちまでもという風に、なんとなく町を挙げての観がある。

北海道演劇集団が、地域に根ざす劇団づくり、拠点文化を確立することに気づいたここ数年の、こうした演劇祭の企画は折々の困難をともしないつも、第8回の北見、第9回の釧路、第10回の函館、第11回の旭川と、着実に成果を上げつつあるようである。

その最も成功したひとつの到達点を、こんどの美唄市で見たように思う。

しかし成功をもたらした誘因を町ぐるみということだけに限るのは正しくない。当然上演された芝居の質の問題がある。

そこには三つの要素があつたと思う。一つは十分に練りこまれた完成度の高い舞台があつたこと、二つには深川西高校の若々しい舞台、三つ目には地元劇団ひしの実の、文句なしのはなやかな祭典劇で幕をこじたということだ。

これが、これから試みようとする劇評まじりの報告の骨子である。

2

歓迎の「とんでん太鼓」で、客席がすっか

第五場は、北炭夕張新炭坑が打出した採炭計画のはじまりのところ、重役や職制たちの会議室で見せる。

以上見て来たように戯曲の構成は、冒頭で事故直後の強烈なシーンをおき、場を追って企業内の体制にメスを入れてゆく手法である。つまり描写から説明に入ってゆくの、観客は逆撫でされてゆく感じがしないでもない。なじめない構成だと思つたが、実はそこに仕掛があつた。

どの幕にも、若い新米の坑夫という設定で現れる「男」の登場である。

彼の存在は彼以外の舞台上の人間たちにとつて、見えたり、見えなかつたりする。つまり影の人物、声の人物である。彼は事故を予感し、とじこめられた坑内の十人の男たちの死をも予見している。そして、集中監視室や会議室や労働者の私宅にまで姿をあらわして事態の推移を見つめ、警告し、怒り、絶望している。繊細な神経である。

この役を女優が受けてもつたとしてもおかしくはない、そこで、成程ナと納得する。

この「男」がなかなか好い。セリフのメリハリ、気魄、絶望的でない悲しさ、動きのよさ。悉く演出の指示があつたことだろうが、

り観劇気分十分になつたところで――

劇団さっぽろの「シホロカベツ川一夕張」一九八一年十月十六日に起きた北炭夕張のガス突出事故に四つに組んだ劇である。

冒頭でまず地下一〇〇〇メートルの坑道にとじこめられた十人ほどの坑夫たちの、何とかして助かりたい思いの苦悶が描かれる。死に直面した地獄絵図だ。絶望の淵にのめりこむ者、必ず救助される確信に己れをはずす者、そのひとりひとりの描写には迫力がある。坑底のシーンを二階仕立ての舞台装置の上部のエリアで見せたのが成功している。

つづいて第二場は、事故直前の集中監視室。つまり坑道から救援をうけとる所だが、メーターにあらわれたガス湧出の激しさに、なんとも怠慢で鈍感な職制たちの姿を見せる。

第三場は事故の防止をうけもつガス抜き作業の現場である。事故の五日前だ。ボーリング座とよばれるこの作業は下請におろされている。手抜きもあれば、作業半ばの投げ出しもある。

第四場は数ヶ月遡って、若い坑夫の家庭。妻が夫の身を案じている。出炭のスピードアップにくみこまれていている労働者の姿。

この女優さん、どこかプラス・アルファを持っている。そのプラス・アルファが妙に気持ちに泌みこくる。

仄かな客席の明りの中でパンフレットをのぞいてみたら、咲間しのぶとあつた。弘前の故作間雄二氏の遺児である。

しかし、その咲間しのぶの好演にしても、これにも客席は馴れてくると平板になるからこわい。

そこで第六場。舞台シモ手、吊られたような高見の台の上に、髪の毛もまっ白になつた老婆が坐っている。

遠い昔、そして近い昔に、夫も息子も同じ夕張炭坑で亡くした哀しい記憶を淡々と語る老婆のモノローグ。誰か、訪れた客にでも語っているらしい。その客は会社の人にも見える。事故はいつだつて、そこにあるんですよといふ、ふかい老婆の知恵。

3

この老婆のセリフの透明度はしたたかだ。作品の上での、やや欲張りすぎた上乘せの感じを除けば、劇団さっぽろにもいい女優さんがいたんだなと感心させられる。

配役表に長谷川京子とよめる。もう何年前になるだろうか、東リ演の青森のブロックゼミで、「ばんち絵」で浮浪児の役を見せてく

ことは出来ないが、聴衆の一人になっていたカミさんの、あとの話によると、入れ歯の所為か時々不明確で、頗る滑らかさを欠いていたそうである。

ま、それはそうであったとして、「演劇会議」と道演集の関係を購読部数で、これは可成り綿密に話をした。一九七七年八月のNo36で一二三部、一九七八年五月No38で一二五部、一九七九年八月No42で一三五部。それが現在一九八六年五月No62では六七部に半減した。

これには理由があるにちがいない。「演劇会議」にも、つまり運動体としての全リ演にもあるだろうし、道演集にもないとはいえない、それとこの十年間の演劇状況の変化もいいうことが出来るだろうと、問題提起をしておいて、発行当時から62号までに到る十八年間の編集の歴史を披露し、いつの間にか演劇評論家づらになって、自大野郎で時どきトラブルをおこしがちで、十年ほど昔の、弘演の「浮標」のとき飯田さんと大喧嘩になったこともあったなどを打ち明け、そのあたりからシドロモドロになり、予定していなかったのだが、口癖の、全リ演の初期の作家たち、黒沢参吉、土屋清、こばやしひろし、作間雄二たちの「書けなくなった」話にのめりこんで

ゆく。

タイトルの「私が見た演劇の仲間たちとその仕事」で言えば、回顧的には戦前昭和十一年からの黒沢との二人三脚ともいえる劇団活動の足跡、これをやや委しく、そして仲間たちの仕事では、はぐるま(こばやし)、静芸(山崎欣太・小島真木)、やまなみ(梅津幸三)、四日市(森賢郎)、京浜(どん底・あて馬の物語)、世仁下の一(岡安伸治)のことなどを、どれほどの興味をもって聞いて下さったか、わからぬままに喋った。括弧内は名ざし、演目ざしでとりあげた人名とことからである。

ぼくには、というより北海道からみて津軽海峡の向うに住む人間の通例として、それは黒沢にもあり、こばやしにもあり、作間にもあった、全リ演からの北海道演劇への熱い思い、多少センチでロマンチックかもしれないが、例えば、同じ農村を扱ったものでも、或は労働者を扱ったものでも、明らかに異なる質がある。

それは大ききにおいて、はげしさにおいて、そこで美しくあろう、正しくあろうとする不屈なんざりにおいて、一番顕著なのは高校演劇である。——、この気持だけは伝えたかっ

たらしい。

東京などでの演劇創造の複雑さ苦しさは、世仁下をみればわかる。

先日教育番組のテレビで世仁下の「太平洋ベルトライン」を見たが、あの身体を酷使してやまぬひたむきな演技と、一週間後、同じ教育番組での中国の昆劇「朱買臣休妻」とを較べてみたら、どうだ。見込みがないと思っで見棄てた夫が出世して、妻君が後悔して、ヨヨと位くだけの芝居だったが、その素朴さ、その深さ、その表現の密度の濃さは手に汗をにぎらせる。

世仁下と昆劇の間に秘密があると思う。一度見てくれたお客は必ず二度目、三度目をみられる芝居をつくらうではありませんか、がんばりましょう、道演集の皆さん。

そんな言葉で話を結んだらしい。今度の演劇祭参加には全リ演からの使者の任務もあったと思うので、これは、その役目を果たしたものの報告である。

4

第一日の夜は市民会館の地下食堂で大交流会、宿舎東明荘に移ってからの部屋別

次会。加藤元(湖)、山根義昭(新劇場)、沢田和彦(同胞)、秋元博行(ベルソナ)、多海本泰男(新劇場)といった人たちとの、時間を忘れたアルコールづけの談論風発、なんとか眠りについたのは午前三時をまわっていたかに思う。

そして、第二日目、演劇祭の本番である。

深川西高校「一つの生命」

パンフレットに「上演にあたって」という劇の前身にふれた紹介があるので、それを一寸借用する。

中国山東省の平和な農民であった劉連仁。一九四四年秋、突然日本軍におそれ新婚の妻や肉親から引きはなされ、北海道雨竜郡の炭坑へ強制連行された。

牛馬にも劣る食糧で過酷な労働を強いられ、終戦一ヶ月前に脱走。以後、終戦も知らず飢えと極寒に耐え一九五八年冬、石狩の山中で発見されるまで十四年間の放浪穴居の生活を続けた。獣のように生き、記憶と思考の世界を失ってゆく孤独と絶望の日々はまさに惨たんたる歳月であった。

報告によれば日中戦争による中国人の犠

牲者二千万人、日本国内に連行された中国人約十一万人、うち虐待による死者一万余人という。

関原暉氏作の、この「一つの生命」は昭和六〇年度全道高校大会で創作脚本賞を受けていたことは知っていた。従って美唄の上演は初演ではない。運びの流暢さや要素々々でピシッピシッときめている発声(演技)のはずみで、それがわかる。

パンフレットをみると登場人物31名。しかし兼役が多いので20名位での仕事のようである。

劇作のスタイルは、一、発見(一九五八年二月劉連仁が石狩郡当別町材木沢の山中で発見された)、二、強制連行(14年前に遼り、劉連仁の生地、中国山東省草泊村)、三、逃走(劉連仁が陳添福とともに脱走する)、四、帰郷(発見されて故郷に帰る、一九五八年四月)。

でわかるように、守りぬかれた一つの生命、劉連仁の奇妙な生涯をたどって、戦争というものとの酷薄さ、側面中国人に対する日本軍閥の犯罪を告発している劇である。

自然それは説明劇となり、朗読、群唱劇となる。会話などにも日常生活のリアリティを

求めるのは筋力がいなくなってくる。言葉は叫ばれ、うたわれ、感情表現も様式化してくる。たとえば、一九四五年七月の闇夜に劉連仁が脱走するシーンは、戯曲では次のようになっている。

時計が9時を打つ。劉そっと起きだす。

劉連仁 (櫛を懐から出して祈るように)
玉蘭! 便所さ行くふりだ。(そっと出口に行く)

日本人1(声) ハハハ、ピンぞろの下だ。
日本人2(声) ちきしょう、またやられ
たか!

劉連仁 今だ!(一目散にかける)
群読 逃げる! 劉!
逃げる! 劉!

逃げる! 逃げる! 駈ける! 駈ける!
(註、玉蘭は故国にいる妻であり、櫛は妻の片身である。)

だから、その場面での客席の共感、劉連仁の逃亡の意味の深さよりも逃げ方のスタイルに興味が移ってゆく。それも悪いことではないので、否定的にいうのではないが、劇画

的である。

すべては本そのものにかかわっているのだから演技の質をとり出していうことはぼくにはむづかしい。また、中国山東省草泊村の場面で出てくる老若男女の農民たち、東洋鬼の日本軍人、わけても炭坑の地獄部屋から脱走する劉連仁と陳宗福などに、高校生の年齢を無視して批評などできるものではないし、してはならないだろう。

二十人の登場人物はひとりのこらず熱演である。ドラマのはこびも群読も、はりつめた活気にあふれている。裏返せばそれが平板になる。説明しつくすが、何の説明かわからなくなる。つまり、急がず、慌てず、ゆっくりと芝居として見せる場面を作る必要があったのだ。たとえば、劉連仁が強制連行される直前のシーン、北海道の炭坑で酷使されるシーン、逃走中の穴居生活という風に、観客とともに、まじめな意味で遊ぶ必要があったのだ。それが劇の深味だと思っ。

しかし何を言おうと、これが高校演劇というのはおどろきである。北海道はスゴイと思っ。

5

札幌ブロック合同公演

「ブンナよ木からおりてこい」

これもよく知られた本だ。しかし「テアトロ」でかなり前に読んだだけで記憶がいまいになっていた。

椎の木の高い切り株の上が鶯の餌の中継所になっている。すずめ、百舌、ねずみ、蛇などをはこんで来ては貯蔵している。勿論、いづれ食うためである。

その切株の表面の表皮下にカエル(ブンナ)がひそんでいる。そのブンナが切株の上でくりひろげられる鶯のいけにえたちの死闘を観察している芝居だ位におぼえていたが、実は、それでは話が半分だったのである。

実は劇の冒頭に、子供とはいえ人間が出てくる。ブンナはほかのなかまのカエルとともに、その子供たちの理科の実験用にガラスの水槽に収容されているという設定なのである。

まずカエルが人間の餌食になっているところから劇ははじまっていたのだ。だから劇の本質は強者に対する弱者のたたかいなのだ。鶯は人間の象徴だったのである。

ブンナが水槽の中で涙ぐましいなかまたちの協力によってガラス箱の縁を越え、跳び

劇団同胞の「シエルター」

おなじみの北村想の作品で知る人も多いので、余り言うこともない。「核」と言えば、廃絶と怒りの対象として考えるものの一人である。このシヤレた作品を、何とか、強烈で、シャープで、シニカルな諷刺劇として理解しようとするのだが、なかなかさうはならぬ。一昨年の全り演の演劇フェスティバルでの劇団がおの時も同じだった。やはり軽いお遊び劇として見せられてしまう。理由もはっきりしないが、一つには、核戦争用のシエルターを売る商社の社員センタは、本来ならば極めて真剣で、頭脳的で、計画的、言いかえれば申し分のない模範的サラリーマンの先端を行くはずの人間なのだ、それがのっけから、オッチョコチョイで喜劇的な人間として登場するところにあるらしい。

喜劇的鋭さはむしろ一見罵実尊大さの中にあると、いまの日本の自民党総理の顔などを頭に浮べて思うのだが、「シエルター」の喜劇として作意は別であるらしい。核問題の基本的命題を外してかかれれば、何ともこの芝居は気楽でたのしい。

出し、石を担いで来てこれを打砕いて仲間を救うというフィナーレは、だからスゴイ話なのだ。

これはしかし見終ってわかったことなのでこの二重構造をドラマとして構築して見せる仕事(演出・山根義昭)が、それをどの程度明らかにしていたが、はっきり思出せない。代りにといてはなんだが、切り株の上でくりひろげられるいけにえ達のドラマは、丁寧に、克明に描かれた。ブンナ(国部勝彦)とねずみ(田辺和人)の緊迫したやりとり、すずめ(柏木真粧美)の可憐さ、人生哲学をたっぷりきかせる百舌(村上友)、衣裳とメークアップで成功度を見せた蛇(渡辺真由美)などの、いづれ劣らぬ力演にはひきつけられた。裏返していえば、これでもか、これでもかと疲れさせられたと言えなくはない。それをほぐすためにみみずくなどがあつたにちがいない。

切株の上から消えてゆくのは鶯に搬びさられるのと切株の上での死と地上へ落下してゆくのと三通りあるのだが、消し方にもう少し工夫があつてもよかつたのではないかと思つ。

劇団新劇場と劇団ベルソナの互角のアンサンブルでつくつた「ブンナ」は、演劇祭にむ

とは言ってもこれは明らかに一つの場合であつて、商社マンが自分の庭に試作したシエルターの具象性が決定的な要素である。

美唄市民会館のステージでの、劇団同胞の装置(遠藤博、下野力男)は完全にこれを外してかかったから、会話の絡みのおもしろさと人物表出のおかしさだけの芝居になってしまった。

その限りでは四人の登場人物、気合いのこもった競演である。演出(沢田和彦)はそれにリズムミカルな伴奏を施している。

祖父センジュロー(大門正)のさりげない中でのとぼけた味やこの祖父をセンジュローと呼びすてにする娘カノ(宮野寿子)のおもしろさ、母サトコ(藤井江利子)は大きな娘とおかしな亭主とわがままな祖父(義父)の間にはさまって可成手のこんだ仕わけを必要とする存在だが、何かにつけ、「スイマセン」の一点張り、アツケラカンとしていて笑わせる。四人の登場人物につけた演出のアクセントの手腕はたしかと見るべきだろう。伊勢湾台風の頃の思出話を家族を客席にむけて並列させて喋らせていた手法は新鮮だった。

けての大きなはなむけになったと見ていい。二十名にもおよぶスタッフ陣をここで紹介できないのをおわびしておく。

劇団ひしの実の「どん太」

この劇の作者でもある宮崎衛氏が、昭和五十二年に美唄東高校を退職されて、先生のもとに教え子たちが集って来て出来たのが劇団ひしの実であるらしい。つまり文句なしの地元劇である。

「どん太」は正直言ってぼくの批評の埒に入らない。というより、ぼくなどが身につけている芝居の約束はここでは通用しないのだ。その無邪気さと大胆さと、ともかくやることとのたのしさに徹した舞台に、カプトを脱いだとはこのことである。

あらすじでみると、こんな話になっている。東北地方のある山あいの村に、どん太という頭の弱いわらしがいて、いつも仲間達にいじめられていただよ。ところがこのわらし大鼓を打つことだけはえろ上手で、皆おったまげてたす。

さて、この村は毎年大水が出てその度に村中が大きな被害を受けてただよ。何？

それは「あは六の川太鼓」の話でねえか？
て？ま、黙って見てくれや。

それにしては悪童連にかこまれて、とび切り長身のどん太（大江俊幸）は想像を絶する適役で、演技力の尺度でははかれない。風貌、片言のセリフ、ノロノロした身のこなし、まさに「どん太」の生き写しである。若し演技力だとすれば太鼓のばち捌きで見違えるように光るべきなのだ。いじめっ子の悪ガキ、子供1（堀川賢一）がまた好い。そこらにいる悪ガキをつけて来た感じで、単純、明快にドンピシャだ。

万事、きわめてわかりやすい民話風につくられていて、悲しければ悲しいかたち、うれしければうれしい形、たとえは走ってすぎてゆく子供をよびとめるときの、やさしい村のおかちあのその手つきは、呼んでいるよ、という風にしばらく宙に浮いている。

どうやら、これは踊りのポーズに似ている。踊りといえば、どん太が太鼓を叩き出すと、忽ちそこは村祭りの場になって、全く劇の内容とは無関係に、いやおそらく村人ということでの関係だろう、美明市の踊りの会にちが

いない菊柳秀久紗会社中の皆さんが（御年輩の奥さんでしめられている）くり出して、舞台いっぱい手踊りを披露する。満席の客席から割れるような拍手である。

打場会の酒の席で、一寸批評の言葉がありませんと言ったら、当の宮崎先生はニコニコである。黒沢はこういふときの応待が実にうまかった。ぼくはだめだ。

6

大いそぎで書くことになったので、書き残しが幾つもありそうである。交流会や宿舎でも、何かともいふ話をきいたはずなのだがそれが思い出せない。

しかし、久しぶりに会った北海道の芝居の仲間、やはり素晴らしいと思う。その大きさに、そのやさしさにおいて、そのふかさに。

これを全演のなかまたちに正しく伝えるのはむづかしい。ということは、北海道にだって、矛盾や悩みがない筈はないのだが、うかつなぼくは、こんどの美唄ではそれに、たままだったかもしれないが、お目にかかれな

かったのだ。

自分が来れないというので、誌代とおみやげまでも劇団のひとに托してとどけてくれた北見の劇団河童の扇谷さん、ありがとう。

一部増えましたから、と念をおして別れていった劇団新芸の鹿角さん、ありがとう。

矛盾をいっばい孕んだ、広大な美唄の穀倉地帯を、車で三〇分も案内して下さった劇団湖の加藤佳子さん、タケダさん、ありがとう。ほんとうにお礼の言葉もない。

まだある、何よりも、劇団さっぽろの飯田さんの、あの、北海道の地の果て、町の隅々にくいこんでいる、何ともいえぬ柔かさ、したたかさ。その慈愛のこもった、ぼくら夫婦への心からの接待、感謝です。

いまの観客といまの演劇についての小論

一 俳優座「セツアンの善人」、わらび座「東北の鬼」、
演集和歌山「情無用荒川太鼓」にふれながら

栗原省

(一)

私がこれから書くことが「演劇会議62号」の座談会『全演の当面する課題をめぐって』の、次の引用箇所にかかわって日頃考えていることを書くつもりだが、うまくゆくかどうか、自信はない。

なお△は、発言の意味が私に十分わからないところを、私なりに解釈してみたり、推測してみたり、補ってみたい文章である。

萩坂 △四・紀・会・や・から・っ・か・ぜ・や・さ・っ・ば・ろ・や
や・ま・せ・な・ど・東・西・リ・演・の・各・劇・団・が・歴・史・劇・を・公・演
していることについての萩坂氏の問題提起△
いま古い昔の話（とは言い切れないにしても）

の掘り起しをやっているんですよ、その書きぶりね（中略）観客論から入るのか、創造者の理念から入っているのか△ということ、観客の要求とか地域の闘争と結びついて作品がつくられているのか、あるいは作者の創造的主体的立場から、作者の創作理念にもとづいてつくったのか、というような意味にうけたののだが△どっちだろう。

仲 観客論にしても創造論にしても△前掲の意味？△現在の観客にアピールしてゆくんだから△アピールする作者の作意は当然あるわけで、という意味？△歴史をそのまま伝えるというわけではないでしょう——

こばやし △六〇年代の歴史劇は歴史にアピールしたけど、△六〇年代につくられた歴史

劇の公演は、六〇年代の歴史の動向に直ちに反映したりアピールしたりしたが？△八〇年代の歴史劇はアピールしないんや。

中沢 ぼくは二つあると思う。六〇年代の場合はカメラが先行しているわけですよ、△カメラの意味不明、視点、視線という意味か？△かつたのたかいかから何かをひき出そうという、そういう見方をしてると思う。それから今、一〇〇年前の芝居、ゴリキイもふくめてトルストイもそうだけど、△そういう歴史的、古典的作家の作品を？△やるときの視線は、もう一べんひき退けてその時点から現代を見てみるというか、そんな、その——

こばやし トルストイは別にして△△△

いう昔の作家の作品上演の問題は「まずおおくとして」現在の日本の歴史を芝居にする場合に、六〇年代は、そうだッ！やらにゃいかんという勇氣に時代にアピールしたけど、今はネ、昔の人は大へんやっつたなァ、という風に。

藤沢 今までの農民一揆劇だったら、一揆を起して、弾圧されて、打首になったという農民の魂、悲劇をつたえる一揆全体を描いたところが、そうではなくてその一揆に参加した一人の人間、つまり、どういう風に参加して、どういうことが彼の中に起ったのかという、そういう風に焦点のあて方が違って来たということがあるね。

萩坂 そういう変化はあるナ。お客の興味も、つちへいって。

仲 いま沈滞してる、八農民運動や労働運動や人民の民主主義的諸運動が沈滞しているという意味？それを奮い起したる材料としてつかんでくるという視点ではダメなんか。

こばやし 今の観客はネ、明日生きる勇氣を与えてもらいたくないなんてのは、ありやせんよ。おもしろけりやいいというのが、やっぱり中心だからね。アンケートでもネ、やっぱり、おもしろくてたのしい芝居をやってほしい。

(三) これまでの農民一揆劇(歴史劇)と今日のそれとではドラマツルギーとか、つくる視点が変わった。昔は一揆(歴史)そのものの経緯から今日の闘いに役立つ教訓を引出すうとしたが、今日では歴史の中の個人、それも否定人間像を描くことで歴史や社会の非人間的しくみを描こうとしている。たまたか、を描くのではなく、そこでの人間を描くという風に。

(四) 観客もまた従来のドラマツルギーではなく、新しいドラマツルギーを求めている。

(五) 必然性をもっているのではないか。

(六) 観客、とくに今日の若者は変わった。世界は変るし変え得ると心の底で、どこかで思っている、いやどうせ変りっこない、何をやって駄目なんだ……というあきらめの方が支配してしまう。マジメに未来を考えることが出来ない——いまはそういう時代だ。

六つの問題が論じられて、又は六つの問題がわかれ読者の前につきつづら

いというのが割に多いん。

△中略▽

萩坂 それはしかし、ドラマツルギーとして、昔に比べて必然的でもあり八昔に比べて云々は、今日の状況は六〇年代と違ってきているのであって、今日にふさわしいドラマツルギーとして必然性を持っているのだから、ぐらいいの意味か？決して悪くないと考えた方がいいのかな。

藤沢 つまり、たまたかを描くのではなくその人間を描くという風になったんじゃないですか。八傍点栗原▽昔は、こばやさんの「郡上」にしても、やはり「立百姓」でしょう。たまたかを描いている。そんな中で、うしろ向きになった百姓八寝百姓▽を描くことだってあるわけでしょう。

中沢 歴史観がね、(中略)個人の、歴史の中で果す割というか、そういうところに焦点が出て来ているような気がする。

仲 さっき、こばやし君が言ったワね。そういう求め方はしていないんだというけれどもね、そりゃ現象的にはそうなんだけれども底流にね、そういう八メッセージを伝えたい、世界は変わるし、変えることが出来るのだと確信し、そういう▽生き方を求めてるけれど

れているのではないか、私はそういう風に読んだ。

(一)

さて唐突ながら、俳優座の「セツァンの善人」を観た。和歌山演劇鑑賞会例会で、和歌山市民会館(キャパ110)が会場だった。(6月15日・初日)この日は県民文化会館で和歌山子ども劇場例会の東京演劇アンサンブル「奇蹟の人」公演があり、それを観てのは、ご観劇だった。

それにしても栗原小巻の喉を痛めての熱演や千田是也の満を持しての(と推察される)好演出にもかかわらず、大変不満が残る舞台だった。

やっぱり、ブレヒトは、その演劇理論はいいけど、作品は理窟っぽくて退屈だ——という定評は本当だったのか？とがっかりした。私はがっかりしたのだが、大いに感動し、大いに興奮させられた方もいる筈だから、その方々には私の不満をぶちまける自由だ認め

て頂き、どうか気を悪くされないで欲しい。(なおブレヒトは……と一くりに言っただけだが、例えば同じ「セツァンの善人」

も八だけだ▽今はだめだというあきらめの、そちらの方に比重が大きくて、八でも▽という生き方をしたいというねがいはいやっぱり、あることはあるわけでしょう。そんなもん全然なくてさ、その瞬間瞬間にしか生きていないって風に断定してしまうことは出来ないんじゃないか。

こばやし 今の若者は十年のち、二十年のちのものは何も期待していない。十年のち、二十年のちを考えればマジメってことが大切だけれど、マジメが否定される時代でネ、マジメよりも不マジメ、不倫、不道徳が讚美される時代やからね。もうあきらかにパロディ化する時代やだね、八中略▽だから、そういう観客層に対して、どのように挑戦できるかということが大きな課題やと思う。

大変長い引用で恐縮です。ここでは、

(一) 歴史劇がつくられる場合、観客の要求という面からつくれる場合と、作者の主体的要求でつくれる場合とあり、その場合作品がちがつてくるのか、どうか？

(二) 六十年代と八十年代では、歴史劇と現実の人民の闘争のかかわり方が変わった。今日の観客は、昔は大変だったなァ、というぐら

でも、東京演劇アンサンブルの関町八アトリエ▽公演はそれなりに面白く観たわけだから、問題点をはつきりさせるための私のレトリックだと思っ御容赦ねがいたい。

では、俳優座の「セツァンの善人」のどこがどう不満だったのか？

私は私の感性を大事にしながら、ブレヒトの研究者でもある演出者の著作などめぐりめぐり、考えてみた。観客に同化ではなく、考え、不思議がり、行動することを要求するブレヒトさんは、「俳優座のブレヒトは何故面白くないのか？」などと考えたら書いたりする私のような観客がいることを知ってさぞかし「やった、成功だ！」と喜ぶことだろう。

(一) ブレヒトは一貫して「演劇は楽しいもの」でなければならぬことを強調しつづけた。

「演劇の仕事は、他のすべての芸術と同様、人を楽しませることだ。この仕事がいとも演劇に独自の価値を与える。是が非でも必要なのは、おもしろいということだけであって、その他に何の身分証明もいらない。(「演劇のための小思考原理」とさえ言い切る。

勿論、じゃあどんなのがいまの観客にとっておもしろい芝居か？ 楽しいとかおもしろいという中味は？ という点をブレヒトがこの論文で主張したいポイントに違いない。それは一まず描くとしても、ゴタゴタ論じたしめくりで再び、ここでもう一度思い出しおかねばならないのは、芸術の任務は、科学の時代の子供たちを楽しませる——感覚的な仕方である。楽しむ点にあるということだ。」と強調し、ドイツ人はとかく理窟っぽく観念的で、「……ねばならない」ってなことはかり言っていて、何でも楽しみながらやるってことがちっともない。楽しみというものは人間にとって無条件に大事なものだ……

例の「叙事詩的演劇」や「異化効果を生む演技、演出」はどうにも動かないように見えるこの世界を、変え得るものとして、変えようとして、捉える新しい演劇創造過程での試行錯誤策であって、決して彼の「結論」ではない。これまでのブレヒト劇が理窟っぽくつまらなかつたのは、その演劇理論を機械的にうけとり、芝居を面白くふくらませる工夫や技術や想像力が足りなかつたからだというのは千田是也である。（『二十世紀の演劇』）

レヒト劇のイメージであることを説明したかったのであります。

しかし、俳優座の「セツァンの善人」には独特の面白さがなかつた。そう楽しくもなかつた。わかりやすいようでむづかしかった。決して冷たくはなかつたが平板だった。「学習が楽しみを排除」したように思った。

きわだった一例を演技面できちんとあげてみると、水売りワン（莊司肇）が、神様がふざけた唄をうたって昇天したあと、エピソードのセリフを言うそれは、

この芝居の結末は何一つ解決してくれていない。人間が変わらなければ、世の中が変わらなければ、神様が変わらなければ、世の中の人々は幸せになれるのか、それとも神様なんかいらぬのか。このどうにもならない現実、そこからぬけ出す道、善人がどうしたら善人であり得るのかという問いかけに対する答は？ それはすまんが皆さん、自分で捜し出して下さい。きつといい結末がある筈ですから……

そんな意味のことを言う。莊司はそれをいかににも申訳けなさそうに、モミ手をせんばかりにうつむいてポソポソと喋ったので、私

『ベルリナー・アンサンブルの演じ方について』のいくつかの思い違いについて」という大変愉快な討論がある。それはブレヒトの舞台は、躍動がない、暖かみがない、冷えたまままだ、ついてゆけない、などという批評に対して劇団文芸部が「また悪口」だ。全く腹が立つな。われわれのやっている芝居の意義が奴等（観客）にはわかっちゃいないんだ。などとボヤク会話だが、その中でブレヒトはさらさらとばけた顔で、

「われわれの芝居のねらいは観客を冷たく考えさせることだ。ソリヤないだろう？ お客は劇場へただ考えさせられるために金を払われたんじゃないよ。僕は何も感情を一切否定しろ、なんてこと一遍も言ったことないぜ。第一理性と感情が対立するものだと考えるから、そんな誤解におちこむのさ。観客が舞台の出来事を見て、日頃当り前のように思っていた事なのに、はつと不思議がる、初めてぶつかった出来事のように目を開かれる。なぜこんなことが？ と感動し、その感動の原因をもっと知りたがる——それでいいのに、君達は大体技巧的なことばかり取り入れすぎるんじゃないの？ うちの

はアレ！とびびくりした。これはブレヒトが一番嫌った、しかも最も古くさい「自然主義的リアリズム」のせりふまわし、かの感情移入型の最も典型的と言ってよい演技術ではないのか？ そういえば他の役者、主人役や床屋役や多勢の人の芝居に「役と距離をとろう、異化しよう」という「機械的で硬直した」演技づくりの結果がかえって自然主義リアリズム？ 風の演技が多いことが気になった。

ある筈です。あるな、きつと！
とききとれないくらいに（私は中央の比較的良い席）呷くのだ。観客は芝居が終ったと思つて「やれやれこれで帰れる」とか「何だこの芝居は！ でも栗原小巻が見られたから満足だ」とか「カーテンコールがある筈なのにないのか」とか「今晚宿舎でのレセプションに出たら小巻さんに何で言おうか」とか考えていたところへワンのポソポソである。何やね？ と思つてきくとポソポソ。本当のポソポソ。そのあと華かなカーテンコールと花束である。この場合カーテンコールは全然全くいだけない。だってポソポソの芝居のあと何でありきたりの花束だ！

人間は善人でありたい。いいかえれば人間

かみさんのワイゲルの演技を見てごらんよ。「肝っ玉お母」なんか、決して分析の冷たい血の気のない演技じゃないだろう？ いろんな矛盾をもつた、生き生きした全体的人間を観客に示すこと、そのためには古くさい感情同化の演技も、新しい感情と共に必要だ。芸術家が感情をまるで敵みたいに考えたらどうなるの？」

ってな調子でしゃべっている。（以上は勿論私流の要約？）その討論のしめくりが、有名な一句、

偉大な生産的な矛盾関係にある現状と感情——ここでは、さまざまな感情が現状の最も強度の緊張にわれわれを馳りたてるとともに、現状がわれわれの感情を浄化する。」という名文句で終っている。

いやはや、長々と引用、又引用。とにかくブレヒトの芝居は、やたら面白く、楽しく、不思議な発見にみちみち、ホットで、複雑な感情の起伏、振幅が豊かで、わかりやすい。見終つたあとの深い感動が理性をこぎすまし、怒りやあわれみの情があるべき世界の探究へとわれわれを馳りたてる——そういう独特の魅力を持った舞台の筈だ。というのが私のプ

は全的に自分自身でありたい。皆を幸福に自分自身も幸福になりたい。だがそんな欲はたねがいを持ったものならシュン・テとシュイ・タのあいだを行き来する、際限のない変節を余儀なくされるだけだ。私達はどうしたら善人であり得るのか？

ブレヒトは：虐げられた人達の苦しみだけではなく、その人達の有罪性を、その人達の自らがその犠牲者たる体制への客観的加担を、そこから脱出できないことを、明らかにする。：自分自身をいつわらなことを余儀なくされ、もはや自分自身を自分のものとして所せせず、疎外された人間を、彼は見せてくれた。（ベルリナー・ドール「ブレヒトの境界」）

そして、そこへ一人の役者が登場し弁解を言う。
ブレヒトの批判的演劇は、ここにおいて最高潮に達する」とドールは書いています。
観客へのこのパセティックで苦痛に満ちた呼びかけにおいてと。
決してポソポソの演技ではいけないのである。「セツァン」の序幕ワンの独白に始まり、シュン・テが「助けてエー」と叫ぶ声をどこ吹く風に神々は昇天し、シュン・テは絶望の

手を高くさし出すがその手に何もつかめない。その間10場の全時間の重さがエピソードのワンのごく短い観客への呼びかけの重みとピーンと張り合い、息づまる緊張が生じる。世界は第二次世界大戦にひきずり込まれ、ナチズムが全世界を汚染する、この惨劇の結果に対し、水売のワンは、シュン・テがシュイ・タにならねば生きて行けない資本主義社会そのもの、世界そのものを変える力は、全的に自分自身であることを願う民衆、観客自身であることを、そのことを短いエピソードで呼びかけるのである。そして観客は爆笑しながらみていた寓話劇の、もう一つの恐ろしい深淵をのぞき、さまざまな感情が理性の最も強度の緊張にわれわれを馳りたてるのである。

いま、荏り筆の最後のセリフに焦点をあてて私の不満を書いたが、芝居の面白さ、楽しさは演技が感情同化的であり異化的であれ舞台独特のあの息づまる緊張と無限に精神の広がりを与えてくれる弛緩、そしてその間の喧騒や静寂、集団の動きと個人のそのアンサンブル、勿論装置や音楽一切を含めてだが、協和音や不協和音が作りだす美しさ等の全体からくる。そしてブレヒトの場合一度組曲のように、一場一場が独立した面白さをつく

り、その都度感動や拍手が、あるいは沈黙がふき出す、そういう舞台になる筈、もっとホットな、生き生きした「セツアンの善人」が欲しい。

(二) 私の不満のもっと強いところは、千田演出がいまの観客をどうとらえて芝居づくりをしたのかという点にある。あるいはつくる側の意欲や論理、冒頭座談会の言葉を借りれば、創造者の理念、が先行し、観客論が欠落したのではないかという疑問を持ったと言ってもよい。

もちろん、観客のことを考えない芝居などあり得る筈がない。ましてブレヒトである。彼の作品の殆んどが、新しい興隆しつつある階級、舞台に陶醉するのではなく、ことがらを批判し世界を変革することをのぞむ新しい観客に向けられて書かれたものだ。勿論古い観客のことも十分顧慮して書いた。

「現代のような、生活テンポのはやい、ダイナミックな世の中では、楽しむ場合にも、刺戟が急速に消耗していく。絶えず増していく観客の鈍麻に対応して、絶えず新しい効果を生み出さなければならぬ。演劇は放心し

た観客の気を晴らすには、まずその注意を集中させねばならない。そうぞうしい環境から引きはなして、こっちの軌道に乗せねばならない。演劇が相手にしなければならぬのは、合理化された毎日の労働のために困憊し、各種の社会的摩擦に刺戟され、疲れはてた観客である。観客は自分の小さな世界から逃れて、逃亡者として劇場にすわっている。この逃亡者こそわれわれの演劇のおとく、いさんのだとブレヒトは「実験的演劇について」の冒頭に書いている。一九四〇年のことである！

「とくに、今の世の中はすぐく複雑で、表面の繁栄、便利で快適で、一見自由な生活のかけに、本当の人間関係―階級対立、搾取関係―が、あるいは自分自身というものが見えにくくなって来ている……そういう人間はなれぬしちまってる自分さえも見えにくくなってきている。おまけにマスコミというやつが、商売がら、しゃにむに新しいもの、珍奇なものを追いまわして、情報をまきちらし、それで大衆をはぐらかしながら八世のことが、人間が変らぬVという考えを押しつけることだけは忘れぬ。千田は也演劇論集第七巻・「ブレヒトの方法」一九七四年」

「かつてわれわれの血を燃えさせた八自

由Vだ八民主主義Vだ八変革Vだ八社会批判Vだ八人間性Vだ八人間疎外Vだということも、マスコミのおかげで流行語化され、無害化されてゆきますし……そこを掻きわけて、いまの世の中のしくみを具体的に認識させると同時に、その変革のための必要な心構えを、日常の警戒心や選択や注意を呼びおこし、それに必要な小さな行為の積み上げを可能にするような一貫した構造を持った芝居をつくること……それは観客の受容力をはっきり勘定に入れた創造方法だとも言える……」（「運動と主体」下巻）これは一九七七年青年劇場での土方さんとの対談である。

ブレヒトが「セツアンの善人」に取りかかったのが一九三九年。

当時ブレヒトが、観客の受容力を勘定に入れたファシズムの暴力、野蠻、搾取の非人間性を観客に示そうとする場合、顔や名前や地位など階級のシンボルを示したり、飢えた民衆のみじめさを示すことで、観客はわかった。そして暴力の社会的原因や飢えの構図を掴ま

せることが出来た。そういう、目の前に階級闘争が見え、敵が見える時代にくらべ、いまは搾取は、飽満

レジャー、利他的刺戟、団結ではなく個人の確立、という形になり、野蠻や暴力は経済摩擦、GNP、経済大国、とか、受験競争、自殺、中流、ゴルフ、

単身赴任、とかにかわっている。国際的巨資本の管理という汚れた空気に資本主義社会（社会主義社会の一部すら）全体がすっぽり包みこまれ、人々はただ息苦しく、荒廃し孤独化し畸形成した個人生活の内面にこもって出ようとしない。すっかり澱んで動かない空気の中で、誰が敵か味方か、そういう感覚や方向や階級闘争が見えなくなつた時代――見えた、時代のブレヒト劇が

見えない、時代に果して有効か？観客を革新へと動かす舞台にするため、どういふ公演の戦略や戦術が組まれたらよいか？

私の期待と興味はまさにその一点にありました。

こばやしさんは、三〇年代の歴史劇は歴史にアピールしたが、八〇年代の歴史劇はアピールしない、と言ひ、「ブレヒト対話」ですでに論じ尽された（？）ブレヒト有効性の問題を、千田演出では「セツアンの善人」でどのように、観客の受容力を勘定に入れて処理したのか？という点です。

例えば八場。シュン・テの恋人の失業飛行士ヤン・スン（磯部勉）は、シュイ・タ（善人）シュン・テが変身するらつ腕の工場経営者）に雇われ忽ち残忍な現場監督に変身する。

八頭の象の歌、と共に労働のテンポは早められ、人間は流れ作業の機械の一部になる。ヤン・スンは生き生き、テキパキと労働者を働かせ、シュイ・タは悠々とタバコをふかす。ヤン・スンの母ヤン夫人（高山真樹・好演）は「今ではスンは三ヶ月前とはまるっきり人間が変りました。」と件のサクセスを自慢する。

劇の流れからみて、この劇では子供達（未来）が大変重要な働きをする。この場でも子供たちが必死に可愛いく働きます。反面て「可愛い！」と笑いをまきおこす。反面それが、われわれの労働場面だとは誰も共感しない。いまの労働現場はもっともっと快適であり、労働の質が遥かに過酷だからだろうか。大学を出てモータールセールスマンになり、搾取の仕組みの二コマに、人間から商品に物化する自分が自分にならない。わかっているのに自動的に商品になってゆく、そこがわからない。ヤン・スンのように意気揚々となら

ない。ただ競争の歯車をまわすだけ。俳優座の舞台の形象と観客の受容力、乃至想像の距離の遠さには大きかったと思った。

演出のキメのこまかさやテキストへの忠実さ、演技の質の高さや装置、音楽(私は林光のこの曲にどうもなじめない。だから良いのかナ?)等のアンサンブルは見事である。にもかかわらず不満だらけなのは、いまの観客の一人である私と千田演出の「セツアンの善人」との距離であり、その距離はどう縮められるのかは水売りワンではないが「ご自分で結末を捜してみて下さい!きつといい結末(つくり方)があると思います。あるな、きつと!」であろう。

(三)

演劇の歴史は、観客をどうとらえ、観客の状況やその変化が自分達がつくるドラマの内容や様式とどうかかわり、どう変えて来たか、という歴史でもある。観客を財源としてのみ考えたり、観客を啓蒙の対象とのみ考えたり、観客を享楽の相手と考えるだけでは本当の「観客論」は成り立たない。

ドラマそのものの成立のために観客が果たす役割をどう捉えるかの意識(笹山隆「ドラマと観客」、演劇創造の主体(客体ではなく)としての観客という見方が必要である)。

観客を演劇の享受者、鑑賞者の立場から、体験者、生活者の立場へ復権(ギリシャ悲劇や中世聖劇のように)させる為「ポジティブまたはネガティブな影響力として働いたのがプレヒトの異化の理論と状況」のドラマのために「性格」を拒絶する彼の考え方であったことは今さら説くまでもない。」と笹山氏は言う。

そんなわけで、観客がドラマそのものの成立のためにどうかかわるか、をテーマにしたこの小論のマクラのつもりで俳優座のプレヒト公演をとりあげたのが、ついくどくどと長くなってしまった。長くなりついでで申し訳ないがわらび座の創作歌舞劇「東北の鬼」について触れさせてほしい。その理由は後記する。

文工隊「海つばめ」としてスタートし、秋田に根づいて三十五年、わらび座は今日日本の民主的文化運動の大切な財産である。大切な財産だと思ふからこそ、大勢の人々がカンパを出し、劇場づくりに協力し、公演活動を守り育てようと奔走する。がここ何年か「わ

らび座が来ると言われると又か!とぞっとする。仕事放って必死で巻売りしてトントンがいいところ、でも、良かった!流石わらび座や」と観客に言ってもらえればそれで報われるけど、券買わされて仕様なしに来たけれど、ママさんコーラスみたいな合唄きかされたり、体操みたいな踊りだけで、わらび座らしいもの近頃余り無いな。退屈やっとな。

てなこと言われたらもう。もっと辛いのは、ごくろうさん。あんたらようやった。けど舞台はもう一つやな。これ最低や。どうにかならんのですか?」と言う声をその都度聞くようになった。公演オルグの人達もわらび座の意義とか日本の反動的な文化状況については喋るが、持ってくる作品の優越性、特徴などについて確信をもって訴えるということが少なくなった。

さて「東北の鬼」がつくられたのが一九七一年、再演は一九八四年、和歌山では十一月十九日県民文化会館で「実行委員会」の努力によって公演が実現した。「東北の鬼」は日本の新しい歌舞劇創造を目指すわらび座の歌舞劇第二作・第一作は「炎の島八一九六七年」出演者四〇名、オーケストラ演奏、衣裳一六

〇〇点、小道具七〇〇点、三幕十一場の大作である。観た方が多いと思うが、話は一八四七(弘化四)年南部藩(青森県から岩手県釜石市あたり支配)下でおこった強訴の勝利にはじまる。(一幕一場)六年後、引つづく凶作、飢饉と重税に対し村々には再び一揆の計画がすすむ。その背後に伝兵衛という指導者の地下活動があった。伝兵衛の影響下、弥兵衛(老人)新蔵(青年)などが活動する。一方一揆のバトロンであり、鉾山の経営者でもある幸右衛門は、藩勅定奉行辻重太夫に御用金八百両調達を命ぜられる。その代りとして辻は鉄製造に必要な人夫を村から狩り出してやる。(一幕)伝兵衛がひそかに幸右衛門をたずね一揆への協力を訴えるが、妻まんの拒否にある。幸右衛門のたたら場は新しい鉄の産出計画で活気を帯びていたが、突然鉾山をすべて藩の直轄経営にするとの知らせに抗議して息子の与吉も弥兵衛も斬殺される。(二幕)幸右衛門は伝兵衛の忠告をしりぞけ一人江戸直訴に出る。一揆の連判状は次々に集まり、三閉伊地方一万六千人の農民、漁民、塩やき人夫などが四十九ヶ条の要求を掲げ、舞台に各村々の旗を立てて並ぶ。一揆勢が出立し、伝兵衛は幸右衛門の妻まんと与吉の妻ゆきがお

くれて参加するのを待っている時、背後から村人嘉平(実は藩の秘密工作員)に殺される。(三幕)一揆は農民の心にやどる魂の舞を舞う。(終幕)

以上があらすじである。作曲は原太郎、台本は原由子。

さて私は演集和歌山「情無用荒川太鼓」の台本づくり、演出にあたっていくつかのメモを書いた。

- (1) 「情無用荒川太鼓」作劇上の留意点
歴史的史実に忠実のあまり、その説明に終始しないこと、(どのようにして一揆がおこり、どういう経過を辿り、どういう結果に終わったか、等)
- (2) 主観的、観念劇にならないように。(大衆劇リアルズム劇であること)

「情無用荒川太鼓」作劇上の留意点
歴史的史実に忠実のあまり、その説明に終始しないこと、(どのようにして一揆がおこり、どういう経過を辿り、どういう結果に終わったか、等)

- (A) 森井淳氏の前作「峠を越えて」作者の生地河内によせる愛着。紀州の農民と河内の行商人を結びつける無理。統一戦線への期待などの作意が前面に出すぎて作品を主観的観念的にした。
- (B) わらび座「東北の鬼」は、舞台が作者の

らぬこと。

(C) 誰でも必要以上の予備知識なしでもわかる芝居にすること。

(D) 文政六年の荒川の一寒村に生きた農民の形象が、今日のわれわれにただちに親近感を与えてくれるリアリティを持たせること。

(E) 歴史の進歩のための人間のたたかいは、勝利、敗北の単純な図式や「がんばろう!」「団結しよう!」という掛け声、励まし、願望で描くのではなく、強大な権力(運命)やそれに対して人民の生活や夢や希望を賭して闘う組織(理性)や、その中での曲折した人物の行動(情念)を統一的にとらえて描くこと。

(F) 感情の同化と状況の異化を統一的にとらえること

(4) この劇公演を通して発見したい演劇的課題

文政六年紀州藩一揆の側面を描きながら、現在のわれわれの状況をつきめける視点、エネルギーを発足したい。

※われわれの状況とは、

① 軍事、経済の地球的規模での危機。

② 自民党独裁支配と反動化の加速化。

③ 巨大資本の管理支配。

④ 中道各派・労働組合をふくめた権力か

うなのか?

と尋ねている。

それに対して原さんは「一人よがりではなく、いつも思うのですが」と言葉で濁していたが、私はわらび座は、ドラマそのものの成立のために観客が果す役割をどうとらえるかの意識で観客をとらえなおすべきだと思っている。公演日を一方的にきめて押しついたり、舞台の余韻にひたっている最中カンパを訴えたりする無神経さは論外としても、実行委員会との交流や感想会や託児所設置などの組織的に観客と合意するだけでなく(それは本当に大事なことなのだが) 作品の上での創造の根幹の問題としての観客との合意が必要ではなからうか?

「東北の鬼」はまず、難解な言葉が複雑な曲で歌われるものだから何を言っているのかわからないし、地語りと役者がダブルものだから益々混乱させられるし、原さんの壮大なオーケストラ曲に呼吸がついてゆけず、音楽が途絶えたとやっとホッとしたり、この劇団独自の表現主義的演技、思い入れや表情過多にうんざりしたりで、作品そのものの説明性や観念性(百姓は誰も腹の中さ鬼をもつ、さむらいというものは、まことけだもの)とい

らのとりこみ。

⑤ 国際共産主義運動の不統一、覇権主義。

⑥ 国内革新運動の分断。

⑦ 情報革命、技術革新と人民の生活の遊離。

⑧ 人間関係の分断、個人の埋没。

保守安定思想の支配。

等々現実変革が見えにくい状況。但し、作品の筋立て登場人物等を現状に短絡させることは創造上混乱のもととなる。

(5) この劇の表現形式

誰にでもわかりやすい大衆劇としてつくること。

以上がメモの写しである。

全く申しわけない話だが、「東北の鬼」は私にとって新しい作品をつくる際の「こういう作品はつくりたくない」見本の一つとして引合いに出した次第である。

原由子は「東北の鬼」が稽古に入ってから二ヶ月頃、菅井幸雄、永井智雄三人と話し合っている。「東北の鬼」(台本二六頁)まず原さんが、

(1) 国民的合意が重要な今日、三閉伊一揆の統一戦線的エネルギーを劇化する意義は大き

い。

(2) 人間の権利と尊厳を誇る精神を東北の農民は、鬼の面に託し、鬼剣舞にまとめ、次の世代に手渡してきた。それをわらび座の歌舞劇にした。

(3) 時代の閉塞状況をリアルに描く方法でなく、一步でも歴史を進めてゆく積極的人間像を描いた。

(4) 様式としては、一揆と鬼剣舞と結びつけたこと、台本で東北の四季を追いながら描いて自然と人間の関係をむすびつけたこと、群読や歌、舞、劇の三つの要素がとけ合うようにしたこと。

(5) 伝兵衛が他の階層に働きかけ、鉾山経営者の一家が変わってくるのがこの劇の主軸である。

と説明し、菅井氏は、

(1) 台本に権力側の分析がされている箇所。

(2) 現実変革の闘いをロマンチズムに描いている点。

を評価し、わらび座がつねに観客との合意を考える創造精神、観客を大事にし観客に責任をもつ態度(事前の打合せ、終演後の交流会、その後の連絡等を例に)をあげ、

(3) 観客との合意は「東北の鬼」の舞台ではど

うていの()の相俟って、不満だらけだった。

真面目な活動家のM君がはずかしそうに私に言った。

「『東北の鬼』をみたけど、ああいうのは良い芸術作品と考えなければ、いけないのじゃないか。」

「え? 貴男はどう思うの? 本当のこと云って...」

「実は何言ってるかわからないので、そのうち半分ほど寝てしまつて...辛どかつたけど高い入場料だったし(五〇〇〇円)...すみません。」

長年熱心なわらび座の支持者を自認する私が、どれほど深い痛苦のおもいでM君の言葉を聞いたことか。日本の民主的文化運動にとって無くてはならぬ宝であるだけに、私の心情は複雑である。

(四)

いつもそうなのだが、やっと本論と思われ頃にはすでに心身共困憊の極に達し、意気込みも萎えてくる。しかし俳優座やわらび座の作品批判—それも我田引水も良いところの—だけで終っては申し訳ない。

現状は変らない。真の民主主義の実現、人間の尊厳、平等、平和という立場から見れば変らないどころか、益々大きく後退するだろう。この小稿を書いている時、衆参同日選挙の開票発表があり、テレビが自民党の圧倒的勝利を知らせていた。人々は何故! と呼ばず、矢張りと呟いた。

こうしてわれわれの陣営からひとりの男が消えた

とブレヒトが書いた一九三三年のあの時代がふつとよぎる。人々は変革をのぞまない。それが自民党の圧勝の原因でしょうとテレビが言っていた。

原由子さんは「いまは一揆の時代ではありませんが...」と前述の座談会で述べていたが、その点私も同感だった。一揆の時代ではないから一揆劇をとりあげたともいえる。

「情無用荒川太鼓」については本誌61号で谷野幸雄氏がすでに紹介しているので内容説明は省略します。和歌山県下五ヶ所、六回(今年六月高校公演)観客二五〇〇人、経費約五〇〇万円、尚上演時間二時間十五分で、後二時間にちぢめました。

紀州藩一揆は史料が乏しく、現在も史実の掘り起しがされているが、一八三三年(文政六年)五月二十日に打こわしが始まり、十二万人とも十三万人ともいわれる紀の川筋農民が紀州虎伏城に押しかけ七ヶ条の要求を全面勝訴したのが六月十一日、その月末にはすでに若山で三十三名、有田川原で四名など主謀者が処刑されている。名君と言われた紀州藩十代藩主治宝は翌年辞職している。

十万を越す民衆の蜂起と言え、如何なる条件があったにせよ、封建的閉鎖社会では異常すぎる。大変な事件だ。私は、イデオロギーや利害関係はおろか、人間関係とか親子関係というキズナさえ生活のため分断され、孤独と不信しか残らぬ農民、商人たちの姿を想像する。彼ら結びつけるのは、多分権力の下部機構でもあり、共同生活の場でもある村落共同体だ。藩の支配は共同体の一人一人の隅々まで管理が貫かれていたに違いない。牢獄の中のような息苦しさ。どうしたらそこから抜けだせるか、空も何も見えない。しかし藩権力の側も幕府や他藩との関係に苦しみ、また何よりも新しく興隆してくる商品経済とその担い手たちの力に揺さぶられ、更に大きな幕薄体制そのものの構造的危機を内包している。

外から一寸した作用が働きさえしたら共同体(「農民を拘束する外柵は」は屈曲してきしみなながら、次第に農民を結びつけるように作り、やがて一つの巨大なエネルギーとなつて爆発する。地下の岩谷がぶつかり合い、溶け合い、たぎり合うようなさまを想像した。

いまの青年は未来など考えないだろう。だが考えようが、考えまいが、未来は彼等のものであることは確かだ。文政六年の青年は未来をみすえていたろうか?しかし行動した。そこを描きたい。プレヒトは(又々恐縮だが)「肯定的主人公より否定的主人公の方がはるかにおもしろい。それは否定的主人公の方が批判的に描かれているからだ。」と話しているが、ここに一つの土地をめぐる利害が対立する二人の農民が紀州藩一揆に参加する姿を追って見ようと思った。二人ともろくでなしである。私は公演パンフに「日々生起する事件でさえ、主体的・主観的な目で取捨選択されねば、事実、など伝わらない」「客観的報道が、真実、を伝え得ているだろうか」という柳田邦男の文章に触発されて「われわれは歴史の、真実、を知りたいだけである。歴史的事件、を劇化する場合、私はまず、事実を伝える、という考えを放棄する。そ

して、ビールを飲みビフテキを食いコンピュターを馳使する人間が、水と麦、雑穀のかゆをすすり、寄合談合以外コミュニケーションのすべを持たなかった百六十年以上昔の紀州農民と、同じ場所(劇場空間)で、同じ共感を持つためのあれこれの仕掛けを工夫する。文政六年の紀州農民一揆という仮構の素材を借りて、舞台の真実を現前させたいと考える。芝居らしい芝居をつくりたい。……」と書いた。全く汗顔の至りだが、私はこれを書きながら「荒川太鼓」を見て呉れるであろう観客の「自分が自分であるために」、シュイ・タの衣裳をかなぐりすてたシュン・テが、助けてエー!と叫ぶ声を反芻していたのかも知らない。

「あれこれの仕掛け」を私達の「観客の受容力」がどううけ入れたか、芝居の出来不出来については二五〇〇名の観客自身にきく以外無い。

劇団通信

テアトル・ハカタ

新劇場開場記念公演の第二弾は、若手を中心にした「ミュージカル・シリーズ」。勿論ミュージカルには程遠いが、十年後を目指して一歩一歩、力をつけていきたいという願いをこめて、四作品連続上演にふみきった。

三月二十日初日、二十日二十四ステージ「ドック」石山浩一郎書きおろし作品。

四月五日初日、十日間二十ステージ「菜の花嫁女」深沢一夫作品。

四月十九日初日、十一日間二十二ステージ「真夏の夜の夢」井上ひさし作品。

五月三日初日、十日間二十ステージ「シーン」中村ブン書きおろし作品。

全シリーズでお集り下さったお客様、二九二四名、昨年六月のサヨナラ公演四本連続上演二十一日間四十三ステージから、ステージ数では二倍になったが、動員数ではわずか三

三八名の増加にすぎなかったが、この原点から出発していこうと、四十七名の総力をあげての東京公演は成功裡に終了。五月二十一日二十二日。

七月、八月は、ファミリー劇場として、「落ちこぼれの神様」園山土筆書きおろし作品、八月には「十一ぴきのネコ」井上ひさし作品を上演する。

地域演劇の明日は気の遠くなる程遠い。然し若者達の瞳はキラキラと輝いている。

(812) 福岡市博多区奈良屋町二一九
○九二二七一一五〇九〇
世仁下乃一庵

八六年の上半年は、武蔵野芸術劇場での「太平洋ベルトライン」で一息。

下半年は六月二十八日の、日本ジャーナリスト会議主催。八月十二、三日 紀伊国屋提携で。九月、藤枝。十月、旭川他。いづれも「太平洋ベルトライン」で。

十一月「八日より十二月七日 新宿シアター・トップスにて、新作「かちかち山のブルー・トーン」上演予定。

未だケイコが場がない、事務所もない、器材もない、お金もない。ないないづくしの世仁下です。

(176) 東京都練馬区豊玉中三一五
都営二一三〇四 岡安方
○三一九四八七三三八

劇団湖

暑中お見舞を申し上げます。いよいよ選挙戦の火ぶたも切られ、大切であわただしい数日が押し寄せることでしょう。

「湖」もいま、大変な時期を迎えています。十月五日(一般公演)十月六日(小学校公演) 於三笠市民会館大ホール。

儀間比呂志作「赤いソテツの実」より、ふじたあさや脚色、加藤佳子演出「笛吹きカナシー」。

右の稽古に今一番油がのっていないなければならない筈なのに、会員それぞれが選挙やその他に手をとられることが多く、「心ははやれど身はひとつ」で、最悪の集まり具合です。沖繩から来ている方々の話を聞いたり紅型を見に行ったり、沖繩観光課からテープを送って貰って検討したり、今、歌と踊りに一番頭を悩ましているところです。曲も間もなく出来上るので人集めが急務です。

七月五、六日は全道演劇祭美唄フェスティバル、衆参同日選挙投票日とぶつかる訳ですが、この日をよい刺戟剤として、又それぞれ

の仕事が一段落し、身軽になる仲間たちと一丸となって「笛吹きカナシー」作りに集中したいと思っております。

何ごとかに集中できたエネルギーは芝居でも燃え上ることを確信しています。芝居をやる人間は忙しい人が多いですね。一人で何役もかけ持ちです。そんな人の集まりですもの調整は大変です。

萩坂先生、美唄市でお逢いするのを楽しみにお待ちしています。

(068-21 三笠市幌内住吉町九 加藤方
〇二二六七二二三〇四四)

劇団名芸

六月に、岡崎演集や名古屋演集の舞台をみんまで観てもらい、色々刺激を受けました。衆参同日選を前にしては、若尾さんを稽古場へお招きして、政治(共産党)と演劇について貴重な話をお聞きすることができました。

去る5月に、第23期研究生卒公「マネキン館」(作/栗木英章 演出/寺沢宏行)を終え、8人の新しい仲間を迎えて、現在、夏恒例の子供劇場に取り組んでいます。

「雪ん子物語」
(脚本/栗木 演出/糸井重喜)

7月26(土) 27(日) 平針小劇場を皮切り

に、9月には、天白区役所や南図書館ホールで上演する予定です。

秋には、久しぶりに栗木の新作「米泣く村に、米降る街に」(仮題)を、柘植演出で上演すべく、現在創作の追い込みをしているところです。御期待下さい。

明かるい話ばかりでない現状ですが、力を尽くしていい舞台を創っていきたいものです。

(468 名古屋市天白区天白町平針向田四四六
〇五二一八〇三二二九二二)

お急ぎの場合は左記へよろしく。
(457 名古屋市南区汐田町三十四〇 栗木方
〇五二一八二二一三六九二)

だいこん座

春の公演は四月十九日(土) 鶴岡市中央公民館ホールに於て、大谷駿雄作「じゃがらもがら」を上演しました。作者は天童高校の先生で、いわゆる「姥捨て伝説」(郷土に伝わる)を材に現代と伝説の世界が交互に進行する舞台で、母と子、青年の自立などを訴えた物語です。若手中心の公演はまずは大成功でした。劇団に活気がでてきたのがなよりの収穫です。毎年、春の公演は若手中心の公演で行こうと考えています。

現在、秋の公演「ああ野麦峠」大橋喜一作

の稽古に入っています。昔、製糸工場に働いていたおばあさんから話を聞いたり、工女になる女性出演者を大募集中です。

(997 鶴岡市本町三一九一
〇三三五二四一六八八)

青年劇場

お久しぶりです。本誌62号劇団通信に欠場しましたこと。萩坂さんからの大切なお便りが担当者へ届かず、誠に申し訳ありませんでした。

いつもの事ながら、各公演班が地方へ出発した後の事務所なんと静かなこと。さながら「嵐の後」なのです。本年の学校公演は「青春の砦」「少年とラクダ」「シシとササの伝説」の三作品。一般公演は、「結婚という冒険」の労演、市民劇場公演をはじめ、「青春の砦」「シシとササの伝説」等、実行委員会による公演もいくつか予定されています。

今年に入って劇団は「シシとササの伝説」「ホスピス」「お茶と刀」と、四ヶ月余りに三本の新作を生産しました。新作「シシとササの伝説」は、「青春の砦」の原作者大谷直人氏の短篇、「春雷」に想を得て、瓜生正美の作・演出によるもの。私立高校を舞台に、

生徒の「演劇合宿謹慎処分」を巡って繰り広げる涙と笑いの教育実践を描き、更に教育現場に土足で立入るマスコミを諷刺した作品です。学校での公演を「青少年劇場公演」と名付け、現代の青少年や教育現場との深い結び付きの中で創作劇を追求してきた青年劇場の新作に御期待下さい。

現稽古場初の小劇場公演「ホスピス」は、シナリオライター立原りゅうさんの初戯曲でもありました。末期癌患者の医療施設を舞台に患者とその家族の心の葛藤に視点をあてた作品で、様々な意味で成果を得ました。

五月には第38回公演、飯沢匡作・演出の「お茶と刀」を12ステージ約六千人で、無事幕を閉じることができました。来年の飯沢作品は待望の「夜の笑い」再演です。

来たる九月の第39回公演は、ふじたあさや・千田是也・青年劇場のトリオ第三弾、「書かれなかった頁・日本の教育一九八〇」教科書

既定の裏側に迫る力作です。
さて、中曽根による文化の民活路線。文化の商品化により、新劇の危機はいよいよ深刻化しています。危機をのり越え、文化を真に国民の手に握る為には中曽根、自民党政治との対決を避ける訳にはいきません。本誌63号

が発行される頃に、日本がどんな道歩んでいくのか。いづれにせよ、これ以上苦しめられるのは御免です。
(葛西和雄)

(160 東京都新宿区新宿二一九二〇
間川ビル6F
〇三三三二二六九二二)

関西芸術座

7月31日から3日間の予定で劇団の定期総会が開かれる。
日頃、班にわかれた公演活動と、いわゆるマス・コミ出演などで、90余名の劇団員が一堂に会する機会があまりない。

それだけに、企画・創造・財政の総括と新たな方針をさぐるための会議が続けられている。
特に来年は創立30周年をむかえることもあって、熱い総会になろう。

最近の公演活動は次の通りです。
一般公演「西成山王ホテル」黒岩重吾作、梅林貴久生脚色、道井直次・台本・演出。毎日新聞社主催、毎日ホール。6月10・11日。観客一五〇〇名。7月26日、大阪府民劇場・柏原市民会館予定。
中学・高校生対象の長期公演「翔べーその翼で」(空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ)

可能あらた作・仲武司演出。

「奇蹟の人」ギブソン作・富田悦史演出。
。全国こども・おやこ劇場へは前記二作及び、新作「ラレ子ちゃん、がんばれ!」(いじめられっ子ものがたり) 道井直次作・演出が9月よりスタートする。

(545 大阪市阿倍野区文ノ里四一八一六
〇六一六二二二二二)

京浜協同劇団

もうすぐ雨畑ゼミナール、みなさんと会えることを楽しみにしています。

私たちの劇団は、創立から二十七年になりますが、創立メンバーのうち六人が今でも先頭になってがんばっています。劇団員の子供たちも大きくなり、今年には「ある馬の物語」で二十才前後の若者三人が出演、「さんねん峠」で中学生一人がそれぞれ出演してくれました。二十代の劇団員が少なかったのですが、新人(第二十八期研究生)をふやすことを今年の最大の課題にしようとしてくんでいて、いま八人の応募者があり、最終的には二けたにいきそうです。中沢研郎、瀬谷やほ子、宮川淳子の三人が新人担当となって六月からスタートしました。
第四十四回公演「ある馬の物語」(トルス

トイ原作、ロゾフスキイ脚色、桜井郁子訳）は、音楽の安達元彦氏、振付の西田堯氏をはじめ多くの人たちの協力を得て、細田寿郎の演出で四会場でハステージをやりました。歌あり、踊りあり、生演奏のドラマにしました。が、おかげさまでうれしい評価をいただくことができたようです。また、山本忠利が初めて制作を担当しましたが、川崎南部、横浜の二会場という従来のパターンから新しく東京と川崎北部地域に進出、開拓、公演に挑戦し、新しい観客を八百名ふやすことができました。劇団員二十九名で二千六百人の観客でしたので一人当たり約九十名とがんばりました。

新しい演出者を育てようということで、今年秋の公演では藤井康雄らが中心となってりくむことになり、七月初旬には作品を決定する予定です。来年は広島島の原爆のことを、雑唱劇として上演しようと、現在月曜会の土屋清氏にお願いしているところで、中沢研郎の演出でいきたいと思っています。

(211) 川崎市幸区古市場二一〇九
〇四四一五一―四九五二
劇団・伊丹市民劇場・やぎ
拜啓、蛙の合唱もにぎやかな今日この頃で

すが、全国の劇団の皆様も公演活動でにぎやかなことと思います。

さて私共劇団も創立15周年記念公演の第一弾「ねんねの森の子守うた」(作・小島真木、演出・うま・たろう)も6月15日(日)於伊丹市立鴻池小、6月29日(日)於伊丹市立面小と上演を行い、あとは7月6日(日)於伊丹市立中央公民館を残すのみとなりました。秋の公演日が決まりました。11月29日、30日、於伊丹市立文化会館です。上演作品は目下選定中です。国際平和年にふさわしいものと劇団員一同考えております。また、この公演は兵庫県民劇場公演として後援を頂いております。敬具。(字間太郎)

664 伊丹市千僧字船原二〇一九 坂上芳
〇七二七七八―一六五五〇
東京芸術座

まず、大橋喜一氏の新作「あわて暮やぶけ芝居・東京空襲3・10」(悲劇喜劇四月号掲載)の公演延期をお知らせ致します。
東京芸術座では、長年あたたためてきた「東京空襲」を素材とした芝居を、大橋喜一氏の書き下ろし作品として上演致します。東京芸術座は、この作品を創造的にも運動的にも是非とも成功させるため、公演時期を来年三

9月「12人の怒れる男たち」稲垣純演出。

砂防会館ホール
11月アトリエ公演 作品未定

3月「あわて暮やぶけ芝居 東京空襲3
・10」大橋喜一作 川池文司演出
(117) 東京都練馬区下石神井4ノ19ノ11
〇三一九九七―四三三四一
劇団未末

86年の前半の劇団活動の特徴は一口に云って「初心にかえって」でした。4月に4人の新人を迎え、共に第6回小劇場公演「手紙」をとりくむなかで、劇団の古手も、あれこれの我を押えて、初々しく公演成功にむけて行動しました。大道具、小道具製作の全員参加なども、そのあらわれでしょう。いわゆる今までの若手が全員、父となり、母となりという年ですが、彼と彼女達が懸命にがんばったのも大変力になりました。

さて後半の活動ですが秋は稽古公演です。ステージを数多く踏むことから掘る創造の楽しさを久しぶりに味わおう。稽古場のある西区のお客さんとふれあおう、というものです。(10ステージ以上、レバ未定)

夏の総会・ゼミナールでは仲間のみなさまの奮闘ぶりからも多くのものを学びたいと期

待っています。

きびしい夏に向う折柄、萩坂編集長の益々の御健闘を。

550 大阪市西区江之子島一七七一
新うつぼビル4F
〇六一四四七―〇三〇二一
劇団どろ

拜啓、いよいよ夏本番、全り演の皆様、如何おすごしでしょうか、連日御健闘のことと思ひます。
四月に原発事故があつた、岡安伸治作品「とおやんせ」を公演いたしました。岡安さんには公演にあたり色々とお世話になり、ありがとうございます。
びっくりしたのは、公演二週間後にソ連原発事故のニュースが全世界を覆い、現実のものとなった事でした。みんな複雑な不可思議な顔をしておりました。

いま私達は二人の新人を迎え、移動公演用の児童劇の仕込みと十月公演(兵庫県民創作劇場)の、かたおかしう作品「大阪城の虎」を劇団「七」と合同で稽古中です。(一貫)

652 神戸市兵庫区大開通七四一七
谷垣ビル4F
〇七八一五七六―一六四八八

月上旬に変更することにしました。現在、演出者を中心に創造プランを煮詰め、制作部を中心に東京空襲を記録する会をはじめ多くの団体や個人の方々と切り結びながら、公演準備を進めています。公演の折りには、皆さん是非ご覧下さい。

さて、今年の活動ですが、四月に東京芸術座八おやこ名作劇場としてスタートした村山亜土作「新・さるかに合戦」は、夏休み児童演劇フェスティバルに参加し、七月二十七日に東京・渋谷の児童館で再演致します。

又、九月には、二年半前にアトリエ公演で好評を博したレジナルド・ローズ作「12人の怒れる男たち」を砂防会館ホールで上演致します。今回はアトリエとは違い、広い空間で緊迫したドラマがどう展開されるか期待されています。

今年の全国公演は、松谷みよ子原作「私のアンネ・フランク」と吉村昭原作「ふん・しいほるとの娘」の二作品が学校公演で各地を巡演し、一般公演としては勝山俊作「回転軸」を実行委員会形式で巡演しています。又、秋には、劇団のアトリエを中心に規模の公演を予定しています。これからの東京公演予定

劇団からっかせ

劇団では今、七月の「きつねとぶどう」の公演に向けて大へんあわただしい日々を送っています。この63号が発行されるころには、すでに無事公演を終えていることと思ひますが、とにかく現段階では、装置、小道具の製作が大巾に遅れている上に一ヶ月前の配役の変更、役者はセリフがなかなか入らないといった状態で、まさにてんでこまひです。

この公演が終ると11月から移動公演する予定の「ベッカコンコ鬼」の稽古に入ります。なお、からっかせでは稽古場を建設中でしたが今の状態ではとも稽古場作りまで手が回らないということで、こちらは一時中断です。いつ再開できるかわかりません。

さて、そんなことより、8月23・24日はいよいよ東会議ゼミナールです。我々も七月公演終えたら、やまなみ、静芸のみなさんと協力して東会議の仲間を迎えるために万全を期するつもりです。

八月に雨畑で会えるのを楽しみにしています。よろしく。
(430) 浜松市鴨江四一―一八一三 布施方
〇五三四一五三一―九二八九
仙台小劇場

とぎげんいかがですか、仙台はしっとりとした雨つづきの曇り空が続いています。選挙の盛り上り方にもなんだか曇り空が暗示しているように思えます。

今年の春の公演は、候補作品が、読みの段階で上演許可がおりないことが決定して、一昨上演した「ある馬の物語」を再演するという事に切り換わりました。その「ある馬の物語」は五月十日・十一日と上演しました。

途中、一ヶ月あまり、演出の石垣政裕が抜けざるをえないことになり(海外へ、学会の出席、その他)困難な状況が予想されましたが、半面、再演ということにも救われ、前よりもいっそう、劇団員の結束を高めることにもつなげたように思います。

そして今年の夏の公演「アリババと四十人の盗賊」(脚本・こばやしひろし、演出・石垣政裕 音楽・小波秀雄)と続きます。

公演日 八月二三(土)二四(日)日の計四ステージ。

いつも反省会で制作の遅れが問題となっていますが、今年は早くから始まりました。出足は好調です。共にがんばりましょう。

(沢口)

(980 仙台市五橋一五一一三)

平和友好会館2F
〇三二一六四一三三四〇

劇団すがお

劇団は今年十二月創立二十五周年になります。記念公演第一弾、「花咲くチェリー」(ロバート・ポルト/作、木村光一/訳、佐藤かずよし/演出)が、本番七月十二日(土)十三日(日)の両日二ステージをめざして、今猛練習追いこみがつづいています。

重厚な作品でもあり、きめ細い演出、役者ひとりひとりにも、微妙な演技力が必要とされるのとあって、稽古日程も、五月中旬から、土、日曜も含め、週三回昼・夜の稽古を重ねてきました。が、どうやら、七月四日現在、かたちが出来てきたという状況で、みんな少しあせってきているようです。

稽古も稽古ですが、いっばう、観客を動員する制作の方も大変です。今日は、この制作活動を中心に報告します。

十五名中常時、劇団へこれる団員十一名ぐらい、制作部がありながら、そこに所属する団員も、キャスト、スタッフについてしまいい結局、代表の加藤がひとり、制作を一年に引受け、連日連夜かまわっている。

特に、桑名市民会館での一般公演は、なん

と、五年前の二〇周年公演「奇跡の人」以来とあって、劇団のアピールも可成り薄れてきています。にしても、二五周年公演、劇団の歴史の節目にも、出来るだけ多くの観客を動員することも、財政的にも必至であります。

地元、教育委員会、民主団体、高校演劇部、プレイガイド等だけでなく、市議員、PTA連絡協議会、婦人会、桑名、員弁、教職員組合、北勢高教組と、中広く協力を呼びかけ、とにかくチケットを置いて、お願いしてくるという仕事を終えたところですよ。

折りからの、衆参同時選挙戦も、チケット普及にいくらか、関心度ははばんでいる。先頭になって動いている加藤も、そう職場を休めない、私(若葉)も、日中、仕事のあい間をぬって活動しても、わずかな事しか、進んでいかない。

しかし、七月二日朝、桑名市、員弁の一部長島町等、全地域へ、一般新聞折りこみ広告B4判両面チラシ約五万枚が配布されました。これは、永年劇団の支援者である、昭和印刷社長の御厚意で、片面会社宣伝片面「花咲くチェリー公演」を印刷したものでした。

稽古の追いこみとともに、これまでの宣伝力が、どれだけの反響を示すか、それは、初

日を迎えてみなければ、未知数であることを気にしながら、報告を終わります。

劇団は、このあと、十月二十五日(土)二十六日(日)桑名市民会館で、「アンネの日記」再演一般公演、そして、日程は決定していませんが、三重郡多度町教育振興会主催の公演恒例員弁郡下六橋の中学校公演、いづれも「アンネの日記」をもって、十一月中巡演する予定です。

「花咲くチェリー」の公演が終ると、劇団にとって、今年も夏枯れの時季、八月二日三日に日本中で、一番やかましい祭り、石取り祭り、お盆、劇団員が揃わない時季、出てくる団員だけで、七月二十五日(金)から毎週金曜三回、小中学生向け「納涼映画会」を、稽古場外で計画しております。

そして、八月二十三日、雨畑で、東り演のみなさんとお会いするまでは、本格的活動は休みかも……少し生々しかったかな。

(511 桑名市森忠睦美丘一〇五八)

〇五九四一三一一四二二〇

劇団新芸

こんにちは。今年の小樽は冷夏で七月に入っただというのに早朝や晩にはストロップをたいてる家もある程です。

さて秋の公演は、労働会館で、十月四日か五日にジュークス三木作「愛さずにはいられない」を上演します。入団三年目の平山良昭の初演出です。主役、準主役四名は決まって七月中旬から立稽古に入ります。クラスメートになるキャストが多数不足しています。(特に男性)前途多難です。しかしやってくるうちに、絶対出来るという過大な楽観の中におります。

今まで稽古場は一回づつ借り歩いていたのですが、週二回相生会館を借りられるようになりました。春に「北風のくれたテール」を上演した時、協力的だった町会の会館です。山田洋次監督作品を自主上映しておられる会の主力メンバーの作久間さんという菅理人さんのご支援のおかげです。

今年新芸は20周年なのですが、記念行事の行動は行なっておりません。公演活動さえ手が足りないのが一番大きな要因です。

内部で言えば創立メンバーは団費は払ってくれるけど何もしない方一名のみで、今活動してゆけるのは代表の鹿角を除けば、ここ数年の入団者の力です。20年分の組織や創造活動の蓄積がある訳じゃない、今の団員から見ればピンと来ないし、反発を感じる人もいる

訳です。

ただ創立半年後に入団してから今まで中心で芝居を創り続け、新人を育て続けてくれた代表の鹿角に対して、少数だけど支援し続けてくださったお客さんや協力者には御礼を言いたいです。(宮津泰子)

(047-02 小樽市銭函三二一三一六一)

鹿角方

〇三三四一六一三二五五四

劇団はぐるま

久しぶりの劇団通信で何を、どう書き始めてよいものやら迷ってしまう状態ですが、とにかく長らくのごぶさた申訳ありませんでした。いろいろ裏の事情もありました。ですが、そんなところは大きな目で見てください、どうかお許しの程を。今回より気分一新担当者も変わったことですよ……。

昨年「リア王」「ジックと豆の木」、そして若い層を中心とした「星月夜物語」

(作・北村想、演出・内田薫)を上演してきましたが、今年に入ってから二月に「教室」(作・山田太一、演出・汲田正子)を上演しました。これは62号誌上で萩坂さんの「観劇雑感」に詳しいので細かくは述べませんが、立見も出る盛況で、教育問題に寄せる

人々の関心の高さを再認識させられました。はぐるまの原点とも言える教育問題、いづれ再演したいものです。

さて「ジャックと豆の木」の移動公演を終わり、現在取り組んでいるのが、15年目を迎えた夏休み親子の劇場「龍の子太郎」(松谷みよ子原作、藤本昭脚色、浦田ひさし演出)です。

これは7月19・20・21日と7ステージを予定しています。とにかく子供たちに楽しんでもらおうと毎回工夫をこらすのですが、今年が目玉としては太鼓の生演奏、竜のつくりも、山くずれの場面での屋台くずし、と言ったところでしょうか。特に太鼓については、パチを持つのも初めて、という研究生も含めて熱の入った稽古が続いています。ちなみに今年の研究生(第20期)は男8、女7の総勢15名、実習公演とは言え、全員出られる訳ではありませんが、初めての大舞台に皆張り切っています。

秋以降のスケジュールをお伝えしておきましょう。十一月には全国ゼミでもおなじみのろう劇団「いぶき」との合同公演「安寿と厨子王」をアジアろう者会議(大会)で記念公演します。所は京都子ども会館。

玉会館大ホール。

なお埼玉県で去年から交付されることになった文化振興基金(一団体一回三十万円)を「どん太の橋」公演で受け、更に「仏さわぎ」でも受けることになっています。以上。

(330) 大宮市染谷一七一一四

〇四八六一八四一三〇八二二

演劇集団「石るつ」

。秋公演に向けて、創作劇の準備中。

。DDR(ドイツ民主共和国)労働者演劇と国民文化会議・東働演の国際交流が今年も行われた。

今年DDRのシュテンドールで21回労働者演劇フェスティバルがあり、国民文化、東働演の代表団四名(山部芳秀団長・国民文化会議事務局)が六月十六日から二十六日までDDR文化省より招待された。

四名の日本代表団のうち、石るつからは境野エリコ、匹田秋子の二名が参加し、初の女性代表団員が成りたちました。

尚シュテンドールはベルリンから北へ車で三時間の都市です。(境野修次)

(135) 江東区白河二一三一一八

吉川複写工業㈱内 境野気付

〇三一六四二一六三三三

十二月には「11びきのネコの再演。八七年二月には、こばやしひろしの書き下ろし「カナナの咲き乱れるはてし遠い戦争よ」を御浪町ホールで、また秋には中国青年芸術劇場から女流演出家陳顯先生を迎えて、こばやしが北京で観て興奮したという「紅鼻子」(フォンピーズ)を上演の予定です。

日本で初めという、この、日中の合同公演を含め、劇団はぐるまはまだまだ忙しくなりそうです。ああ、スベアの体が二つ三つ欲しい!と思う今日この頃です。担当は内田薫でした。

(500) 岐阜市西野町一丁目

〇五八二一六五一八五二二

劇団埼玉

みなさんこんにちは。

前号では原稿の切目を忘れて通信を送りそねましたので、今年の春の活動を簡単に報告します。

劇団埼玉公演No.48・親子劇場No.5

「どん太の橋」作・岡田律子 演出・川村武夫 三月十五日(三)ステージ・上尾コミュニティセンター

演劇と音楽の集い——演劇・埼玉「結婚の申込」 脚本・伊賀山昌三 演出

・由布木一平/音楽・クラリネット演奏とバリトン独唱 三月二十九日(二)ステージ・上尾福祉会館

「どん太の橋」では埼玉として二度目の創作児童劇で親子劇場を持つことが出来ました。地域に実行委員会——保育園・児童保育所・小・中学校の演劇を愛する先生たちを中心とした——をつくって普及活動を進めました。劇団の当初の予定より一ステージふやして三ステージとし、約九五〇名の子どもたちに観てもらいました。

演劇と音楽の集い——は初めての試みでしたが、——準備期間も短かったのですが——舞台の面でも、普及の面でも不十分さが残りました。

現在は公演No.49「仏さわぎ」(作・東川宗彦 演出・由布木一平)の稽古が最終ラウンドに入っています。公演日時・七月十五・六・七日 PM六時四十五分 場所・浦和文化センター小ホール(三ステージ) 十三年振りの再演です。

年内決まっている活動は、田山花袋の「田舎教師」(脚色・一柳俊邦 演出・由布木一平)を埼玉会館企画の県民劇場として上演することです。時期は十二月七日(日)、場所は埼玉

劇団やませ

六月中旬より「やませ」が吹き、毎日、じめじめした肌寒い毎日が続いています。七月に入っても、十度をようやく越えるという気温で、コタツ・ストーブはまだまだ離せません。冷害の心配もされています。

さて芝居の方の「やませ」はといいますと、五月に奥羽ブロックゼミナールを開き、高校生を含めると六十人近くの参加でした。また、講師の城谷護さん、千田隼生さんには、遠く八戸までおいで下さいまして、本当にありがとうございました。

七月初めに予定していた子ども劇場は主催者側の都合で中止になり、いささかがっかりしているのですが、気をとり直して、秋の公演に向かうことになりました。出し物は「乙因一わが愛(仮題)」で、江戸末期、八戸に在住していた俳人乙因を通し、愛・人生と俳句をテーマにした芝居です。例のごとく、榎谷の筆は遅れており、団員一同、懸命に尻を叩いておられます。十年振りの時代物。さて、どんなものになりますか。公演日は十一月十九日です。(風張)

031 八戸市鮫町蕪島町一四 榎谷方

〇一七八一三三一一九一三

劇団群馬中芸

去る五月十七日に第22回子ども劇場「やけあとのブレイメン楽団」(中村欽一・作、ふじたあさや・演出)、佐波郡の玉村中央小学校で試演会として発表されました。

この作品は九月より、県内小・中学校にて上演を開始致しますが、終戦後四人の浮浪児たちが力を合せて生きていくお話ですが、手づくりの楽器も活躍し、大変楽しい芝居になりました。

七月三十一日・八月一日・二日と群馬県伊香保中学校で「郵便屋のテクルさんと宛名のない手紙」(三十一日・一日)「やけあとのブレイメン楽団」(二日)、いづれも夜七時より上演されますが、これは全国の音楽教育の会の全国大会の中でたたく先生の先生や保母さんたちに見ていただくことになっています。また、「郵便屋のテクルさんと宛名のない手紙」も九月以降も上演を続けます。

なお、小班作品を創りたいとの考えから、今作品をさがしていますが、さねとう・あきら作、ふじたあさや脚色の「おくんじょうるり」等候補作品になっております。暑い夏にむけて夏休み前まで学校公演も続くので、皆、もうひとふんばりといったところです。

(宮島幸子)

(371) 前橋市昭和町三一五一―二

〇二七二―三二〇五五〇

演劇集団土くれ

武蔵野の地域劇団「新芸座」とのジョイント公演が終りました。六月六日から八日まで、武蔵野芸能劇場での四ステージ。

大藪育子・作「ろぼ」(新芸座)、山田太一・作「教員室」(土くれ)の舞台六五四名の観客を迎え、各ステージとも立見が出るほどの盛況のなかで幕を降ろしました。集約したアンケートは二〇〇枚でした。土くれとしては七年ぶりの武蔵野公演。舞台の評価も企画も大旨成功と言えます。

①武蔵野地区は土くれとして制作基盤がほとんど無いといって良いところ。公演成功のために、休暇を供出しての地域オルグ、電話作戦など今後の活動に重要な経験を持つことができました。

②東働演の訪独団の一員として、集団から久藤が石るつの仲間と共に六月十二日から二十九日まで渡独しました。

③来年の二〇周年記念の公演を創作でという方針でしたが諸般の事情から大変厳しくなっています。

④この秋の第三回公演、作品決定に向けて現在鋭意検討中です。上演意欲と集団事情、共に満足できる作品はますます数少なくなっているようです。(文責・石塚)

(120) 東京都足立区東和五十二―七

東和ファイナンス一〇三 石塚方

〇三一六二九―三二八六

演劇サークルトラム

御無沙汰致しております。演劇サークル・トラムでは去る六月二日に第19回山口こども劇場として「ブレイメンの音楽隊」を上演しました。

山口市郊外の小学校の体育館での公演で初めての場所でしたので何人観に来てくれるか不安でしたが、当日はあいにくの雨にもかかわらず、午前、午後の2ステージで九五〇人を超える子供達が集まり、大盛況でした。

この「ブレイメン音楽隊」はトラムにとっでの初めての歌と踊りの入った芝居で勝手が少々違い、踊りや歌に四苦、八苦でした。全体的に楽しい舞台だったと好評でした。

このこども劇場に出演のため、昨年に引きつづいて宇部で上演された、「今日、私はりんごの木を植える」には一人しか出演出来ず残念でした。

これから先の計画は、この「ブレイメンの音楽隊」をもっと練り上げ、秋におこなわれる「山口市中央公民館まつり」に、山口県人形劇フェスティバルに再演の予定、又、山口市民文化祭にも中原中也の詩の朗読やマイムで出演予定です。

(753) 山口市東山二一九一〇藤原多美子

〇八三九二―二〇三九三

アート・ステージくしる

二月から三月にかけて実施した「演劇入門セミナー・パートⅢ」は十名の参加者を得て好評のうちに終了しました。

このあと六月二十一日、劇団の公演とセミナー修了の発表会をかねて、「あなたと私のパフォーマンズ」として朗読とふたり芝居(ギイ・フォウワイ作「動機」)を、釧路市民文化会館で、演出をセミナーの講師の北山樵兵氏で上演しました。観客の動員はいまいちでしたが、舞台の出来はすこぶる好評でした。

転勤、異動、退団から、メンバー四人の公演でしたが応援団の力を借りて、実のある舞台を創ったと確信しております。

十月に、ことし二度目の公演を準備、目下少数メンバーで、どのようにふくらませるか、

プランを練っています。ご注目下さい。

(085) 釧路市貝塚一六一九 加藤方

〇一五四―四二一八〇〇九

劇団同胞

5月10日第15回公演「冒険者たち」(作・斉藤博夫、脚色・大門正、演出・沢田和彦)を終える。昨年11月にひき続いての再演で、観客数は少々寂しかったが、脚本、役づくり、スタッフの面では、さらに練り上げられ、整理されたかと思う。

7月5日/6日、北海道演劇祭(第12回)に「シェルター」(作・北村想、演出・沢田和彦)を公演。

10月10日、劇団絵夢公演「夏の夜の夢」にスタッフ、エキストラなどで協力予定。(前回、前々回の「冒険者たち」の公演のときは応援を受けた。)

11月11日、第16回公演を予定。現在台本脚色中。

(071) 13 旭川市末広四条八丁目 高桑方

〇一六六一五七―三三八三六

神戸職演連

こんにちは！御無沙汰しております。

今年、喫茶店公演という新しい試みで幕をあけました。作品は、ニール・サイモン他

の短篇四本。結果は予想外の大入り満員でした。

そして4月14・15日には職演連では珍しくソビエト戯曲ローゾフ作「グッド・ラック」を上演。舞台成果はまずまずでしたが、活況になるはずのサークル内は、昨年来めだちはじめていたサークル員減少問題が深刻化。いま新人募集に苦心しています。

活動の方は、八月に行なわれる「演劇甲子園」にむけて全力投球中です。

「ん？甲子園？」と思われる方！実は劇団大阪、京都の演劇サークル瞬、そして我が職演連の三劇団は大阪にあるオレンジルームで、夏の甲子園大会をやるとういうことになりました。興味深いと思いませんか？

私たちは、芳地隆介作「幽霊哀話」を上演します。わかりにくい部分があったり、あれこれ意見を出し合いながら、けい古にも熱が入ってきています。

では、また！夏の演劇講座でお会いできるを楽しみにしています。

(650) 神戸市中央区下山手通九一九一七

西藤ビル2F

〇七八一三五―一六九六九

劇団四紀会

七月とは思えぬ涼しさの今日このごろです。いかがお過しでしょう。四月から四紀会の公演活動のご報告を。

賛否両論、国内で渦巻く中、4ステージ、約二〇〇名。4/26/29。「真夜中のパティ」。

18期生卒公演、2ステージ、三〇〇名。6/7/8。「海鳴」。

移動公演、5/18「大工と鬼」5/31「汽車のヤエモン」「リスとくるみの木」

併せて来年四月に迫った30周年記念公演のための会議。と、あわただしい日々が続くのは、いずこも同じでしょう。

9月5・6・7日の市民劇場公演も正式に上演許可が下り、けい古場に時ならぬナツメロが流れております。「きらめく星座」。井上ひさし作、江口慶一演出で、戦争前夜の暗く、苦しい生活の中でも明るさを失わない庶民の生活を厳しくみつめ直す作品です。ぜひ御覧下さい。

ではまた、夏のゼミでお目にかかるのを楽しみに、お元気で。

(650) 神戸市中央区元町通二一九

元町プラザ六一二

〇七八一三九二―二四二二

劇団夜明け

30周年記念公演No.1として、6月28・29日に行なった三回目の親と子の劇場「11ぴきのネコ」で劇団創立後最高の入場者数(2ステージ二四〇〇名)となり、地域の協力してくれた多くの人に感謝するとともに、更にいい舞台創りのために努力しなければと新たな意欲に燃えています。

また初めての試みとして行なう、親と子の劇場の、恵那移動公演(7/13)のチケット売り、再創造に全力で取組んでいます。

地域の人達に愛される劇団になろう、そして文化会館の広いステージで公演することによって創造力をつけようと始めた親と子の劇場も今年で三年目、年々、楽しみに待っていてくれるお客さんが増えていることは嬉しいことです。創造力を高める、スタッフの力量を高めることは大変むづかしいことです。

公演を通してどれだけ学んでいけるか、安易に妥協することなく厳しく創造的に向う姿勢で、不十分であることを感じない訳にはいきません。夏の総会、ゼミで多くを学べることを楽しみにしています。

次回公演予定。創立30周年記念公演No.2。10年ぶりの稽古場公演 10月下旬10ステージ。

508 中津川市北野丸山

○五七三六一六〇三六
劇団上野市民劇場

全り演の皆さん、こんにちは！
三重県の伊賀は盆地なので暑さは一段と厳しく、少々グロッキー気味です。

さて今年には創立35周年に当たりますが、それにも現在夏の親子劇場、さねとうあきら作、ふじたあさや脚色、ふくきたわかつ演出「べっかんこおに」の公演を控え、総選挙のダブリの中で民主陣営の躍進を期待して厳しいけい古を進めています。

また八月以降、小中学校への移動公演を予定しています。8月23・24日、東り演ゼミには数名参加する予定です。では、ゼミで会いましょう。

「べっかんこおに」公演

7月12日 14・30 19時 上野文化ホール
7月29日 19時 名張市青少年センター
518 上野市丸ノ内・共同ビル3F

○五九五二一三二五二二
(編集部より。61号に所載の加盟劇団の名簿での劇団上野市民劇場の郵便番号を518に訂正します。)

演劇集団土の会

ひきつづき劇団展望の「第三帝国の恐怖と貧困」のけい古に参加しています。また、劇団埼玉の公演「佛さわざ」(7月15・17日)に小早川が出演する予定です。(佐藤)

(177 東京都練馬区大泉学園町7-15-30

○三一九二四一六一〇七

名古屋演劇集団

'86名古屋演劇フェスティバル参加、水上勉作、浦はじめ演出で「釈迦内極限」を名演小劇場で6月13日・15日、5ステージで公演を終えました。

公演は私達が願っていた以上の好評を頂きました。「感動した」「涙が止まらなかった」「久しぶりのよい芝居だった」等々、数多い声が集まり、苦勞して頑張ってきた良かった、劇団員一同大変喜んで居ります。

苦勞と言えは公演の五日前に急病で代役を立て、なんとか公演を乗り切り、一致団結した舞台作りとなりました。

この好評さを持続していくために、現在秋の公演にむけてレパートリーを精力的に選定中です。

又劇団の若手を中心に、若尾正也演出で、

ノエル・カワード作「陽気な幽霊」を8月下旬から9月上旬にかけて稽古場上演の予定です。鮮度の高い舞台をめざして頑張って取組んでいます。

(451 名古屋市西区庄内通四一六一三

○五二一五二四一五九七五)

劇団やまなみ

①6月20日、21日と、県民会館小ホールで岡安伸治作「別れが辻」を上演。観客二〇〇名。回収されたアンケートは約20%、「今までのやまなみの芝居とちがって(これが最大の讚辞デス)楽しみ、人間の生きていく悲しさを感じた」等々、好評でした。が、一週間後の合評会では(ウチワの集りだったこともあり)メタメタに、その落差に、演出はポーゼンとしています。しかし、いつもかけ声ばかりの「多くの地域の文化活動家と手をとりあって」ということが、写真、ビデオ、音楽、ダンス等々各分野の方々との惜しみない協力作業によってタネをまくことができたと思います。21日には多忙な中を岡安様はじめ世に下の皆様に御来場いただき、その後半分徹夜で交流もでき(モハン演技も披露いただき)感激でした。岡安作品は「とおりゃんせ」に続き二本目ですが、さらに喰いついていき

い。

②この公演中、結婚退団1、多忙にして集中不可能3、舞監の入院、役者の一人が公演前日交通事故にて入院、原因不明の劇団活動ボイコット1と、近年にない危機的状況が押し寄せましたが、皆で励ましあって当日を乗り切りました。山中鹿之介の心境です(古いなアー!)

③秋は11月13・14日、県民文化小ホールにて水木亮・作「甲州釜無河原血蚩乱舞」(ゆめちるさとじごくのふえすていばる)の三劇団合同公演。7月からケイコに入る予定。

④東会議ゼミ「サマー・フェスティバル・イン雨畑」が近づいてきました。②の影響もあり、不慣れで、ひよわな事務局で、皆様心配させていることと思いますが、成功のため、残った日時を最大限に奮闘いたします。

(400 甲府市青沼一八八五 梅津方
○五五二一三三一九五五六)

演劇集団わだち

みなさん、コンニチワ。
昨年の11月から大阪堺市の堺市民懇談会の方々と共同作業として「炎の街から」(作・奥村和己、佐伯洋、松本喜久夫、宮階延男、

演出・又川邦義)をとり組み、やっと終わった所です。堺で3ステージ、大阪森の宮、春の演劇まつり参加として、2ステージ、合計5

ステージ。会場が狭い(60名近い登場人物)ということと、立って観るのはしんどいという注文を受けた外は大成功で、しかも黒字になりそうというおまけまでつきました。嬉しいことです。又、市民懇との共同作業ということとは、これからの劇団活動に一つの道を拓いたようにも思えます。

秋の公演は、この所、創作活動おう盛な奥村和己の作品を、と考えていますが、まだ決めておりません。とにかく第三期演劇スクールに向けて、夏のレクにおもいきり羽を伸ばして……と考えているところです。今後ともよろしく。

(563 大阪市福島区福島六二二一七
川村ビル 4F

○六一四五八一三五五)

劇団河童

どうしても仕事の関係で、演劇祭(美唄)に参加できず残念です。
河童も今年で30年を迎えました。記念公演の演出に鈴木喜三夫氏(元劇団さっぽろ)を迎え、「アンネの日記」に取り組んでいます。

「アンネの日記」は、北見おやこ劇場からの要望もあり、再演ですが、いろいろと勉強になっていきます。創作との声もありましたが：一昨年、久しぶりに石上先生の作品「津軽姥捨口仏」を上演しました。この作品は昨年地方公演をいたしました。来年は又、石上先生方公演を予定しています。

記念公演は10月18日ですが、8月に入ってからには稽古場を我が家に移して、立ち稽古に入る予定です。

あれやこれや話したいことがいっぱいあります。もし出来ることなら（美唄から）北見まで足を伸ばしませんか？ 原稿、ありがとございました。

（扇谷国男）
（990）北見市幸町八三三四 扇谷方）
〇一五七二四一三三五七

（註・これは萩坂あての私信の部分であるが何分にも北見の劇団河童からのたよりは破格のことなので、敢て盗用しておく。原稿ありがとうとあるのは、河童の30周年記念誌に対する私のメッセージのことである「桃」）
劇団2月・コロロ
皆さま、お忙しい毎日をお過ごしのことと存じます。劇団2月コロロは、'86大阪新劇フェスティバルにむけて、オルグに稽古に多忙な

毎日です。宮本研・作、大岡欽治（潮流）演出、坪井敦己（劇団コロロ）演出助手による「美しきものの伝説」を、劇団潮流と合同で、10月1・2・3日と大阪郵便貯金会館で公演致します。

潮流さんとの初競演ということで創造部の方も大変緊張、燃えています。

なお、従来のけい古場が市の道路計画により立ち退きになりましたが、この度、地下鉄「あびこ駅」より徒歩10分のところに新けい古場を設けました。お近くにおいでの際は、ぜひお立ち寄り下さいませ。

（546）大阪市東住吉区中野一四一五
〇六一七〇五二八〇五

けい古場は
（546）大阪市住吉区新田八十一一九
〇六一六九六一三三〇

劇団大阪

全り演のみなさん、こんにちば。

劇団大阪では五月の春の演劇まつり参加作品「翼は心につけて」を終え、今は夏・秋の公演及び若手・研究生中心の研究会公演と三班に分れて取組んでいます。

夏の公演は、演劇甲子園・京阪神大会と銘うって、神戸職演連、演劇サークル・瞬、

劇団大阪の3劇団が、8月8・9・10日、オレンジルームにて各々の出しもので競演します。前回は同じ3劇団で、劇団大阪のけい古場で行なったのですが、今年は一まわり大きな取組みにしようと頑張っています。

秋の公演は、11月21日22日、近鉄劇場小ホールにて、山田太一・作、堀江ひろゆき・演出による「教員室」を上演致します。登場人物がほとんど出ずっぱりの芝居なので、ベテラン中心に、迫力のある舞台にしたいと思っています。

では、夏の総会・ゼミナルでお会いできることを楽しみにしております。

（542）大阪市南区谷町七一一三九一〇三
〇六一七六八八九五七

劇団展望

ブレヒトの『第三帝国の恐怖と貧困』に拠って演技を中心にした「表現」の再点検作業を継続中です。課題の一つに、具体的に演じていく行動造形段階では、主としてテールル稽古などで討論された解釈や表現上の要点などを、どのようにうまく機能させ、活用できるか、というのがあります。例えば私達がおちいりやすい失敗は「重要な」必要だ」と話し合ったことが、実際に演じる時には妙に

〇三一三九三一二七三九

劇団潮流

◇一般・高校・中学校巡回公演

「カチカチ山」作・大宰治、演出・藤本栄治

「ゴールデンボーイ」作・クリフォード・オデッツ 潤色・津和野圭 演出・平田一紀

◇小・中学校巡回公演
「ゼロ弾きのゴージュ」原作・宮沢賢治
脚色・高松昌治 演出・浮田孝明

◇一般公演
「カチカチ山」 7月18・19・20日 国立
文楽劇場小ホール。

「美しきものの伝説」作・宮本研 演出・大岡欽治。10月1・2・3日 大阪郵便貯金
ホール（劇団2月・コロロと合同公演。）

以上のスケジュールで頑張っております。
（557）大阪市西成区松一六一一七
〇六一六五八一三二一五

劇団京芸

◇一学期の学校公演としては過去最高のスケジュール（54ステージ）もあと数ステージを残すのみとなりました。ひき続き秋以降も「陽気な地獄破り」で全国の学校・おやこ劇場を駆けめぐります。

◇「商人」の学校公演ではキャストの変更があり、シャイロックに藤沢が、また、神戸の四紀会より梶武史氏が新メンバーとして加わり、残り3ステージを無事終了しました。梶さん本当にありがとうございました。

◇現在、8月京都文化芸術劇場「おばけリンゴ」（谷川俊太郎・作、岡井直道・演出。上演は、八月二十七日〜三十日、於府立文化芸術会館。

15年ぶりのこどもの芝居で、4日間7ステージ、3千名というかつてない規模の公演となります。パントマイム指導に清水きよし氏を迎え、全曲生演奏、演技陣総出演の楽しい芝居にしたいと考えています。（望月敏男）

（612）京都市伏見区納所北城31-18
〇七五一六三二二六〇九

こちら秋田はまだ梅雨明け宣言も出ず、不安定な大気が続いております。

年明け、「滅神社」の再演を企画したんですが農民をめぐる状況は複雑で、とりわけ秋田には大瀧村という問題もあります。そんなわけで今年は見送り、むしろ、その複雑さの解明の為に、地域へもって入っていくということになり、今年「あぜみち公演」

「気を入れて強調」したり、いかにも「ナニカアリゲ」にやってみたりと、役者の思いこみや願望をおもなたよりして演技化されてしまうことです。こういうのを「分っていない」「分ってるよ」、「分ったってできなきや分ってないんだよ」「だっさすぐにはできないよ、待っててよ」、「待っちゃらんないよ、ひとりのために。あと何日で本番か分ってねえんだろ」なんてやっても、フンキ悪くなるだけで、何かできてくるわけでもないで、どーやろーかーという御存知、あたりまえのことの研究なのです。稽古の進行にともなって前の検討が生かされつつ、現に検討され、さらに新しい検討を生み出しながら、いつもいまいち明解な新鮮な具体的な表現に至る、というふうに行く、トモ具合がいいハズなのよねえ……。

研究と言えば、もうひとつ、新作「棄郷」（仮題）上演へむけての準備として、ご近所の指紋捺捺制度反対運動の人達と一緒に、国籍・戸籍をめぐるトラブルの実例研究会をはじめたところです。略称「トラ研」。そのうち「飲み会」に機能転換しちゃうたりして……。

（樋口鶴子）
（166）東京都杉並区阿佐谷南3-3-32

を、この秋、演ることになりました。太鼓と落語劇の二本立てです。その報告は次号にて。

(018-31) 秋田県山本郡二ツ井町

下野家後71-3 工藤方

〇一八五-七三-一五六〇(二)

劇団息吹

春の公演「奇跡の人」も無事(?)終わり、ホッとするのもつかの間、また、いつものような忙しい夏をむかえてしまいました。

「奇跡の人」では予定していた動員(一、六〇〇名)達成したものの、多額の赤字を抱え、あたまを痛めております。しかしお客さんの反応は良く、約八ヶ月かけてやって来て、よかったなァという実感です。

秋に学校公演を……という声も多かったのですが、コスト等諸事情により、あきらめざるをえませんでした。

今のところ、秋公演の予定はなく、夏中はお囃子(和太鼓、鉦など)の仕込み練習とその他行事(戦争展など)の参加についてやすこことになりました。9月には研究生講座も予定しています。

今度はきつと来春の公演となるでしょう。あせらず、じっくり、いい芝居をつくっていかうと考えています。

(578) 東大阪市中野二二四-一四

〇七二九-一六四-四四四(一)

劇団河童(二仲)

長らく御無沙汰しておりました、劇団河童です。今年は河童の創立三十周年というひとつの節目を迎えました。聞くところによると地域劇団で三十周年を迎える劇団は少いとか：

しかし、現在の団員数が心細いため、劇団は考えた。去る四月十三日日曜日、北見の様な小さな町では耳にするでもないオーディションなるものを行ったのです。

物珍しさも手伝ってか、オーディションには十六名の男女が集まりました。その中から入団(?)したのは男女九名。

が、しかし、稽古を始めて二ヶ月を過ぎ様としていた今日この頃、仕事の都合で稽古に参加出来ない何名かが挫折してしまいました。おまけに、この公演終ったらやめてしまいう人も何人が居たりして……

結局、団員二十名になるかならないか、になってしまいうです。現在も仕事の都合でなかなか稽古に來れない人もいますが、主役の二人が新人の大学生で、そこそこの稽古に納まっている様です。

記念公演プラス第二十四回一般公演の演目

三月まで地域移動公演として随時公演をしていこうとしています。

◇第10回小劇場公演「陽気なハンス」

(多田徹・作 秋本博子・演出)

7月20日(日)午前10時午後1時4時

於 弘前市上瓦町 スペースステナガ

尚、11/12月公演は辛英尚訳「見張番」を予定しております。

(036) 弘前市品川町一 ブラジル内

〇一七二-一三五-四六七〇(一)

演劇集団末踏

同日選挙の結果をさまざまに思いでかみしめておられることと存じます。

さて四月に上演した創立20周年記念作品、「さよならエデンの谷」は「人類への限りない愛を感じさせる印象深い作品」、特に中高生たちには「ショックだった」「強い刺激として残る」など好評でした。

勿論、生れたばかりの作品まだまだ不満があります。なかでも演技をどう深めるか……!俳優陣の課題は山積していそうです。これらに挑戦しようとして八月七日二時半と六時、渋谷東京都児童館で再演します。

尚この作品は今年度の厚生者・中央児童福祉審議会の推薦作品となりました。

今は二学期に向けて学校公演の準備、20周年記念第二弾の「六号室」の準備と多忙な時期です、寝苦しい夏にならないよう頑張るのみです。

(160) 東京都新宿区新宿一〇一-一五

(島田)

新御苑ビル

〇三-三三-四一九三〇(一)

劇団生活舞台

御無沙汰しております。劇団では秋にむけてA・チェホフ「ナ・ダローゲ」(仮額)の検討に入りました。

また八月二十一日には「国鉄分割・民営化を裁く九州大法廷」の開催に協力します。

(台本人用の方は劇団まで連絡下さい。送付します。)

国鉄分割民営化選挙に対して、この秋、一緒に怒ろうではありませんか。

(815) 福岡市南区高官一丁目4-12-1505

松尾せつ子方

〇九二-一五三-一一一六六(一)

劇団新劇場

前略、取り急ぎ公演結果をお知らせします。

「今日、私はリンゴの木を植える」、5月2日。司法関係者、他ジャンルの文化関係者との友好のもとに、満員の観客の中で成功裡に

は、劇団としては再演の「アンネの日記」に決まりました。演出は、フリーになられた鈴木喜三夫氏で、助演出に扇谷国男と、最高のスタッフをそろえました。日時は十月十八日(土)昼と夜の二回ですが、現在時間の方は決定していません。よろしかったら、物笑いのタネにしに来てやってください。

(住所・電話番号は前出のため省略)

劇団弘演

いっけなくジメジメと梅雨空が続き、うっとおしい気分が晴れないのは、「自民党圧勝」に終わった同日選挙のせいなのか？わが青森でも全議員自民独自の保守王国となり、とりわけ、津軽の良心とも言わべき津川さんを落してしまつたのです。地元新聞では「革新の冬」の時代とか書かれたりしていますが、「革新の冬」も「核兵器の冬」もまっぴらです。捲土重来を期して頑張ります。

さて劇団では、七月二十日(日)の「陽気なハンス」へ向けてラスト・スパート。この作品は、旅のイカケ屋の少年ハンスが、がめつい大百姓のクラークとガミガミ奥さんのグズリンナ夫婦の下で働く、かよわくて泣き虫少女マルチーネを助けて大活躍という、歌あり踊りありの楽しいお芝居で、弘演では来年

終える。

「ブンナよ木からおりてこい」。6月27日札幌一般公演。(札幌B合同。7月6日、道演集演劇祭参加)

尚、やはりと言うべきか、けい古場、一年も満たずに引越しの浮目に。創立メンバー斎藤氏の厚い好意のもとに今度こそ、長期のけい古場にとの構想が練られています。今月中に引越しの予定。

(通信遅れて申訳ありません、載るかどうか、心配です。誌代、追って送ります。)

(N)

(062) 札幌市豊平区豊平千条12丁目3

桶川方

〇一一-八一四-一三四八〇(一)



劇団あしづえです

よろしく

園山土筆

劇団あしづえは、山陰の松江の街に生まれて、今年創立20周年をむかえます。団員は17名、平均年齢29歳です。

演劇を通じて魅力ある人間になろう、を劇団理念にすえて、地域の中で精いっぱい演劇活動を続けてきました。

団員は主に松江市、出雲市周辺から稽古場へ通ってきますが、岡山、広島、宇部からも通っています。島根県の地元へ、岡山県、広島県、山口県から毎週あるいは隔週、車でバスで電車を通っているわけです。理由は主に転勤です。

私自身、広島から12年、宇部から4年、飽きることなく通い続けています。

二年前の転勤シーズンの頃、団員の長見好行から重い口調の電話がありました。

「岡山へ転勤が決定しました。どうしましょ

うか。」

「どういうこと？」

「劇団、続けられるでしょうか。」

「なに言ってるのよ、あんた男でしょ。通えばいいじゃない。岡山なんて近い、近い。」

「そうか、そうですね。」

また、広島に住む有田幸は、

「私も入団したいなあ。」

「通えばいいじゃない。広島からなら、たった180キロ。」

というように訳で、我が劇団では距離の差などは問題になりません。

人さまは、「すごいなあ。」などと、おっしゃいますが、慣れてしまえば別にどうということもないのです。

しかし、よくよく考えてみれば、やはり大変なことですよ。というのは、団員の意志の疎通をスムーズに、情報を正確にスピーディに伝えるためには、さまざまな努力が必要となるからです。長距離電話、郵便(手紙、速達、小包、書留)、ファックス、宅配便を利用し、経費もかかります。

遠距離通いの三人は勿論のこと、松江の稽古場で留守をあずかる三木卓二、畑良治、永瀬悦子たちも大変です。

ですから、隔週の土曜、日曜日に全員が稽古場に集まって、打合せをしたり稽古をした

りする時のしあわせなこと。全員の気持が、今、目の前ですぐに理解できることのありがたさ。

他の劇団ではあたりまえのことが、私たちにとっては特別なことであり、たとえ意見相違で議論になろうとも、いちいち電話をかけた

たりしないですむうれしさは格別です。ということが素地になっているのでしょ

うか、団員の結束は堅く、仲が良く、1人の幽霊団員もなく、明るく爽やかな表情で、劇団活動を続けています。

創立20年にあたって、今年、50人劇場を創ります。そして、ますます地域に根づく劇団となるよう歩き続けます。

劇団 あしづえ

稽古場 〒690 松江市砂子町二〇九一三

TEL 〇八五二一七三〇五〇

(代表・園山土筆)

「炎の街から」を演りおえて

又川邦義

(演劇集団わだち)

「そこ、なんとかならんかなア」
「エッ?昨日はそれでええって言いはった」
「ウン、そら、昨日はそれでヨカッタんや
るなア、そやけどオレのダメ出しは、極端な
話、さっき言うたことと、これから言うこと
は、又違うでエ、アンタかて、昨日のあんた
と今日のあんたとは微妙にちがわへんか?

そう、やはり変んねん、水の流れといっ
しゃや、一見何の変哲もないようで刻々と流
れてんねん、まア、ボクの言うこと信じてエ
なア」

と、まあなんとも無節操な演出ぶりを発揮
しながら、昨年(11月23日)公募で集った市民
俳優との6ヶ月半に及ぶお付き合いが終った
処です。

「私たちの郷土である堺市(大阪府)は、終
戦直前の七月十日に激しい空襲をうけ、旧市

内はほとんど焦土と化しました。あのとき、
非戦闘員である数多くの市民が、女性も、子
どもも、赤ん坊も、空から雨と降る焼夷弾に
よって襲撃され、家を焼かれ、傷つき犠牲と
なり生命を奪われました。

脂汗のしたたる夏がやってくるたびに、空
襲の激しかった終戦前の数ヶ月の悲惨な出来
事を、忘れずに思い起こす市民たちが、今も
多く残っています。もし戦争が半年、あるい
は一年、早く終わっていたら、あの犠牲は払わ
ないでもよかったのに、との悲痛な悔しさを、
今も消し去れないで思いつめて生きている遺
族の方々もいられます(中略)

あの夏から、毎年の夏を数えつつ、今年で
四十年目となりましたが、その当時の事実を
知っている市民は少数となりました。十才の
少年も、今では五十才の熟年となりました。
それより若い人々は、戦争の出来事について、

ほとんど意識に上らない幼少のときの事柄で
あるか、戦後に生まれて戦争を知らない子ど
もたちです。また他の市から転住した人々が
圧倒的に増加しました。それで、堺市の空襲
の痛ましい思い出は、市民の脳裡から消え失
せ、風化しようとしています。

平和で幸せに満ちた市民の生活の増進のた
めの原点として、あの日の悲しむべき歴史上
の出来事を、次代に伝え残しておかねばなり
ません。そして、すべての市民の脳の中に、
戦争犠牲者を悼み、平和を祈念する心を燃や
し続けねばなりません。(後略)

と堺市民懇話会代表世話人の土山牧燕氏は
「恒久平和への前奏曲」と題して『堺の空襲』
誌に書いておられます。

自由と自治・進歩と革新をめざす堺市民総
話会が、「一夜にして死者千八百六十名、全
焼戸数八千九百、一万八千世帯が被災、罹災
人口七万名という大惨事を忘れまい」と、一
九八六年七月に「堺大空襲の犠牲者を追悼し、
平和を祈念する集い」としてよびかけた、そ
の結果、前記の『堺の空襲』史発行、平和の
記念碑建立、そして空襲に材をとった創作戯
曲と、三つの柱を立てた企画が成就したので

ていた。

ケイ古に多少の淀みが出てくると共に、お互いが馴れ合っていると遅刻や欠席が多く、当初の緊張感がうすらいでくる。こちらのイラつきが逆に作用して、ムードが悪くなる。早くキャストイングをしては？という声も挙がるが、これがとても気の重い作業で、女性の役が少ないのに、女性の参加者が多く、男性の数が足りない。この頃、男が欲しいと叫んでいた。

いよいよキャストイング、女性役は6組のダブルキャストを組む、(劇団員の少ない我が集団では考えられないことだ。)なんとか要求に応えたい、全員をつなげたいという欲の表われである。参加した時に頂戴したコメントの多くは、ウラの仕事よりとにかく役が欲しいと記してあったので……。キャストイングがすむと、次のケイ古からばたつと来なくなった人が何人か現れた。気の重い日々である。そして、参加者を代弁してと手紙が届いた。要約すると、主要な3名の女の役を1ステージ毎に組んで欲しい。5ステージだから、これで15名の女性が役につくことが出来る。やめる人を防げるし、チケットも売れるだろ

うし、チームワークも取れる。というものである。私は絶句した。やんわり否定したもののまだ、しばらくはくすぶっていた。曰く、

演出は素人相手に言うことがキツイ、注文が厳しすぎる、劇団の連中がエラそうに言うetc、少々ウンザリしていたのがこの頃である。又、劇団の人間と飲みに行ったものはエエ役がついているとか、AさんはBさんより出席率がいい筈なのに、Bさんにエエ役がまわっている云々という噂も、まことしやかにささやかれていたらしい。私はまだ笑えなかった。笑ってすます程、余裕がなかった。後になつてからだ、こういつた事柄に対して、なんと可愛い人たちだろうと思えたのは……。第一回の合宿はこういつた状態の時に持っていたし、関芸の藤山喜子さんにメイクの指導をお願いして来て頂いたのもこの頃である。少し、創造のことに触れてみよう、台本の一部を。

女将 安田あさ、さんやったな。
あさ はい。
女将 奥で話聞きましょう。大体は中村(女術の役、筆者注)はんから伺うたけど……(あさを促す)

女将、あさを連れて入る。暫く間。

考二 売られてきたんか。
忠義 そうやろ。……今は国許におっても女子挺身隊で工場や。自分から来る方がまだ家のうるおいになるんやろなあ。

二人、あさの連れ去られた暖簾の奥をじっと見ている。

あさ役の女性が抵抗もなくスツとのれんをくぐる、そんなにかんたんにくぐるの？そののれんをくぐるということは人から物になるということやでエトダメ出しをする。この役もダブルだ。が、ダブルの二人とも、何日後にケイ古をしても、さしたる変化がない。泣けんか！という。すると一応泣いては見せる。暫らくその儘である。ついに終ばんに来て、泣くのはその場に来て泣くのではなく、這入るのをためらって、足が動かなくなって、あぐねにつきあがってくるんですよ！その時、女将(これもダブル)はのれんの奥でどうしていますか？手まねきしますか？

引き入れますか？来るのを待ちますか？

段々、熱がはいってくる。音の効果で俳優さんを盛り上げることを考える。3場の明日出征する男との別れの場、海岸の所は、パブロ、カザルスのチェロで「鳥の歌」を流そう、大きな時代の波(効果)がそれを呑みこんでしまふ。ということにしよう。6場の空襲が終った朝の、死体が累々とある所は、バッハのマタイ受難曲の中から「きなさい、娘たちよ」を背景にしよう。やがて、主婦の人たちが、待っている駄目だと感じはじめ昼間、手の空いた時に、劇団ケイ古場で造っている装置や、衣しよう、小道具にせせと動きだした。創ることの楽しさ、手づくりのぬくもりが、徐々に拡がり、ケイ古にはねかえる。又、一五〇〇円が素人の芝居にしては、高くて売れないと消極的だった人たちが、何枚売れたと、満面笑いに包まれてケイ古場にとびこんでくると、確かな手応えが感じられ、ケイ古が弾んでくる。そして、全員の目は絶対に成功さすんだという風に輝いてくる。

ともあれ、創造過程で舞監に作者の宮階さんを得たことが、何よりも大きかった。この気のない演出に、この方はノーとは決しておっしゃらなかった。演出の飛翔を更に引き上げ

るために努力して下さった。劇団の芝居づく

りでも、ずい分やりたいようにやらせて貰っているが、それ以上のもので大変有難かった。その他、六組のダブルキャストのため、通しげいや、舞台げいこでは、人を変えて何度もくり返しのけいこをしたこと。又、初日の幕あけ前に、舞台上慰霊のきよめを行なったこと。或は参加されている市民のひとり、公演少し前に空いていたホールを私費で押さえて、プレゼントして下さったこと、いずれも私の今までの演劇生活になかったことで強く印象に残った。

いよいよ初日、客席は一杯である。幕があくと、拍手が起る。暖かい拍手だ。少々びくりして涙が出そうになる。これが、地元で初演を迎えることの意味である。嬉しい嬉しいお客さんで胸が詰った。舞台と客席が一体になった。カーテンコール、引きを切らないお客さんのプレゼント攻勢、舞台のどの顔も笑っている、泣いている。終演後、初老の男性が受付に立ち寄り、「こういう芝居をあなた方(市民)が創ってくれる、これは大切にしないと、堺だけでは勿体ない、他処でもやって下さい。」と励まして帰られた。ヨカッタ！成功したんだなと思った。堺市民会館小ホー

この劇はこうでした (No.1)

	6夜	7昼	7夜	13夜	14昼	合計	%
大変良い	35	50	44	19	26	174	70.2
良い	10	15	15	7	10	57	23.0
まあまあ	2	3	2	1	2	10	4.0
よくない	0	1	0	0	0	1	0.4
その他	0	1	0	0	0	1	0.4
無答	1	2	1	1	0	5	2.0
計	48	72	62	28	38	248	

ル客席数三〇六席に対して6日夜 三二二名、7日昼 四六六名、7日夜 三八四名、森の宮青少年小ホール客席数、一三二席に対して、13日夜 二二六名、14日昼 二七二名、計一六八〇名であった。アンケートの回収は次のようなものです。

アンケート回答者（男一女）（No.2）

年齢	6日夜	7日昼	7日夜	13日夜	14日昼	計	合計	%
70代	2-1				1-0	3-1	4	1.6
60代	3-4	0-1	1-0	1-0	1-4	6-9	15	6.0
50代	4-4	1-1	1-3	2-6	0-1	8-15	23	9.3
40代	3-9	0-14	4-11	2-1	1-2	10-37	47	19.0
30代	2-4	1-8	3-8	2-0	1-3	9-23	32	12.9
20代	2-1	6-5	1-4	1-6	1-6	11-22	33	13.3
10代	1-4	2-29	2-14	0-6	2-9	7-62	69	27.8
0代	0-1	0-1	3-3			3-5	8	3.2
不明	3	3	4	1	6	17	17	6.9
計	17-28	10-59	15-43	8-19	7-25	57-174	248	100.0

内容もつぶさに紹介したいのですが、「悲惨さへの涙と、知人でもある演者へのほえみが、ごっちゃになってたまらない感動」「戦争への怒りが大声で叫びたい程湧いてきて、どうしようもなかった。」ということにとどめておきます。

出演した66才の女性は、ケイ古中足を傷め、堺公演では宿を取って、足を引きずり乍ら舞台を務めた。そして、「生れてはじめての、晴れ舞台、しかも堺空襲がテーマの芝居に出演できて最高。」と泣いていたし、戦争を知らない女子高生たちも、「平和の尊さを学んだ劇だった。」と語ってくれた。

創造の上でも、観客数のことから言っても小ホールはやはり苦しかった。身の丈に合うカラバかりを探すのではなく、少しは背伸びするくらいに処に目標を置かないと反省もした。又、成功成功の声ばかりに酔っている訳ではない。里沢参吉さんのほおずきの会による「サチの暦」と同じには出来ないが、似通った創造方法として、その成果についての萩坂さんの評（演劇会議No.51）なども頭にあるし、何処か熱くなるうとしている自分も冷やそうとしている部分がある。しかし、公

演が終わって2週間、選挙戦たけなわの中にあつて、あちこちから成果の音がきこえてきたり、今まで仲々思うようにすまなかった平和運動が、この劇の上演で動かないものが動きだしたという報告を受けると、私は素直に喜ばうと思いはじめた。創造と運動が我々の演劇の二本足だ。しかし、最近運動が細ってきていると思う。両方が同時にすすむのが理想だが、片方づつでも交互にすすめたいではないかと思う。今回のこの取り組みは、我が劇団にひとつのあるべき方向を引き出した？とおもいたい。

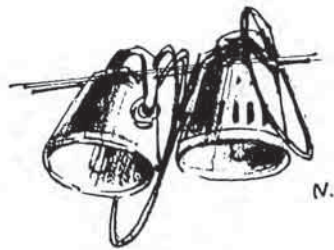
打ちあげの夜、面白半分に参加して、その内段々ほん気になって行ったお母ちゃん、芝居が終わると姓が変わるかも知れへん、とアッケラカンに笑いながら頑張っていたおカアちゃんたちの愉しそうな顔。作者のひとりである奥村さんが、「女性がケイ古毎に美しくなっていた」と洩らしていたのがうなづける。正直、もう一度この人たちと芝居がしたいと思った。あの生みの苦しみを忘れて……。

打ちあげのファイナレは庭で泣きに泣いた女子高生たちによって、作者が宙に舞った。

主演俳優や、裏方や、制作も。そして又、私も。このはつらつとしてしなやかな腕と、伸びざかりのはじけるような胸に何度か受け止められている時、夜空の星がグンと近くに見えた。

堺の人たちありがとう。

堺に新しい演劇の芽が出ることを願って……。



◇七月の創作劇

おかしな見出しをつけたが、どういうわけか、この月、戯曲の応接に、ちょっと身辺多忙をきわめた。小島真木さんの「淡墨色の桜たち」を受けたのは六月の末だったが、何かそれがラッシュの先触れのようにだった。戦後四〇年の年月を、二人の老婆の上に据えて見せた、真木さんのシブトイ居直りを、この作者もようやくここまで来て呉れたかと、よろこんだ。雨畑のゼミナールで、小型式上演で見せてくれるらしいが、戯曲とおりの密度が出るかどうか、一寸心配だ。

七月に入って先ず、こばやしさんの「カクナナの咲き乱れるはて」がとどいた。すでに予告が来ていて、心待ちにしていたものだった。言葉とセリフのきびしさ以外に武器はないよと語るが如く、劇作の原点に立ち戻ってみせた作品である。

続いて、群馬中芸の中村欽一さんの「やけあとのブレイメン楽団」が立派な本で一目見えて来た。戦後破壊しつくされた巷の一角で、浮浪児たちが生活防衛と自主独

立をかちとる物語だ。いまの子どもたちに「戦争を語る」むつかしさを、この作品は解決している。

競うようにして劇団名芸の栗木さんから「米泣く村に、米降る街に」というのが届いた。家電メーカーの企業が、よりによって「米をつくる」機械を考案中だが、その実験にたずさわるエリート社員が東北の農村出身で、そこでは今でも年老いた母が瘦せた田畑を抱えて「米に泣いている」といういかにも栗木氏らしい発想である。しかしこの作品、少しもアホらしくなく、破滅に突っ走る街と農村に作者の心が疼いている。例によって一寸セリフ過剰だが、久しぶりの力作だ。

北海道土産に、渋谷健一氏の「四畳半幻燈」がある。札幌あたりの小さなアパートの住民たちが奏でる生活譜。骨太いドラマツルギーはないが、実にセリフがうまい。のびのびとこんな芝居がかかる北海道の風土に魅せられた。

又、生きている間は読めというが如く一度も会った事のない二人の人から「乞御高評」のプリント台本も舞い込んだ。（萩）



関西における戦前プロレタリア演劇の研究 [五〇]

大岡 欽 治

大阪地方のプロレタリア演劇運動

一九三六（昭和一一）年

大阪における新劇大同団結による

大阪協同劇団の発足

一九三五（昭和十）年つづき

月に至り、さらに新しく拡大された全大阪の新劇関係をはば完全に網羅して、単一劇団「大阪協同劇団」の結成という事態を実現することになった。
それは、次の二つの声明書の発表によって知ることが出来る。

(一)

新人劇場・新響劇場・劇団「自由舞台」

解 体 声 明 書

前号に書いたように、やっと大阪の三劇団の統合の方針によって、十月下旬に「大阪新劇集団」の第一回公演が進んでいた途上、東京の大同団結の劇団「新協劇団」が、七月に関西第一回公演を持つことになった。劇団は大挙して大阪にやってきた。その来阪中に、大阪の三劇団と新協との接触については、秋田雨雀の「関西芝居日記」（「テアトロ」）によって充分効果をあげることになった。十

新劇運動全般の一時的混乱と衰微の中にあつて、地方に於ける文化（演劇）建設に微力乍らも活動を続けて参りました吾々三劇団は、大阪に於ける主体的諸条件に立脚し、分散的活動による運動自体の根幹の欠陥を探究する一方、昨年六月三劇団による「劇団協議会」の成立以後「小山内薫追悼の夕」「三劇団共同公演」等の実践的活動を通じ「新劇団の統

一九三五年十月

新 人 劇 場
新 響 劇 場
劇 団「自由舞台」

(二)

大阪協同劇団成立の御挨拶

ここ数年来大阪に於けるあらゆる芸術は貧

困と危機の状態にあります。舞台に於ても、上演されている演劇は、時代の流れに沿はぬものか、卑俗で安価な娯楽ものに限られ、真摯な芸術的演劇は僅かに心ある新劇のみが努力してきました。然し、大阪の新劇団は実力を伴わぬ分化乱立のため、よき意図を持っていたにも拘らず、実際には充分なよき成果をあげ得ず、反って大阪に於ける新劇を危機に陥れんとしていました。

新劇の大同団結論が提唱されました当時から、種々な提言がありましたが、不幸にも時を得ませんでした。今春、大阪に於ける三劇団、新人劇場、新響劇場、自由舞台の共同公演が計画されるに及びまして大阪の新劇運動に対する根本問題が討論審議されました結果、大同団結こそが、大阪の新劇の危機を打開する唯一の方策であることが確認され、茲に三劇団並びに個人の参加によって、単一劇団「大阪協同劇団」を結成し、近く旗本公演を持つ運びと相成りました。

第一に、吾が劇団の陣容は現在大阪に居る全新劇人を網羅したものでありますが、更に近い将来に参加せられる人もあり、今迄の大阪新劇団に見られなかった充実した劇団であります。

第二に、吾が劇団の芸術的方向は、卑俗な興味に阿らず、時代の進展と共に進む進歩的方向を確保しながら、我が国の現実の多様性複雑性を社会的観点から形象し、更に諸外国に於ける豊かなる芸術・演劇的成果を汲み取りつつ、同時に我が国の永き演劇的傳統を批判的に受継ぐ、新しき演劇の樹立を目的とします。創作現代物を主とし、脚色、翻訳物の優秀なものを選び上演すると共に、特に古典劇、或は時代的に優れた作品の系統的批判的研究の上演を計画する積りであります。更に、我々は従来の大阪新劇団の致命的欠陥であつた、基礎的訓練並びに日常的訓練の欠除から来た、技術の未熟を批判し、之が克服のために努めることから出発します。

第三は、吾が劇団の経営方向の主流は、劇団の独自の経済によるものでありますが、特に出張公演其他のある程度の制約の下に、營利的なものに参加することもあります。然し、多様な道を、可能な限り統一性のあるものにしたと存じます。従つて、最も困難である、新劇経営の多様な道を切り開くために、特別維持会の組織をも考慮して居ります。更に観客組織に就きましては、特別の注意を拂ひ新

劇大衆化の方向と共に、諸外国に於ける此の種の成果に学びつつ、計画的観客組織により劇団と観客との定着の方向を企てる積りであります。
第四に、吾が劇団は、今日迄の大阪新劇に等閑視されていたかの観ある、われわれ関西人の生活面を、その地方的現実在即した、正しい観点から形象化した演劇の発展のために努力いたしたいと存じます。
以上我が劇団の抱負を披瀝し、併せて演劇関係者諸彦並びに親客諸氏の御支持御鞭撻を願ひする次第で御座います。
一九三五年十月

大阪市北区絹笠町 大江ビル内
大 阪 協 同 劇 団

〔演出〕豊岡佐一郎 大岡欽治 大瀬龍夫
渡辺三郎 土田知博 牧田正知 佐野文彦

〔舞台美術〕吉田太郎 山崎徹 浅野孟府
柏木茂弥 伊藤貞一 星野一郎 高橋八重子 沢田宣子 小林彦一

〔舞台照明〕小林孝一 宮原保
〔舞台効果〕西尾洵 赤松弘義 須賀秀雄
〔文芸〕岩田直二 太田正一 香村菊雄

植田修平 近藤力夫 坂田三郎 沢田宣子 宮本鉦一郎 杉田凍一郎
〔演技〕岩田直二 伊藤亮英 今井洋子 賀古栄 高橋政 谷晃 多田俊平 高宮町子 達見郷子 楠健 前田達夫 海老江寛 榎原恭郎 阿賀杜里 狭山健一 木村武二 岸明子 木下ゆづ子 水島藍子 南美子 平田英子 瀬良明 鈴木喚 角一作 杉本英子
〔企画経営〕渡辺三郎 谷晃 辻正二 坂本勝 狭山健一 坂田三郎

(計五十五名)

その結果は、新劇団はいよいよ翌年一月に第一回公演を持って、表面化することになり著々と準備を進めることになった。構成部署が決定すると、初めて自己の役割を自覚して、それぞれのエネルギーの發揮は見事であった。今手もとにある当時の劇団各部からそれぞれ独自に発行されたニュースは、これまで、そして戦後の今日までの、無数の劇団の記録よりも、量質共に揃って重要な意味を持っていたことを実感出来るほどのものであった。そして、レパートリーの選定である。東京

の新協劇団は、その第一回公演に、島崎藤村原作の「夜明け前」を、村山知義脚色、久保栄演出によってセンセーションを起した事実から、協同劇団も注目を引く作品の選定を願っているのだが、関西にそれほどの作家、演出者はまだ出ていなかった。ここ数年の新劇の暗い谷間が、なにによって開放されるだろうか。

あるが、これはソヴェートにて、最も問題になった戯曲で、社会主義リアリズムによる創作方法の最も立派な具体化である。ブルーイチョフという一人を通して、一九一七年の事件を背景に、この一家の縫れを画いている。全劇団員七十余名が、昨年暮より寒気を押し、連日二カ月に亘って、猛烈な練習を続け、このゴリキーの傑作の上演を遺憾なく成功せしむる為努力しているので、今迄の固苦しい新劇を一段進んで面白く分り易い芝居が見られるだろう。

「ゴリキーの近作 本邦初演」

大阪協同劇団の旗幟公演

大阪に於ける唯一の新劇団である「大阪協同劇団」が来る二十七、八両日、文楽座に於て第一回公演をもつことは既報の通りであるが、此の劇団は過去の大阪新劇団「異端座」「戦旗座」「構成劇場」「自由舞台」「無名座」「新人劇場」「新響劇場」「芙蓉座」の中枢分子が悉く顔を揃へ、この二三年間氣勢の挙らなかつた大阪新劇運動に漸く勃興の気運赴き再出発の感がある。上演脚本は、種々詮考の結果、「どん底」「四十年」の作者である世界の文豪ゴリキーの最近作「エゴール・ブルーイチョフ」三幕で

今日ふり返ってみて、第一回公演の脚本が、ゴリキーの「エゴール・ブルーイチョフ」が、許可されたことが不思議でもある。

一カ月後には「二・二六事件」という軍部抗争から出たことだが、日本の社会を震がさせた事件が起り、さらに日本の侵略戦争の第一歩である日中戦争へと発展する時点で、社会主義革命期の作品が上演されるのであった。

二年にわたる大阪の新劇界の低落は、もはやどのような評価を持って警察当局はみているのだろうか。しかし、これは大協五カ年の歴史が、やが

て説明してくれるだろう。

一九三六年から具体的に公演を展開した、当時の社会的、文化的状況を説明する余裕がなくなつて、これから大阪協同劇団の活動の記録を年別に記しておこう。

大阪協同劇団

名称 大阪協同劇団(略称)大協
創立 一九三五(昭和一〇)年九月一日

一九三六(昭和一一)年度

第一回公演

「エゴール・ブルーイチョフ」
マキシム・ゴリキイ作 佐々木民夫 訳 豊岡佐一郎演出 吉田太郎装置
一九三五年一月二七・二八日
於大阪文楽座 観客一三〇〇名

〔批評〕

〈大阪協同劇団パンフレット Iより〉
加藤一郎 中川龍一 中外商業 大阪毎日 大阪朝日(各新聞評)
(註)大協パンフレット Iは創立一周年を記念して発行された、但し一号のみ

第二回公演

「天佑丸」
ハイエルマンズ作 久保栄訳 豊岡佐一郎演出 吉田太郎装置
一九三五年三月二六・二七・二八日
於大阪文楽座 観客数一四〇〇名

〔批評〕

〈大阪協同劇団パンフレット Iより〉
中川龍一 南江二郎 大西利夫 大阪朝日(各新聞評)

第三回公演

「女中あい史」
阿木翁助作 豊岡佐一郎演出 柏木茂 弥装置
「雷雨」
オストロフスキイ作 山内封介訳
大岡欽治演出 吉田太郎装置
一九三五年六月二六・二七・二八日
於大阪北陽演舞場 観客数二二〇〇名

〔批評〕

〈演出ノート〉(大協パンフレット Iより)
新築地劇団

新劇共同公演

一九三六年十月二〇・二一・二二日
於大阪朝日会館
(大阪朝日会館十周年記念新劇共同公演・新協劇団・新築地劇団(東京)・大阪協同劇団の参加出演)

〔裏町〕

九能克彦作 豊岡佐一郎演出 吉田太郎装置

〔批評〕(大協パンフレット Iより)

大阪朝日 大阪毎日 高谷伸(テアトロ・楨五郎・テアトロ論壇)

(註)共同公演のプログラムは次の通り
新協劇団

〔轉々長英〕

藤森成吉作 杉本良吉演出 橋本欣三装置

新築地劇団

「守銭奴」
モリエール作 土井逸雄訳 千田是也演出 田辺達装置

第四回公演

「断層」

久板栄二郎作 大岡欽治演出 吉田太郎
装置
一九三五年十一月二六・二七・二八日
於大阪文楽座 観客一九八〇名

△批評▽(大協パンフレット Iより)
西丸四三(テアトロ・三七年一月号)
西田真三郎 大阪毎日 高谷 伸

以上の公演の他に、ラジオ放送六回、移動
公演六回の仕事記録されてある。

大協同劇団の出発第一年度は、関西の新
劇運動史、戦前・戦中時代において、画期的
なものであったといえよう。

「エゴール・ブルーイチョフ」に続いて、第
二陣のハイエルマンズの「天祐丸」は、自然
主義リアリズムの古典的代表作であり、不充
分な結果だったが神戸まで進出出来たのは、
功績であった。

第三回の「女中あい史」と「雷雨」は、そ
のレパートリーの組合せた苦心があった。一

つには、ゴリキイ、ハイエルマンズという代
表的リアリズム路線の作品の連続上演で、一
息入れる意味もあった。劇団代表の豊岡佐一
郎は、決して進歩的立場に立ってはいなかつ
たが、所謂早稲田系の新劇の保持者であるが、
同時に関西の新劇界では、関西大学英文科の
教授でありながら、唯一人商業演劇には直接
関係なく、大阪の新劇に種々参加してきてい
る人であった。今回の新劇団合同でも、新響
劇場は関西大学の演劇部から出発しており、
その顧問であったり、新人劇場においても
「ヴェニス商人」の演出を担当するなど、
大阪での新劇では接面が多いので、最初か
ら、合同劇団では劇団代表として出場して貰
い、いよいよ大協の活動開始と同時に、第一
回、第二回の大作を立て続けに演出している
ので、第三回では多少気分転回の息抜きの形
で、新喜劇派の作品を受持つてもらった。そ
こでリアリズムの系列でも古典であるオスト
ロフスキイの「雷雨」を、自由舞台から演出
者として大岡があたることになった。劇団の
印象の変化をねらった意味もあった。

ところが、丁度、大阪朝日会館が大阪の文
化運動に大きく寄与してきてから十年の歴史
を積んできた記念として、新劇共同公演で飾

りたいが企画として、東京から新協、新築地
をよび、地元から大協の三劇団を揃えたいと
の申入れがあった。

朝日ビルが、大正十五年十月に建設され、
そのビルの四、五階に朝日会館というホール
(二〇〇人)を持ち、そのこけら落しに築
地小劇場を呼び、第一回大阪公演を持った歴
史もある。この企画、会館、三劇団が一
体となってやることに直ちに決定した。大協
は独自のオリジナリティを出すために創作劇
をえらび、舞台を大阪に持ってきた、大阪の
裏町の雰囲気を発揮するために、大阪弁を使
うことになり、一般的には大阪のリアリズム
として豊岡演出で参加した。

さらに十一月の第四回公演に、一つの轉期
をかくするものとして、新協劇団が久板栄二
郎の劇作家としての新しい地位を開拓した
「断層」をとりあげるようになった。作者久
板は昭和初期に大阪に来て生活して文化活動
を行なっていた時から、私との交友が始まっ
た人でもあったので、大協での私の演出で上
演することが実現することになった。

この作品、作者久板が、新しいドラマツル
ギーを意図して、書いてからも岸田国士の意
見を聞きに行つて推賞されたというエピソード

ドもあつた。

以上の一年間、大阪協同劇団の展開した新
劇運動は、東京の新劇復興運動にも呼応して、
大阪における新劇運動に新しい局面を開いた
歴史的活動でもあったといえよう。これらの
公演を通じて創造体として纏まりが出来始め
てきたという希望を持てるまでになってきた。

一九三七(昭和一二)年

大阪協同劇団(二年度)

この年、日本は急激に日中戦争に突入する
時期を迎えることになった。

△社会▽

- 1 廣田内閣総辞職
- 2 林銑十郎内閣成立
- 3 労農無産協議会、日本無産党と改称(委員長加藤勘十)
- 4 第二〇回総選挙。社会大衆党三七 日本無産党一議席
- 5 林内閣総辞職
- 文部省編纂「国体の本義」出版 全国に配布

6 第一次近衛内閣成立

7 日本帝国主義 中国にたいする全面侵略戦争開始。(芦溝橋事件)

8 日本軍、華北で総攻撃開始

9 政府 国民精神総動員実施要綱を決定

10 上海日本陸戦隊 中国軍と交戦

11 戦時統制三法(軍需工業動員法など)公布

12 国民精神総動員中央連盟創立 「八紘一宇」をかかげる

13 全日本労働総同盟大会 ストライキ絶滅を宣言

14 社会大衆党大会「戦争目的に協力する」を決議 西尾末広ら皇軍慰問団を派遣 大本営設置

15 日本軍 南京占領(大虐殺事件)

16 「労農派」の検挙 山川均、加藤勘十、大森義太郎ら第一次人民戦線事件

17 日本無産党 日本労働組合組合全国評議会解散命令

18 春日庄次郎ら、関西で日本共産主義者団を結成

△演劇▽

- 1 松竹企業合同 松竹株式会社として発足 資本金三三四万円 社長大谷竹次郎
- 2 国際劇場(東京浅草)定員四〇五九にて開場 松竹少女歌劇団「東京踊り」上演
- 3 北条秀司「華やかな夜景」執筆 井上正夫一座にて上演
- 4 矢内原忠雄 著書発禁 辞表提出退官
- 5 和辻哲郎 田辺元 西田幾多郎 山田孝雄 小泉信三 教学局参与となる
- 6 内務省警保局 宮本百合子 戸坂潤の執筆禁止を行う
- 7 新日本文化の会結成
- 8 満洲映画協会(満映) 関東軍の指導で設置
- 9 内閣情報局、国民歌「愛国行進曲」歌詞募集 12、演奏発表会開催、レコード一〇〇万枚売上げ
- 10 京都の「世界文化」グループ検挙、「世界文化」「土曜日」廃刊となる。中井正一 新村猛 真下信一ら検挙
- 11 北村喜八 村瀬幸子中心で、芸術小劇場

△新劇▽

- 1 松本学 林房雄 中河与一 佐藤春夫

を創立。築地小劇場でデユウマ作「椿姫」を上演

3 久板栄二郎「北東の風」を書き、新協劇団により築地小劇場で上演

6 前進座、演劇映画研究所を、東京吉祥寺に建設、共同生活開始

7 衣笠貞之助、八木隆一郎作のキノドラマ「嘘ふ手紙」を、新築地劇団の上演

10 長塚節作 伊藤貞助脚色の「土」を新築地劇団が築地小劇場で上演

その様な状況の下で、大阪協同劇団は二年度の活動を展開するのだが、その初年度一年間の業績をどのように自己批判したかを知る一文が、大協一周年の記念のために特集された「大阪協同劇団パンフレット I」が、この年三月に発行された。最初の企画では、定期刊行の予定は立てないが、時期に応じて発行して纏めて行く方針であった。しかし経済的理由が大きく、この形式のものは、これ一冊のみで終わってしまった。

その巻頭言として書かれた一文は、私にはその筆者が誰であったかは忘れてしまったが、多分、多田俊平か、文芸部の木村武ではないかと思う。(その編輯兼発行人の名儀は木村

武となっている点からも木村の方ではないかと思う)、その内容については、公式発表ではなしに、書かれていて、完全に統一見解としては受取れない点もあるが、一応承認されたものだろう。次に掲げておこう。

「真実の探究は真摯な芸術家の持つ強烈な意欲である。如何な動揺にあつても、かかる意欲は消え去るものではない。何時かは行動にまで高揚せずには止まぬ。

日本の進歩的芸術的活動は一般社会情勢の急激な変動に押し流され、一時、その指針を見失い極端な混乱を示した。一九三五年度は日本新劇運動にとって歴史的に記念さるべき歳である。支離滅裂の状態より新しい活動が再起した。中央に於ける新協の結成、新築地の更生、地方的には協同劇団、北陸新劇協会等全国に亘る新劇団の叢生。

形象化に於ける集团的技術の貧困と、芸術的意欲との矛盾―村山知義氏の新劇大同団結提唱の大阪に於ける反映として大阪協同劇団の結成を見た。創立当初の寄合世界的雑多な色彩の機械的結合の欠陥は、一年の実践を通じて清算しつつある。三六年の大阪新劇は前年度に比して飛躍的な展開を見せた。

然し乍ら外面的な活動の活発さを以って新劇の前途を楽観視することは出来ぬ。今日では既に創立当時とは異なった、より急迫せる社会情勢に直面している。新劇無用の嘲笑や、機会主義的誘惑に抗して、飽くまでも舞台上に生き、大衆の中での妥協なき演劇を持続・発展させなくてはならぬ。

(同パンフレット一頁)

大阪協同劇団 一九三七年上演表

(一) 大阪協同劇団一周年記念公演

一九三七年二月二七・二八・二九日 於 大阪朝日会館

「箕」(す)

蓮見大作 大岡欽治演出 吉田太郎装

置 「羅針盤のない船・都会」 仲沢清太郎作 豊岡佐一郎 吉田太郎装

(二)

大阪水上隣保館寄附公演 一九三七年五月二七・二八日 於 大阪国民会館

一九三七年六月七・八日 於 京都朝日会館(第二回京都公演)

「蒼海の墓場」

阿木翁助作 豊岡佐一郎演出 吉田太郎装

「京都三条通り」

田口竹男作 大瀬瀧夫演出 吉田太郎装

「裏町」

九能克彦作 豊岡佐一郎演出 吉田太郎装

(三) 東京第一回公演

一九三七年四月七・八日 於 京都朝日会館

「断層」

久板栄二郎作 大岡欽治演出 吉田太郎装

○ 豊岡佐一郎 死去

一九三七年五月二五日(四一才)

(四) 豊岡佐一郎追悼公演

一九三七年七月一四日 於 大阪朝日会館

「賭けられたもの」

ジョン・ガルスワージー作 豊岡佐一郎訳 大岡欽治演出 森亶次郎装

「日曜は愉快に」

豊岡佐一郎作 大瀬瀧夫演出 吉田太郎装

(五) 十二月公演

一九三七年一月二五、二六日 於 大阪堀江演舞場

「裸の町」

真船豊作 大瀬瀧夫演出 吉田太郎装

置 「雲雀」

堀江林之助作 岩田直二演出 星野一郎装

「月の夜」

阪中正夫作(検閲不許可のため中止)

86夏の演劇大学

主催 日本演出者協会 協賛 全リ演・演劇教育連盟

開催日 8月16日(土) / 18日(月)

会場 山梨県北巨摩郡高根町清里 清泉寮(0551-481211)

講師陣と講習内容

A 例年、同一の素材を、ミュージカル風、喜劇風、狂言風の三つのスタイルで劇化していましたが、今年は三人の専門演出者がそれぞれのスタイルで台本化したもので、稽古をし、演劇づくりの実験を経験します。 講師 小田健也(フリー)

岡安伸治(世仁下乃一座)

ふじたあさや(フリー)

B お話「俳優芸術の基礎」 滝沢修

C 俳優訓練 参加費 三万二〇〇〇円(日本演出者協会 員は一万八〇〇〇円に割引)

申込み問合せ先 日本演出者協会 (新宿区新宿沢田第二ビル4F

〇三ー三四一八ー一五二)

充実した時間の記憶

——八木浩先生の思い出——

合田幸平

(劇団どう)

頼ることになったのはその後のことでした。

八木先生という方は決して人を見下したり、相手の水準に合せてものを言ったりというところはまったくない人で、私たちの素朴な疑問にもまじめに応対し、私の様な生半可な聞きかじりの意見でさえ、先生自身の深究活動の中にとり込んで真剣に考えてくれるところがありました。

八木先生と劇団どうのつきあいは、一九七九年ブレヒト連続上演NO1、「小市民の結婚式」から始まって「カラルのかみさんの結」
「例外と原則」
「処置」
「アンチゴーン」
「スパイ」そして昨年の「セチュアンの善人」と続きましたが、そのすべての翻訳を快く引き受けてくれたうえで、大学でのお仕事、平和運動など様々な活動で多忙ななか、一つ一つについて何回かづつ催す勉強会にわざわざ稽古場まで足をはこんで下さいました。先生は以前から足が悪く、いつも運動靴をおはきになっていたのですが、一時間余はかかる大阪から神戸への道のり、あの地獄の階段といわれるどろのケイコ場のきつい昇り降り何度させたことでしょうか。先生はいつも大きなカバンを両手に持って、それでもニコニ

今ここに、六年前に録音されたカセットテープがあります。劇団どうブレヒト連続上演の最後を飾る「処置」上演に先だって劇団で催された研究会での八木先生の講義内容です。その時一諸に参加下さった嶋田邦雄氏によって録音されたもので、聞き直してみると、八木先生のおつややかなやさしいお声と同時にあの笑顔が顔前によみがえってきます。お話の内容は、ブレヒトの「処置」と久保栄の「中国湖南省」とを比較文学風に分析、論じたもので、相当高度な内容です。あのとき、ブレヒトの「処置」は、まだ日本で上演されたことがなく、国際的にも多くの論争や議論の多いこの作品をどういう観点で上演するかもっとも意義深いかという事を、明確にしたいというのが先生の大きなテーマであったようです。

一九三〇年前後の中国やソヴェエトの革命

状況やプロレタリア演劇運動の国際的交流の状況、ロシア革命に始まる世界変革の壮大な流れとファシズムの抬頭という歴史のダイナミズムの中で、演劇運動が東西で呼応しあつた様、その共通項と相違を論ずる先生のお話は、私たちの様な小さな労働者劇団相手にもつたいない程水準の高いものでした。先生はそれまでに蓄積された膨大な研究成果や知識をひけらかす様なことはまったく無縁で、私たちが理解していたかどうかは別にして、その時点で、「処置」上演へのものとも正確で有効なアプローチを、世界的な理論水準と具体的な諸状況をふまえ、変革の演劇の未来を見付けだそうとする、真剣さがうかがえるものでした。

ついでながら、私たちが企画したブレヒト連続上演の演目の並びは、まったく我々劇団内部で勝手に決めたもので、先生に協力を依

コしてケイコ場に見せた時、「いつ来てもものすごい階段やなあ」と笑っているあの人の顔はいつまでも忘れられません。何か回は足の具合が悪く、痛々しいほど腫れ上つていた時もありましたが、つらそうな顔を一度も見せたことはありませんでした。

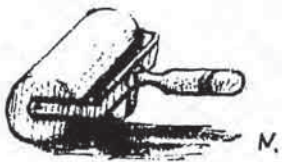
翻訳の原稿について私も何度か先生のお宅に邪魔して徹夜で検討をしたことがあります。が、ドイツ語のまったく解らぬ私の方は他人の訳や勝手な類推で疑問や意見をのべて失礼なこともあったかも知れませんが、先生は一つ一つ厳密な正確な訳を作ることを目指して暖く聞き入れ、検討し、一緒に訳本をつくりあげてくれました。本当に頭の下がる思いがしました。しかし、日本語として耳ざわりが良い訳語があつて私などそっちの方がいいのではと内心思うことも、決して不正確な表現には妥協なさらない人でした。八木先生と御一緒にブレヒトを学んだ、わずかに七年間でしたが、私や劇団にとって最も幸せな充実した期間であつたと思います。

八木先生は演劇関係に限っても、もちろんどろとだけ接触があつた訳ではなく、京阪神の地域劇団のどんな公演にも数多く足を運んでいた人です。それは批評を仕事にする人や

劇団関係のどの人よりも多く劇団に足を運んでいた様に思われます。それぞれの公演に深い理解と御自身の判断、一つ一つの公演から演劇運動全体の問題点や未来への展望などを見付けだそうとしていました。最近では日本の作家とカフカとの関係を研究し、成果を発表しましたし、日本の戦後演劇の流れ、アングラからはじまる「現代演劇」とリアリズムの関係など研究しようとしておられた様で、その旺盛な研究心を持つたまま、余りにも早く私たちの前から去ってしまったことが残念でなりません。どろにとつても、これから本格的に八木先生とお仕事が出来ると思っていた矢先で本当に痛恨に耐えられません。

今年正月は嶋田氏夫妻と御一緒に八木先生のお宅に伺い、楽しく歓談した際、二〇年後ブレヒトの著作権が解ける日を目指して大いに準備して、その時は思う存分上演したり出版したりしようなどと話し合ったり、今年十二月の香港でのブレヒト会議の事など話題になり楽しく夢のふくらむ一日でした。それが一月末の入院、四月四日の余りに早い逝去に茫然としてしまいました。

通夜の夜。いまは劇団を去ってしまった、



M.

かつてのどろのメンバーたちが、計らずも顔を揃えました。みんな連続上演をやってきた連中です。あの熱い時、ブレヒト連続上演にはじまる、八木先生と過ごしたあの充実した時間の記憶は、きっとこれからもみんなの中に生き続けていくに違いありません。

八木先生本当に有難うございました。

私たちは今年八月、「神戸ブレヒトくらぶ」を発足させました。もちろんこれは、八木先生の遺志を微力ながら引きついでいきたいという思いからです。

観て歩き (2) こばやし・ひろし

「ウメコがふたり」(劇団静芸)

黒さんはシーズン毎に公演があるなしかかわらず、東北の各劇団を一周間ほど訪ね廻るとか、関東地方の各劇団を訪ね、劇団訪問記を書きつづけていたが、私はどうも公演もない所へ行つて運動のあり方、組織問題を語りあう自信は今日ではさらさらないと、一つ旅行コースで公演をどこでもやっているわけではないので、出かけるのにも躊躇があるのである。

ところが、今回は五月二五日に静芸の「うめこがふたり」があり、二六日に青年劇場の「お茶と刀」があり、二七日に京浜の「ある馬の物語」がある。よしと思つて出かけた。ただ京浜まで見てくると二八日に仕事があるので、間にあうか不安があったが。

静岡にはわりに早くついた。かつては市役所の横の古い市民会館が会場だったので心配

はいらなかったが、取りこまれた、別の所に、会場費が高いが大小二つのホールを備えた立派な市民文化会館ができたと聞いていたので、その不安もあって早目に来たのである。

喫茶店で時間をつぶして、会場へ行った。ところが若者がぞろぞろくるのである。それも学生服でなくわりに華やかな私服の。大小ホールでコンサートでもあるのかなと大小ホールの前を通つたら、中国訪問演奏帰国コンサート、静岡交響楽団とあった。この若者たちは交響楽団のお客さんだなあと思つた。静岡県は杭州市を省都とする浙江省と友好県を結んでおり、私たちの岐阜市も杭州市と友好都市となつていて、私の創作舞踊「長良川」をもつて文化交流したことがあるので、それを思い出しながら小ホールに向つた。

ところが、その若者たちは「ウメコがふたり」の小ホールへ入つて行くではないか。へと、いささか驚きもし、やるではないかと

感激もした。

それが会場へ入つてわかつたのだが、定時制工業高校の団体鑑賞だったのである。私服ばかりだったので、フリーの客とばかり思つていただけに私は軽い失望を味つた。

演出の西櫃太氏が「やあやあ、わざわざ」といつもの笑顔、自分の事を棚に上げて悪いが、白髪がふえた感じである。山崎欣太さんには、浜松のからっかぜの公演の時、足をくじき、じつくりもんでもらつたので、そのお礼をいい、一しょに見た。

定時制高校の団体鑑賞は二〇〇人いなかったかも知れないが、それを含めて、客席は五分の入りである。

「ちよつと淋しいですね」と山崎さんにいったら、

「ふじたあさやの『今日私はリンゴの木を植える』を実行委員会を組んでやったのです。三千人近く集めたんです。やりようによっては集められるんですよ」

山崎さんは今静芸とのつながりは弱くなり、演劇研究所をもつて別にやっておられるのだが、創造団体のあり方は、今日実に難しいなあとと思つた。

とくに静芸はリアリズム演劇の今日的苦悩

を見事に象徴しているようではない気がする。山崎欣太作「カンカラ広場に集れ」、小島真木作「陸橋」の頃の静芸リアリズムは、京浜リアリズムと共に地域演劇の模範ですらあった。東リ演結成のよびかけ劇団になるのは当然であり、よびかけの四劇団京浜、静芸、演集、はぐるまが静芸で創立準備会をもつたのもうべなるかなである。

残念ながら、ここ十年の静芸を見ると、その勢いは失われ、苦悩の色は実に濃い。そして、それはまたわれわれの苦悩でもある。

さねとうあきらの脚本の「ウメコがふたり」は静芸にとつては再演である。舞台が開くや、一見きれいに整った舞台造型が広がる。照明と共に高橋健君のデザインである。ところが戦争中の裏街という感じは生れて来ない。いかにメルヘンチックに造型しようが、本が要求している裏街の味は出さなくてはいけないと思う。

貧しいインチキ医師ハゲツル(鎌田三郎)の娘ウメコ(遠野愛)は少しおくれいていることもあり、いじめられて学校へも行く自信がないのだが、それだけに思いつめたら純粹である。その純な生き方にころがり込んだ空巢ねらいのウメコ婆さん(牧山幸世)がほださ

れて真人間になって行くのだが、それに口やかましい隣のオヨシさん(鍋田穂津美)とその息子のデベン(望月伸美)がからむ。

それがどうしても芝居が途切れがちになるのである。一つは道具の転換がよくない、それに明転なのか暗転なのかかわからない、一つ一つの場所の切れ目に味が残らないのである。即ち、次の場への期待がふくらんで行かないのだ。役者にも問題があるが、演技と照明の関係が生きないからでもある。話によれば、照明合せはせずぶっつけ本番という。これは頂けない。予算上リハーサルをやる照明操作は会館職員がやるので二倍になるからだという。(十万ぐらいふえるとか)

さすがベテランの鎌田三郎のハゲツルさんは実在感があるが、私は悪者ですよというウメコ婆さん、おしゅべりですよというオヨシさん、私はいじめられっ子ですよいうウメコ、どうもつくりものでリアリテイがない。演出の問題以前に演技指導が大きな課題として残されているなと思つた。

終つて稽古場で交流したが「年でですよ」と西さんがいったが、そういわれてみると、静芸の稽古場附近も変つた。田んぼの中にあつたのが、近くにパイパスも走り、びっ

しり住宅がつまっている。むろん、それと同じで小島真木さん、鎌田三ちゃん、高橋君を除けば、ゼミ等であつているかも知れないが、私としてははじめての人ばかりである。この若さのエネルギーをひき出せるかどうか。そして、若者の創造要求が西さん世代とかみあうかどうか。

若い人々を中心に「俺たちの血」が創作上演されたそうだが、どうもかみ合わなかつたようである。私たちの劇団でも、北村想の「星月夜物語」でもめにもめたが、むづかしい問題である。鎌田三ちゃんの家に入れておくまで話合つた。課題は一ぱいである。

「お茶と刀」(青年劇場)

翌日、東京駅で中国戯劇家協会の尹也非君と落合つた。尹君は一昨々年の岐阜での第二回演劇フェスティバルで中国の演劇状況を話してくれた青年である。その時は偶然私の家へ来ていたのだが、改めて留学、日大研究所の芸術学科に籍を置き、茨木憲、菅井幸雄氏等の講義を受けているようである。月に十本か十五本の芝居を見ているそうだが、「前衛劇はわかりません何のためにやるんでしょう」

と聞いていた。

二人で新宿に出、朝日生命ホールで「お茶と刀」を観た。

楽日で満員との事だったから「立見でも結構です」といったが、ちゃんと補助席を準備していただけた。満席の客席を見る度に、青年劇場には頭が下るのである。

私は飯沢先生のお芝居は好きである。発想が奇抜で、楽しんでかいておられるような気がしてならないからだ。こんどの「お茶と刀」もなんとか見せてもらおうと思っていた、

芝居は今太閤の森山社長（森三平太）が、日本文化の深奥を極めなくてはと、茶の湯にこり出し、部下の千川（千賀拓夫）西田（西沢由郎）に調べさせる所からはじまり、太閤と利休（和泉宏明）の中に入って行くのである。即ち、現代劇であって歴史劇、歴史劇であって現代劇というスタイルになっているのだ。

成り上り者の太閤が権力を握るや、アクセサリーとしての文化が必要になり、佗の世界を楽しむ茶道の元祖千利休を重宝するが、秀吉は天下を統一するや、朝鮮をさらに明の支配計画をするようになる。

これには現実主義者の徳川家康も千利休も

ついでに行けなくなり反対するようになる。

今日の日本の経済進出と右傾化秀吉の行動にダブらせ、鋭く諷刺するわけである。作者自身座付作者だから、俳優に合せて作品をかいているといわれるだけあって、役者と役柄は実にぴったりし、アンサンブルも見事である。しかし、観客の歴史知識の不足にいらついている作者が何となくチラチラしている気がしてならなかった。いっておかなくちゃいけないことが多すぎたんじゃないでしょうか。

だから観客もいつもとちがって固くなって観ていたようである。確かに今日の若者は歴史知識は弱く、自分の歴史観も持せていない人が実に多い、それが右傾化に拍車をかけているといっている。実にむづかしい問題だと思った。

「ある馬の物語」（京浜協同劇団）

翌日二七日萩坂さんと川崎駅で落ち合ひ昼食を共にしながら、総会、ゼミについて相談した。かつては私が上京するたびに、同じ駅の食堂で黒さんを交えて話合ったのだが、今は黒さんはなく二人である。

私がこの季節になると憂うつなのは総会議

案である。この頃、何か書くのが空しくなり

気が重いのである。別に文句がでるわけでもない、確信が生れるでなし、いや、今日、理論的に整理してみても、感動のない時代なのである。私たち劇団はぐるまの「複雑な文化状況と十五周年」が掲載された演劇会議十一号がたちまち売切れたなんて今日では夢のような話である。

それがわかっていて書かなければならないのは実に辛い。事実、総会への出席劇団も徐々に減少しているのである。今や、演劇会議でかろうじて連帯を感じているだけで、これが出なくなったららどうなるだろうか思うと暗然たる気持になる。

いろいろ話合っても妙案が出るわけがなく、まあ、楽天的な萩さんに励まされていつも帰るのである。七月五日、六日の北海道演劇会祭の萩さんは講師となっているので、八八年に予定される、北海道演劇集団からの呼びかけの第二回東日本演劇フェスティバルの可能性について打診してもらい、七月十二日、十三日に議長団会議をもつことにして別れた。

そして京浜の「ある馬の物語」の会場、東京勤労福祉会館ホールへ向った。演劇集団土くれが私の「つくられた英雄」をやってくれ

た所である。ちようど入って行ったら舞台稽古が本番通り始まる所だった。

「ある馬の物語」はこれで三回目である。レニングラード・ポリショイ劇場・名古屋でのふじたあさや演出のプロデュース公演、それとこの京浜である。仙小の舞台は萩坂さんがほめていたし、演出の石垣君から「自分でいうのも変だが、私なりの一つのくぎり」と便りがあったから、仙小として成果を示したのだと思う。

この京浜の舞台も「金冠のイエス」以来の舞台と聞いていいと思う。この作品はトルストイの原作をロゾーフスキーが脚色したもので訳者の桜井さんから本を頂いた時、なるほどと感動したのを覚えている。

栄光と転落、老癡という人間の悲しみを、ホルストメールという馬に托して、即ち馬という、永久に主人につかえなければならぬ家畜に托して描かれる所に強烈な諷刺を感じたのである。

それが京浜の舞台に素直に出ていた。馬の悲しみならぬ、家畜のように競走社会で走らされる私たちの悲しみを味ったのである。全体のアンサンブルも実に小気味がいい。

しかし、ホルストメール（山口あきお）と

恋に陥入るメス馬のヒヤゾプリーハ（和田庸子）が次に人間になって公爵（藤井康雄）の

愛人マチエになり、そしてホルストメールが売られ売られて没落し、屠殺される既舎の持主の伯爵（堤次郎）の妻になる。そして、逆にホルストメールがメス馬ヒヤゾプリーハと争ったオスマミールイ（堤次郎）は公爵の愛人マチエと馳走する将校となり、最後は既舎の持主伯爵となるのだが、残念ながら、お客さんはとまどうと思った。

ポリショイ劇場の場合は全く矛盾なかったし、逆に作者の意図が、それによって生きた。これは残念ながら演技者の力量とっては酷だろうか。とくにメス馬のヒヤゾプリーハはメス馬の魅力をもつ必要とすると思うが、色の量感に乏しかったことは否定できない。いづれにしても客席は混乱し、劇団員の不足なのかと思つたにちがいないと思う。

また、衣装がなんとかならないかと思つた。短足に見え馬というより、犬といった感じに見える、日本人類の悲しみを味ったのである。

それに歌になると歌詞が全くわからないことである。これは歌唱力が弱いというわけではなく、日本語のリズム感の乏しさからくると思う、これは作曲者の安達元彦氏に今一つ考

えてもらわなくてはいけない問題と思う。

「西成山王ホテル」（関西芸術座）

それから二週間ほどして六月十一日に大阪へ行った。関西芸術座の「西成山王ホテル」の楽日に合せ、全関西演劇フェスティバルのため、全関西演劇フェスティバルの打合せのためでもあった。

西会議の理事局長と梅田駅で落ち合ひ、劇団大阪へ行った。劇団大阪では千田是也先生の主宰するプレヒト研究会が「第三帝国の恐怖と貧困」の舞台稽古をしていた。その晩、劇団大阪を会場にして公演するのだそうだ。

五時に熊本さんも来て、三人で来年の演劇フェスティバルの会場条件を話合った。劇団大阪は地下鉄谷町六丁目の近くのビルの一室にあるのだが、もう、十年余り前になるが、三千万円で買ったものである。今ならともかく、当時は大へんだったと思う。

話によれば八〇人から一〇〇人が精一ぱいだという。欲をいえば切がないが、第一候補の兵庫県民小ホールが駄目とすれば、止むえないだろう。

こうして二月十四・十五日、東西二劇団づゝ、

四劇団の上演規模で行うことに一応きめ、原案をつくってもらうことにした。

私は、その足で毎日ホールへ向った。関西芸術座の舞台は久しぶりである。仲さん(武司)が入口で待っていて席をとっておいでくれたが、招待席とみえ装置家の板坂晋治氏、劇作家の東川宗彦氏等々、顔見知りばかりである。

見廻してみると客席は一ぱいだった。関芸はわりに観客を集める力が弱く「大大阪でなんや、この数」とよくけなしたことがあるが、企画の成功か、黒岩重吾の魅力か、客席をみるだけで公演の成功を暗示しているような気がした。

本は黒岩重吾の「西成山王ホテル」の中の「湿った底」を梅林貴久生氏が脚色したもので、演出は道井直次氏である。

最初の幕開きからシヨッキングである。ペテランの藤山喜子演ずる小泉康江と、薄田繁演ずる康江の情夫のブローカー吉松喜助とのセックスシーンから始まる。蒲団がゆさぶり、藤山さんの、本人もはじめてのようなよがり声で客席は息をのむ、康江は吉松なしではおれないのである。

西成山王町といえ、東京の山谷と共に、なんて題にしなのか、今なお釈然としない。しかし、いずれにしても劇団名古屋は社会的なアクチュアルなドラマを熱心につぎつめていっているといっている。「アンネ日記」「ピロシマについての涙について」「ザ・パイロット」。

今日すべてが個のドラマにとうとうと流れ行く中で、こだわりと思うほど抵抗しているのである。ただ、パンフに「第三帝国とは」とか、「ナチ突撃隊」とか「ナチ親衛隊」「ゲシュタポ」と説明を加えなければならぬほど、このドラマの世界は今の若者から縁が遠くなっているわけである。

これをどうときほぐして行っているのか、正直いって私にもわからない。

幕が開くや鉤十字のナチスの大きな旗が、名演会館の舞台の下手四分の二をしめ、上手のネットの奥にナチスの兵士がピアノをひき、四人のドイツ兵の歌ではじまる。幕開きは実に印象的である。旗も十分生きていた。そして、全幕、各場の転換はこの歌でつながれているのだが、一部二部通じて十一話であるが、すべて歌になると辛くなるような気がした。私は夜のパーティーの演出のため、第二部の七話までしか見れなかったのであるが、どの

日本の資本主義社会のゴミタメである。いろんな人種が一ぱいうごめいている。康江の義理の娘の身障者の澄江(藤田千代美)は、その中から必死にぬけだそうとする。その澄江にも吉松は云いよるのである。

澄江は吉松ときっぱり手を切らせるためには、その現場を母に見せる以外ないと思ひ、ガラク売りのたつ子(路井恵美子)と相談し、母に知らせてもらう。ところが、かけつけた母康江は吉松に怒りをぶつけるのでなく、「出て行け!」と狂ったように澄江に当るのである。

こうして澄江は飲屋に勤め、同じくこのゴミタメから何とかぬけ出そうとする、生まじめだけが取りえのキャバレーボーイの高井(岩鶴恒義)にひかれて行く。それに澄江の姉の咲江(和泉敏子)のヒモ村田(佐野晶夫)それに刑務所から出てくる咲江の情夫郷田(梶本潔)がからみ、泥沼のような西成の生活が浮きだされ、その中からぬけだそうとする愛をきわだたせているのだが、それがぐいぐい客席に入ってきたのである。私は大阪の芝居だ、関芸の芝居だと思った。

とくに澄江の切なさですがすがしきは生きていたいと思う。ただ、飲屋のおかみお幸

話もどうしてもつきささつて来ないのだ。私ですらといって悪いが、大へんな時代だったなあと思ってしまうのである。だから、若い人はよりそう感じるのはないだろうか。第一話の目に見えない権力の無気味さ、そして第二話の突撃隊員(九沢靖彦)という権力の末端の先のもつ傲慢といやらしさ、それが演技として伝って来ないので、いよいよ額縁の絵になってしまふのである。

第三話でもアナウンサーはセリフがよくきかれて小気味いいが、労働者は脅えていますというのを一生懸命演ずるものだから、観客は脅えなくなって行かない。

こうした演技の成熟度の弱さが一層、客席と舞台を分離することになるのではないだろうか、山内康治、清水甚也さんはやはり舞台上で生きていた。とくに山内さんの演技は好きである。

しかし、劇団名古屋は、数年前よりずっと劇団の力量を積上げて来た事は事実である。それは舞台にも現れていた。

しかし「ウソッ!本当?」は相変らずびっかかっている。といって、私は「第三帝国」をこなせるかと思うと自信もないような気がした。むづかしい時代である。

(坂本和子)等のペテランの演技は安心して見れるのだが、若手は未熟さがこぼれ出て、舞台のリズムを度々崩していたことは否定できない。

しかし、いずれにしても来てよかったという充実感、最終の新幹線にとび乗っても残っていた。

「ウソッ!本当?」(劇団名古屋)

二八日に劇団名古屋の「ウソッ!本当?」のマチネを観て、その足で、中津川の夜明けの「十一匹のネコ」を見ようと計画はたてていた。ところが、角力の関取の激励会の演出の仕事が二八日の夜に入り、計画が崩れてしまったのである。話によれば、中津川市民会館に一三〇〇人ぐらい入り、通路もぎっしりだったという。これは今でも心残りである。

劇団名古屋の「ウソッ!本当?」はプレヒトの「第三帝国の恐怖と貧困」よりとあるから、へえ、こら観案かなと思った。今日の右傾化、天皇キャンペイン、経済大国等々をもじて、何か考えたのかなと思った。ところが、幕が開いたら、別に観案ではなかったのである、それではなぜ「ウソッ!本当?」

●暑中見舞いのおたよりから

ともに劇団2月を冠せて、一つは劇団2月・コロ、一つは劇団2月・如月舎から暑中見舞いのはがきをいただいた。

今年の初めだったか、劇団2月が分裂したという噂が流れて来た。即座に悪い方に受けとりがちだが、あながちそうでもないらしい。ぼくの感じでは、作者と演出者が分離したのかなと思う。

ただ、一つだった劇団2月の頃の舞台とコロと如月舎にわかれてからの舞台のちがいが、その模様や趣向、考え方をふくめて、どんな風にひろがり、ゆたかになっていくのか、或はその逆もありうるわけだから、そのへんのところを知りたいな、と思う。内政干渉をおそれてから、西のどなたからも、劇団2月についての立ち上った話は伝わってこない。そんなことは知らなくてもいいことなかもしれない。御参考までに双方の住所をお知らせしておく。

劇団2月・コロ 大阪市東住吉区中野

一四一五 Ⅲ 06 1705 12805

劇団2月・如月舎 大阪市生野区田島

二一四一五 Ⅲ 06 1751 13100

「大阪春の演劇まつり」所感

小松 徹

一〇年目を迎えた今年の大阪春の演劇まつりも、七月五日、五千五百以上の観客を集めて、無事打ちあげとなった。

これまでになく多くの若い集団の新しい参加があり、まつり全体に新風を吹きこんだと言える。総じて彼らの舞台は、肩肘をはることなくのびのびと演じられた。オリジナリテイも感じさせ、一面で若さからくる深みの足りなさはあるにしても、観ていて気持ちよく、これからの可能性を予感させてくれた。「やりたいものをやる」という以外にこだわりを持たぬ素質が、ストレートに伝わってくる。それぞれに観客を相当数集めていることも、注目されている。

反面でしかし、これまで参加してきた少なからぬ集団が参加しなかった。不参加＝脱落と単純には云えないまでも、厳しい現実の反映として、見落すことは出来ない。その中に

全り演劇加盟では、劇団きづがわもある。

しかし総体として、まつり一〇年の歩みと到達した成果をみると、大阪のアマチュア演劇にとつて、今日ではその活動を支える太い幹として、成長してきていることは間違いない。専門劇団をのぞく大阪の全り演劇加盟劇団では、まつり参加が年間企画にしっかりと組みこまれていることをみても、それは明らかだ。自立劇団合同公演も、ここ二回はまつり参加のという形でおこなわれている。その積み重ねの上に立って、今年には参加十二集団による公演の他に、はじめて、まつり実行委員会プロデュースによる公演がもたれ、しかも作品はこの企画にあわせるべく昨年春から公募をはじめた青少年戯曲賞の入選作。私もその選衡の一翼を担ったのだが、幸い優れた入選作「ピアノの上に——不在なるもの」を得たが、それぞれの集団の公演は公演として成

立させながら、一方でこの困難な作業を結実させていった努力は高く評価されるべきだろう。また、堺市民懇話会を媒介とした、多数の市民参加による芝居づくりが行われ演劇集団わだが、その創造的とりまとめ役として動いたこと、これまでもなかつたことで市民運動と演劇創造のドッキングとして注目に値する。

一〇年ということで、まつりが大阪府から表彰を受けたのも当然のことと云えよう。

以上のような総括的な評価の上に立って、主として全り演劇加盟劇団の創造内容に立ち入ってきたいが、ここ最近、いくつか気になつていることが、風潮として、あるいは傾向として固まりつつあるように、私には思われる。したがって、この稿では、ひとつひとつの舞台ごとに批評を展開するよりも、そうした傾向について、舞台上に触れながら、問題を提起していきたいと思う。

まずはじめに大きな問題として、

素材へのよりかかり——それをもってよしとする傾向がありはしないか？

と問いかければ、おそらく「そんなことはない」という答えが、劇団関係者からは返って来よう、然し果してそう言いきれるか。

かつて私たちの運動の中でも、テーマ主義に対する自省乃至は反発がおこって、大いに論議されたことがあった。そしてそれはほぼ克服されたと思っていたのだが、どっこい、いつの間にかそこへ回帰してきている風潮を感じるので、しかも若干粧いを変えて。

粧いを変えてとはどういうことか。かつては主義主張に対する確とした信念をもって、テーマを大上段に、あるいは正面きつてうちだしていったのに対し、今日のは、とらえ難い現実の壁につきあたって苦悩しながら、せめて素材だけは積極的なものを選ぶという、いわば及び腰の姿勢から来ているように、私には思われる。

特に台本の問題。創作するにせよ、既成の脚本を選ぶにせよ。

そのことについては、昨年にさかのぼっておきたいのだが、自立演劇合同公演で上演した「荒野の落日」について、原作である森村誠一の「悪魔の飽食」を読み終えた者にそれを越えるどれだけの演劇的感動があるかと、う問いかけて、実は演劇まつり後夜祭でおこ

なった。残念ながらしかし、正面切つての反論がないままに、噛み合わなかつた苦い経験をもつ。本誌に掲載された劇評は、劇評というよりも反戦運動の地平からの賛辞であり、その後掲載された合同公演関係者による総括的な報告でも、劇創造の視座からの切りこみが皆無であることに愕然としたのであるが同様のことが昨年の秋のそれぞれの劇団のレバートリーから、この春の上演にかけて、ひきつづき、あるいはもっと低い次元で持ちこたれてきているように、私には思えて仕方がない。

先ほど、市民参加の芝居づくりについて、注目すべき仕事だと述べた。そのことによつて、堺の市民運動の一層の活性化に役立ったであろうことは想像に難くないし、結構なことだ。それだけに、上演台本づくりの安易さ、粗雑さ——素材へのよりかかりの姿勢が、私には残念でならない。

作者は四人の教師による合作、それぞれに浅からぬ創作体験をもち、共同の創作作業もこれまでにやっている。大阪のいわゆる「文化運動」のなかでは名の知られている人たちが、公演パンフレットによると

△一九四五年七月十日未明、堺を焼野原と

化し、千八百六十人ともいわれる死者を出した堺大空襲、それから四十年、人類を、地球そのものを破壊しかねない核兵器の脅威のしかかっている時、堺大空襲の惨事を語り伝え、ふたたびくり返してはならない想いをこめ、核兵器廃絶へ、恒久平和へと多くの人々の話合いの中から戯曲「災の街から」は生まれました。

とある。まさにその意気や壮なりなのであるが、敢えて云わせてもらえば、見事に常套的な語句によってしか綴られていないのが気にかかると。

第一部——主として描かれる舞台は堺の遊廓。芯になる登場人物は、売られてきたばかりの遊女と、ここの主人の娘。それに戦争に疑問を感じる女学校教師と、疑いなく人間魚雷に志願していく弟の二人がからむ。一方は特高にバクられ、一方は死へおもむくことでこの二つの恋は破れる。

なんのことはない、戦争という状況をかりたメロドラマである。メロドラマを私は一概に否定しない。しかし、作者の設定したプロットの担い手としてだけ、都合よく人間を人形のように動かしていきやりかたを、私は創造の営みとは考えない。

舞台展開を観ていると、どこかで観た芝居の、いつかみた場面のつきはぎである。人物の内面・関係の展開の必然性など、そのけ筋だけがすいすいと進行していく。主人公以外の遊女や、外地への転属を前に女をあまりにくる兵士はマスとしてしか描かれぬ。また主人の娘は、病に臥せる売られてきたばかりの遊女を兵士たちからかばうが、そのことよってさらに苦役を強いられる他の遊女たちのことはどう思っているのだろうか。第一、遊女たちの稼ぎをかすめることで自分の生活が成り立っていることに全く無自覚なのも気になる。作者の視点もあいまい——というより、ない。恋を無条件に美しいものとして描き、ひたすら戦争の被害者として描くことに専心するだけだ。

そして空襲——多くの人が傷つき、死んでいく様子がホリゾンと赤く染めて、常套的に延々と演じられる。アメリカ軍の伝単を拾い、空襲の予告を知りながら、勇気をもって掘めなかつた青年医師の苦悩なども描かれはするが、エピソードにすぎず、結局若い遊女は主人の娘をかばって死に、娘は生き残る。第二部は四〇年を経た現代である。かつて特高にバクられた兄は生き残って、何故か市

もうひとつ、今話題の女性だけの劇団、青い鳥の上演した、「一日の楽天」では、自分の中で凝り固まっている何かを溶かされ、錆びがそぎおとされ、想像力が賦活し拡がり、飛翔していった。

双方の観劇体験に共通するのは、如何に自分が、不自由な存在かということ。自分自身の存在と成長にとって如何に「自由」であり続けることが大切かということ。そのことをしたたかに思い知らされることを通して、人生への真摯な姿勢をとり戻されたことであるうか。そこに立った時、人間は自分をとりまく現実的な課題に対して、真剣に、かつ謙虚にむかい合うことになる。常套的な言葉で語られる反戦の訴えを百遍聞くよりも、一般的な語り口で反核の叫びに干渉するよりも、うんと深いところで卒直に私の存在に自由を圧殺してくるものに対してむかいあうことが出来るのである。

素材に安住し、恣意的にでっちあげたプロットにそってつくりあげた人間の一面的描写、切り捨てで、どうしてそのことが果せようか。今は情報過多の時代である。みんな事実を知っているのだ。むろん過多の蔭で何が大切な真実かについて語る必要性がなくなつたと

会議長におさまっており、戦没者の慰霊碑建立にも協力を拒む。この何故かを問うことの方が、戦後を考える上——ということとは戦争体験をどう引き継いできたかを考える上ではずっと有効で、挑発的だと思ふのだが、それには全く触れることなく、変貌した老人としてだけ登場する。この男の泣き所は孫娘であり、彼女は何故か暴走族に身を投じている。しかし悩みはもっている訳で、元のクラスメイト、生き残った遊廓の主人の娘の孫の青年と語り合うことで、実に簡単に立ち直る。暴走族仲間の襲撃をうける娘、それをかばう青年というパターンの中で、二人は真剣に戦争についても考えるようになる。ここで私は大層気になるのだが、筋のはこびの安易さもさることながら、暴走族の少年たちを、落ちこぼれのどうしようもない連中とだけしか扱っていない作者の視点のことだ。先にも述べたように作者は教師である。そのことにむしろ私はりつ然とする。

エピソードは慰霊碑建立の広場を埋めた人々。その中にまた何故か市会議長の姿がある。孫娘と青年に、実に楽天的に作者は未来を托すのである。なんとという安易さ、粗雑さ、都合のよさ。

は云わない。しかし戦争の災害を知らないから——伝えられていないから自民党三〇〇議席突破という現実が生れたのだろうか。そうではあるまい。戦争の被害を身に泌みている者たちも含めて、そういう体制をつくりあげているのではなからうか。

自由であり続けることは、今日怖ろしいことなのだ。不自由ながらも現在の生活に安住しているのである。それを守るためには少々不自由さには眼をつむらう。未来のことなど出来るだけ考えまい——倭少化した精神が今日本を蔽っているのである。

素材によりかかって、現実には切り込んでいると考えるときたら、それは錯覚である、存在の根源を動かすことなしに、「自由」を自覚しつづけさせることは出来ないのだ。

「炎の街から」に紙数を使いすぎて、他の公演に触れる余裕が殆どなくなつてしまった。劇団未来は爪生正美作「手紙」——受験戦争の犠牲となつた少年のかかえる問題と第二次大戦の犠牲となつた若者とを無理に重ね合わせるうとして、却って作品を薄っぺらなものにしていく。如何にも頭の中で拵えあげたという作品だ。

劇団大阪のとりあげた寺島アキ子作「翼は

私は芝居を観ながらこの芝居づくりに結集した市民のエネルギーに胸を熱くしながら、それに応えるに素材だけにゆりかかったアイジーな台本をしか提供し得なかつた創造者たちのことを思うと、虚しく、哀しかった。しかもパンフレットの作者たちの座談会を読むと、彼らはこの作品を書きあげたことに充足感を覚えているのだ。啞々。

素材を戦時下にとりその状況を描くことに反対しているのではない。しかしそれさえ描けば反戦の思想が拡がると思ひこんでいる安呑さ、自分の主張を通すためにだけ人物を利用し、他は切り捨てていく無神経さを問題にしているのだ。

話は飛躍するが、昨年私が観た舞台の中で最も感動したのは、加藤健一や熊谷真実たちのつくりだした「小さき神の、作りし子ら」であった。豊唾の女と、健常者である男性教師が、全身でぶつかりながら愛を育くみつつも結局は破綻していくドラマだが、舞台はそういう枠を超えて、人間どうしがつながるとはどういうことかを、真正面からぐいぐいと、私に迫って、私は自分自身の狎みさについて痛いほど思い知らされた。舞台上の二人の間関係は破局を迎えるが、虚しさは残らない。

心につけて」は同名のドキュメントから創作されたものだが、テレビドラマなどでもよくとりあげられる「難病もの」の枠を越えていない。

府職劇研は社会からこぼれ落ちた人間どうしがいみ合うところから、最後は心を通い合やす——そのプロセスが実に安易な創作劇「秋暁」。

いずれも素材によりかかつた作品である。しかしここで一言つけ加えておけば、いずれの舞台でも俳優の好演、その存在感によって作品の欠陥をカバーしていることだ。

劇団未来の斉藤周介、南勝は、これまでにない好演であった。劇団大阪の中村みどりの母親役の抑制のきいた好演が舞台に厚みを加えたし、主人公を演じた岡山緑も、後半、厳しい状況に立たされた後の演技は輝やいて見えた。

府職劇研でも貽谷君の存在感が、浅薄な作品を辛うじて支えてきたと云える。

劇団息吹は「奇跡の人」を上演した。「泰山木の木の下で」「アンネの日記」そして今度と、名作路線が定着してきた感があるが、一時の粗っぽい芝居づくりはすっかり影をひそめ、丁寧な芝居づくりがこのところ眼を引

いている。ところが、この丁寧いさというの
が、一步踏みちがえると、舞台の魅力を減じ
ることになる。心理主義への傾斜だ。今回、
ちょっとそれが出かかっているように思う。
このことについても詳しく論じたかったのだ
が、もう紙数はない。ただこの現象は「丁寧
に描く」時に、まま陥りやすい傾向として、
息吹に限らず見られる現象であることを、指
摘しておく。

終りにどうしても書いておきたいのは、応
募入選戯曲についてである。近日中に佳作の
窪田吉宏君（劇団大阪）の作品とともに印刷
されるので、一読をおすすめしたいと思うが、
作者の狙いは家族のありようを通して、これ
からの時代の人間関係というはどう変って
いくのかということを探りとうとうとしている
かのようだ。

じっくりと、人間を相互の関係の中で見な
がら、何が人間を結びつけ、離反させるかを、
デリケートに追っていく。素材へのよりかか
りといったケチなところはみじんもない。選
衡の中で早くも現在の大阪の自立劇団の演技
の質と力では相当困難だろうという声があがっ
ていた。案の定、演出者の決定は難航し、ス
タッフ・キャストの編成もそうスムーズには

いかなかったらしい。稽古は見学したいと思
いながらその機会はつくれなかったが、相当
悪戦苦斗したようである。

結果は、悪戦苦斗の痕跡は充分にうかがえ
る舞台になっていた。大切な叫びを立てるで
なく、次女（高校生）の登校拒否を発端に、
家族関係が洗いさらされていく。作者のメス
は一見日常的に見える言葉のやりとりを通し
て、鋭く人間の深部をあばいていく。高校教
師である作者のなかには、確かな希望はない
が、虚無感に浸っている訳ではない。今はじっ
くりとありのままの人間関係を見つめ続けよ
うということか。それがじんわりと胸をうっ
てくる。

舞台は若干心理分析的に傾斜する弱点をは
らみながらも、一応作者の狙いは表現し得た
と思う。そしてこの仕事にかかわった諸君が、
今までの芝居づくりを省みることを期待した
いし、作者の重光透氏の才能を、これからの
大阪における演劇活動の中で生かすべく、ひっ
ぱりこんでほしい。そうさらには転っていな
い才能の持主である。

いつものことながら後半駆け足となって申
し訳ない。ここでこの稿を終えるがほんとう
に最後に、一応のお別れの言葉を述べることに

をお許し頂きたいと思う。

今年の大阪春の演劇まつりの講評をもつて、
私は自分自身の演劇生活に一応のピリオドを
うつことにした。もともと悪かった腎臓の機
能が、昨年春から急激に低下しはじめ、一時
小康状態を保ったものの、この春からまた急
降下をはじめ、観客席に一時間も坐っている
と、むくみが、あがってくるのが自覚される
までに至った。演出というハードな仕事は昨
年すでに諦めたが、芝居を観ることも出来な
いとすると、自分なりに覚悟を決めなければ
ならない訳だ。人工透析に入るのも、もう時
間の問題だが、心臓も相当弱ってきており、
子供も小さいことであり、命を承らえること
を第一にこれからの生活を考えざるを得ない
ところまでできてしまった。

これまでもこの誌上だけでなく、在関西の
劇団の諸君には毒舌を吐きつづけてきたので、
最後ぐらいいちがう形の文章を書きたかった
が、また毒舌となってしまった。当分は家に
こもるつもり、舞台を観ることも出来ないと思
うが、健斗を切に念じている。

劇評

せまり来る暗い時代の前で

「獅子」は狂舞する

——劇団月曜会公演「獅子」——

下村清一

(劇団草の実)

六月七日、劇団月曜会第三回公演「獅子」
三好十郎作、矢野弘演出が上演された。会場
はおなじみの見真講堂。私が観たのは初日の
昼間公演だった。

全公演に加盟している仲間の舞台を観る機
会も、西の外れに位置する山口県からでは限
界がある。幸に劇団草の実は西会議の運営委
員劇団になっているので会議に便して神戸、
関西の仲間の舞台をいくつ観ることが出来
た。でもその数は限られている。大阪まで新
幹線で三時間だからと思えばそう速くもない
が、交通費だけは国鉄にガッポリ取られる。
だから、中国ブロック内の加盟劇団の舞台だ
けは、欠かさず観ようと心がけている。それ
だけが、せめての運営委員劇団としての果せ
る役目なのだから。しかし、本音のところは
「何かめずめるものはないか」と目を凝らし

ているのだ。広島は徳山から新幹線で三〇分
程度であり、仕事が終ってすぐ飛び乗れば夕
方の開演時間に間に合い、終電車にもタクシ
ーで広島駅に駆けつければ在来線にセーフだ。
徳山から「広島市民劇場」の例会を観に行く
常連も多い。

劇団月曜会の「獅子」の上演については、
昨年の秋に中国ブロックの「奥湯田ゼミナ
ー」の打合せの時に、岩井里子さんから詳し
く聞かされてきた。目を輝かして語る彼女に
引きつけられ目を潤ませた者もいたほどだ。
早速、その日に妻と二人で「獅子」を読んだ
ことを記憶している。(劇団草の実でも「獅
子」を上演したくなって演劇教室第一期生の
卒業公演に準備を進め稽古に入ったが、軟弱
な草の実に合わせたように第一期生も軟弱で、
大半の者が一、二ヶ月で去ってしまいう上演を

断念してしまった。)

劇団月曜会は、この「獅子」から、圭太郎
とお雪が村を立て行つた満洲へ向って思い
を繋げる。毎日のようにテレビ・新聞で報道
される「中国残留孤児」の肉親さがしに繋がっ
ていく。さらには、この「獅子」を上演した
丸山定夫たちの「桜隊」に、そして、ヒロシ
マと繋がりが「戦後四〇年の今、さまざま無
念の思いを担い、私たちは「獅子」の時代を
みつめてみたい」(上演チラシ)とした。こ
れは広島で問いつづけている劇団月曜会
ならではの「獅子」への思い入れである。

「人間一生の一大事の時は、自分がホントに
正直に、したいと思うことを思いきってやら
んならぞぞ! それが人間の道じゃぞぞ!」圭
太郎と一語に満洲に向け村を立て行く娘の
雪に向って吉春は叫び、得意の獅子舞を器量
一杯に踊る。これは最後の幕切れの場面である。

この吉春の叫びは、生きていく上での人間
の原点をとりもどそうとする叫びだ。

それは今の時代でも同じだ。たとえば、戦
後第二の反動期と言われる現在、職場を見れ
ば「省エネ・合理化」で人は減り、サービ
ス残業で仕事をこなし、給料はおさえ込まれ、
夫妻共稼ぎで家のローンをやっとこさ払って

いるというのに。頭の上からは、チェルノブイリ原子力発電所の事故による放射能が降りてくるというのに。これが「人間一生の一大事」ではないのか、私が演劇に関わったのも日々の暮しに埋没するのではなく、そのことから脱出して自分のカラをこわすために怒濤の渦に自身を投げ入れ、雪のように自分のしたいことを思いきってするために想像も及ばない世界に出ていった筈だった。それなのに「一大事」を押しとどめようとしながらもその流れに翻弄され、職場の中であっては手も足も出せずに陰でコンソコと愚痴を言ってチョン。吉春のようにブツツリ酒を断つ程度のことでおさまっている。

今の時代も、吉春のような善良さだけではないという対峙できない。中曾根の言うウソに巻き込まれてしまう。一般的な日々の生活サイクルだけでは「一大事」さえ見逃してしまふであらう。「テキバキしねえと、俺みてえに、これだ！ 見ろ、まあ……こう、俺みてえになっちゃおしめえよ。」と愚痴を言うしかなくなってしまふ。それも吉春は満洲国とはいったい何であつたかを知っていたからこそ余計にそうなる。「第一そんなことをしていかなのじゃ。(中略) みんな自分の家だけの

ことを思つて財産を殖やしたり、家の格式を大切にしたり、出世しようとして一人一人眼の色をかえてガツガツし始めたら、世の中は全体どうなるだろう？」と雪に言っているのではないか。戦中の治安維持法、興行取締規則の発令下でも、三好十郎の作家として立つべき思想の原点は内面に息づいていたはずである。

だから、余計に幕切れの獅子舞はもつと踊り狂つてはしかなかった。

「獅子」の台本は非常にト書きが多い。だから演出も役者も具体的にイメージがつかめなくなつてしまふ。これは大変危険だ。ト書きにたよつてしまふと、観客と同時に進行にならず(実際は観客の方が先に行つていゝ)、見え見えの舞台となつてしまふ。それと、この時代に書かれた芝居はきわめて「日本的」・情緒的であるため、すっかり溺れ込んでしまふ、役者の科白だけでうっとりとなつてしまふ、舞台形象を忘れてしまふ。そうなる緊張も弛緩もなくなり、科白のやりとりにはハズミがなくなり、全体として退屈な舞台となつてしまふ。こういう危険性がこの「獅子」にはある。

とは言え、劇評を書かされるとは思いもせ

劇評

「陽気な地獄破り」(京芸)は愉快な芝居

宮階 延男

「あつ、よいやさ」

「ちゃんちゃんちゃんのちゃん」

四人の亡者たちが陽気に剣の山を登り出すと、客席までが囃子たてる。劇団京芸の、陽気な地獄破り、は、そんな愉快な舞台である。

三年生の童話、という本で、薬屋、軽業師、あんまの三人が死んで地獄へ送られる。地獄の三人旅、を読み、教室で得意になつて話したのは四十六年前の事である。(その頃読み方か綴り方の時間だろう。月に二、三回お話の時間があつて先生が巖谷小波童話集を読まれたり、子ども同士で自分の読んできた童話を話したのである)それだけに私には子どもに戻つたような懐かしさで舞台に見入っていた。

何といつても田島征彦氏の美術が楽しい。オーブンカーテンの舞台に下げられた絵本のような地獄絵が、お話の世界に連れていって

くれる。太鼓と三味、鐘のお囃子がその道案内で祭の宵宮をさまよいつている気分になる。

カーン、ポクポクポクと鐘と木馬が始まり、四人の亡者が暗闇の客席から飛び出すと「キッ！」と悲鳴があがる。幕開きのこの二つの対比が後の展開を暗示して面白い。

薬売りの背中の箱から取り出された白い布が舞台一面に広がって、雲とも霧とも囃とも観客の想像に任せる舞台を創る。流れの鍛冶屋が歯の医者、山伏、手づま師に次々と会う道行だが、この布が実によい雰囲気を生み出す。疝氣、疝癩、赤腹、卒中の死因になつた病名を持つての道中は、今流行のパフォーマンステいおうか随所に笑いを誘い、四人の關係を浮彫りにさせる。墓石のような病名は病いの重さを表しているようで、それなりに意味を持つのだろうか、人魂のような心臓のような、フワフワとした捕えどころのないようなものにしたらどうなるかな? とも思つ

ず、開演前に勧められた缶ビールを飲み干してしまひ、いい気持ちで客席に座つていた。ただやたらとハイテンポの芝居の多い昨今、久しぶりにきめ細かい人間の感情のヒダヒダのところをつくられた舞台をじっくり楽しませていただいた。

今回、演出をされた矢野弘氏は活気づいている。

昨年五月の山口市での、県内の劇団と合唱団との合同による「今日、私はリンゴの木を植える」(ふじたあさや作)を皮切りにして、劇団月曜会との往復が続いている。我々も矢野弘氏にだまされながら、今年も六月十六日に劇団若者座のある宇部市で再演した。これからも互いに付き纏う関係が続きそうだ。「やっと山口県もここまで来た。」は矢野弘氏の口癖だ。次の舞台づくりが楽しみだ。

た。後のエンマの庁での病名の取違えの伏線として重さのない表現も別の味がでるだろう。

この道行が陽気なだけに、エンマの庁へ近づくにつれての不気味さが唐突で不自然さを感じた。四人の行動と無関係に恐ろしさがジワリと出てくる方法はないものだろうか。

エンマの庁は意外性のある後幕の処理がすばらしい。雲か霧か、何ともわからぬ後幕の一部が捲れ上るとエンマ大王が現れるのだが、この捲れる部分がある中央に、ある時は上手に、またある時は下手にと、思いがけない場所から現れて神秘性を感じさせる。けれどもこれが簡単にサツと捲られると軽さが伝ってきて、裁きの廷の厳しさが伝ってこない。幕を捲る速さ、その長さなど、さらに一工夫欲しい。場所によっては、絞りの割り綴帳のように捲つてはどうだろう。さてエンマ大王だが、恐しさより面白さを先に感じてしまった。人間の的でありすぎるのだろうか。しかめっ面で恐ろしく、石部金吉のようなお固い大王が客席を威圧する。それが美人に弱いというボロをだすから観客は湧き、すぐさま澄まして取り繕うからこそ笑いに包まれる。おどろおどろしたものか、蝶の舞を演じる。薄紙の蝶

を扇子の風で本物の蝶のように見せるのだが、私はこんな寄席芸が大好きだ。もし可能なら客席からティッシュペーパーを貰い、目の前で蝶にちぎって、これを舞わす。観客の反応はグーンと大きくなるだろう。素朴な芸だけに今後の舞台で挑戦してほしい。

さて、病名の取り違えから大王を怒らせた四人の亡者が、剣の山へ送られ、いよいよ地獄破りが始まるのだが、鍛冶屋のつくった鉄の草鞋を手づま師が履き、三人の亡者を肩のせて剣の山を渡るといふ可能性への挑戦が、観る者に笑いととも心の感動を呼び起す。冒頭の「ちゃんちゃんちゃんのちゃん」は、まさに四人の心が一致した掛け声である。だからこそ、追いつめられた場で可能性に挑戦した声援がとび拍手がわく。いい場面である。これは大鏡に映して眺めるエンマ大王や鬼のあわてぶりで、余計に強調される。次の熱湯地獄では熱をさますという山伏の祈禱にその挑戦が見られるのだが、熱湯がいい湯加減の風呂になるようすが、もう一つわかりにくかった。ドライアイスで表現できるかどうか知らないが、山伏の祈禱が際立つ（湯のさめるのが想像できる）方法はなきものだろうか。最後の人喰い大鬼だが、恐い声から下手袖に

想像した大鬼の大きさと、あとで舞台中央に表れた大きさとで異和感をもったのは私だけだろうか。舞台袖では大鬼は突っ立っており、後では裾つて顔だけ見ると考えれば、大きさはほぼ一致するのだが、ともすれば亡者たちの視線、歯の医者や虫歯のぬき方、口の中へとび込む下手袖への入り方がよくわからない、舞台からは床と口の高さが同じに見えたり、そこから想像した大鬼は後から出た大鬼よりうんと大きいものだった。あとでエンマ大王が飲込まれるだけに、何か方法がないだろうかと思う。この大鬼の腹の中では、また布が活躍する。虫歯をぬいた歯医者は腹にあるそれぞれの筋を引き、遂に四人が外へとび出す。気づいたら最初四人が出合った場所だった。エンマ大王も空高く飛ばされ、エンマの斤は大騒ぎ、さて四人はこの後どうするか、めでたしめでたしと終るのである。こうした民話の常として、あの四人は今後どうなるだろうという面はあいまいで、何とかしていくものとしてお囃子でまとめてしまう。こうした仕方がないのかなあーと自分自身で不満さに納得させていく。

幕が降りてふり返ってみると、私が子ども時代に持った大きな力をやっつけたという痛

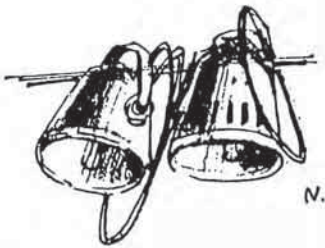
快さが心にならない。一つ一つの場面はそれなりに楽しかったし、限界に挑戦する生きざまに心が動かされたのに、エンマという権力を庶民の笑いで吹き飛ばしたのでなく、うまく立廻って権力から逃れたといった感じに近い。エンマの斤がもつと地獄の不気味さと恐ろしさを持っていたら人間の能力の尊さがより鮮明になり、痛快さがより大きくなるのかも知れない。鍛冶屋、歯医者、山伏、手づま師はきばりすぎで、よく似た性格に見えてしまう。もっとゆとりを持たれたらなあーとも思った。話しかわるが、彦市ばなし、を題材に教師で研究会を持ったとき、天狗の子をエリート天狗として、落ちこぼれ天狗として演じられ同じ場面が役者の主観でどうも変わるものかと感心したことがある。四人の方も公演の合間に今と異なり異なる性格で演じられ、短気なもの、のんきな者、硬派、軟派、さまざま組合せをつくってみる、もし私がこの舞台をつくるならそんな時間をつくってみたい。そこから違つた四人が生れるような気がする。その意味では役以外の演技の方にむしる心をひかれたような思いである。

観たままの思いなので、自分としての不満はあるが、始めに述べたように、一つの舞台

としては優れた出来ばえである。「笑いは知識を持つ者だけの感情である」といわれている。先生が、親が、大人が笑いそれを見て生徒が子が笑う。その時の疑問が小さい者たちへの知識となり育っていく。そうした者達への可能性への挑戦をひめて、親子劇場、学校演劇教室、一般公演へと、いつも一歩前進する舞台を創ってほしい。

(三月、近鉄小劇場。七月、和歌山市市民会館で所見)

(筆者は日本演劇教育連盟会員)



豆評

「仏さわぎ」(劇団埼玉)

農村から出稼ぎに出た父うちゃん、そのまま都会に消えて帰らなくなるというこゝとがひとしきり言われた頃の話で、一寸古い。話は古い、この場合、あまり、それは主

要なことではない。
作業現場の爆発事故で死んだとされた農民喜多郎の遺体をめぐる騒動は、届けられた死体が別人のものであったり、二転三転して、葬式のさ中、死んだ筈の喜多郎さんがノソッと現れるなどの趣向は、わかっ

ても痛快だ。
作者(東川宗彦)の描きたいのは離農に追いつめられた一家の、カラッポになった家族構成。葬式などの村の中の行事となると、蛤にたかる蟻のようにうごめき出す村の顔役。折から何やら地方選挙なども入れて込んで、区長や農協会長、郵便局長、選挙候補者たちが右往左往する「村の構造」を笑いとばそうとうところにあるらしい。これはプロレタリア・リアリズムのパターンである。

うっかりするの浪花臭い、ドタバタ劇になりかねぬこの芝居を、わが由布木一平は、彼の本領で、極めてシリアスに、正に四つにとりくんだ。埼玉の強豪の役者を全部悪役にまわし、それに立ちむかって必死に孤軍を守る留守農家のお母ちゃんをくっきり浮び上げようというのが、狙いと見た。それが成功している。おかあちゃんの秀子役の武井千恵子がいただけだ。

悪役陣では、渋谷洋俊の区長が動き過ぎ、郵便局長の津村雪雄がギクシャクした珍妙な味で持ちこたえ、中山浩光の農協会長が奥行きを見せる。ドンピシャは、候補者辻野元太郎の近藤日出男。

村の構造への諷刺はゴーゴリの「検察官」を思わせ、共同墓地での墓掘りまで出すところなど「ハムレット」のひとコマを見せたりで、なかなかの厚化粧だが、いかんせん、進行のまどろっこさ、重さが尾を曳いて、吹つきれぬ。これは演出の緻量不足というよりも、どうやら古い役者諸君の腰の重さだ。いや、アンサンブルをつくるまでに到らぬ稽古不足と見た。(もも)

(7・16 浦和市文化センターホール)

上手と下手とは……？

— 中部ブロック3月〜6月の上演から —

丸子礼二

(1)

最近、左の肩を痛めてしまった。車の助手席にあった荷物を後部席へ移そうと、片手で投げた途端にビリッと痛みが走った。忙しさにまぎれ、治療もせずに数ヶ月、段々痛みがひどくなってとうとう病院へ通っている。若い時の怪我は放っておいても良くなったものだが、年寄りになると、ほころびが拡がるようである。(劇団の場合も同じかも……)

一応運転ぐらいいは出来るので、何とか仕事も休まず、「釈迦内柩唄」公演の舞台も済ませた。あまり緊張することが出来なかったせい、演技は好評だった。しかし、左手は上げることが出来ず角度と動かし方で痛みが走る。健全な人がうらやましい……

こんな状態で芝居を見て歩くと、観客としてはよくないだろう。この感想文もついついきびしくなってしまうかも知れない。五体満足な人が何をやっているのか! といった

風に……

(2)

3月から6月までの上演は以下の通り。
劇団名古屋 名古屋市青少年のための芸術劇場 3/21・22 名古屋芸術創造センター アンネ・フランク原作 ハケット夫妻脚本 菅原卓訳 久保田明演出 「アンネの日記」
'86名古屋演劇フェスティバル参加 参加6/27・29 名演小劇場 Bプレヒト作 千田是也訳 久保田明演出 「ウソッ!本当?」
(「第三帝国の恐怖と貧困」より)

劇団名芸 第29回公演 シェイクスピア劇場 No.9 4/10・15 名芸平針小劇場 W・シェイクスピア原作 栗木英章脚本 柘植洋演出「国王物語PART2」 第23期研究生卒業公演 5/17・18 名芸平針小劇場 栗木英章作 寺沢宏演出「マネキン館」
岡崎演劇集団 第35回公演 5/31・6/1 岡崎市せきれいホーム ふじたあさや作

浅井克彦演出「円空入定・考」
名古屋演劇集団 '86名古屋演劇フェスティバル参加 6/13・15 名演小劇場 水下勉作 浦はじめ演出「釈迦内柩唄」 第三期研究所卒業公演(若尾・内山舞台教室、柳ゼミかえるの会と合同) 3/19・20 名演小劇場 北村想作 若尾正也演出「シエルター」
劇団夜明け 創立30周年記念公演 第3回親と子の劇場 No.20公演 6/28・29 中津川文化会館 井上ひさし作 鈴木弘文演出 「11びきのねこ」

人生六十年記念モリケンひとり芝居 5/17 四日市市文化会館第三ホール 6/28・29 うりんこ劇場 森賢郎作・演出(そして独演!) 「怒髪夫」
はぐるま、すがお、上野市民劇場は公演日が7月なので次回にまわることになる。

(3)

劇団四日市代表森賢郎は私にとって昭和二十四年名古屋演劇集に入団当時の先輩であり、四十年近い古なじみである、決して器用ではない彼が、レットパージで国鉄を首切られ、転々四日市に移り、弱小劇団を抱えて延々と苦斗を続けた人生は、六十年を機会に一人芝居で見せたい内容があるだろう。

昨年湯の山ゼミの実行委員長挨拶を、フーテンの寅さんをもじって演じてのけた気骨を楽しみに、東名阪高速を飛ばして行った。左手の痛みに時々顔をしかめながらである。

国鉄永和駅の少年駅手として、客車がたれ流した線路のうんて掃除や駅長官舎のフロア焚き等の雑用に追われる話、駅名の連呼がなかなか出来ず、やっと声が出て「えーわ、えーわ」と叫んでいるとお客が「どーでも、えーわ」と冷かす話、教習所時代から徴兵検査の性病点検にびっくりする話など独特のユーモカが下積み苦の苦労を包んで面白い。六十年の人生を裸でお客の前にさらけ出す覚悟が、シシとなっているのだ。

そして空襲、恐怖の体験も「B29の爆弾入りが開くのを、見上げる角度が生き残れるかどうかの境目」だったり、「中隊長どの、お伴します!」と一語に連隊本部の壕にとび込んだり……と笑わせる。

後半、復員したケンローに母親が愛知時計の爆撃で、父が死んだ事を物語るあたりからは、悲惨な地獄図の描写。母親に扮装を変えて、父ちゃんの死体を探し歩く様相を演じ、たづね、たづねて遂に見つからず、その終点はゴミ焼き場の焼却の穴に、トラックから、

人々の死体がざざーっと投げこまれる場面、「これが、戦争だ……。母ちゃんの髪の毛は天を向いて逆立った!」題名の「怒髪天」となった終る、

戦後のくだりまで、期待したのは欲張りすぎだった。また、続編でも、待つことにしよう。あの根性なら、人生七十年でも一人芝居がやれそうである。彼の芝居とのつきあいは長い、やはり今度が一番見応えがあった。終り近く、むごたらしさに泣く所が、一寸続きすぎて、役者が昂奮しっぱなしで間があき、やや問題を感じたが、名古屋公演のうりご劇場の時は、その辺も一段ひきしまつて、ぐっとよくなっていた。名も無い戦争の犠牲者たちの一人々々にならわかって、怒りの声を聞かせたい心情に共感する。

(4)

人間の一代、本人が語っても難しい、まして、謎の人物円空ともなると……

生涯全国歩き、十二万体的手彫り仏像を残したという円空……。ふじたあさや作「円空入定・考」は入定直前の円空を旧知の七人の男、女が語る。出世欲の円空、要領のいい円空、アイヌのために苦悩する円空、母を思う円空、さもしい根性を中国人の医者に叱られる円空、

生き仏として精進する円空、女色におぼれる円空……そして生きながら我が身を地中に埋め、念仏断食して即身仏となる入定の行に今る円空……そのいづれもが人間円空なのだ。

役者は大変である。円空役もふくめて俳優9人が、いくつもの役を演じる。円空(杉浦英憲)は熱演だったが、年令の変化も判然しない。他の俳優も、その時期、立場の人物になり切れず、素のままの劇団員個人に見えてしまうのだから、セリフが生でできえ、筋の発展を追っかけるだけのことになってしまう。

こういう形式、演者本人一人物一その回想中の自分および他の補助的人物の演じわけによる戯曲構成に対しては、それ相応の演技技法、それも演出との徹底した作業による高度な追いつめが必要だと思っただが、岡崎演集の舞台はまだ探りつづけている段階だった。

それにしても、両袖の張物にスライドで投影された円空仏像の、多彩、素朴、奥の深さ、豊かさ……生身の人間の表情ではとても及ばない。すぐ横でやっている俳優諸氏が気の毒になっってしまう。

(5)

百年戦争というのが、イギリス、フランス両国の支配権を廻る戦争で、最後に聖少女

ヤンヌ・ダルクの奮戦によってフランスが盛り返して終り、イギリスでは王位継承をめぐる白バラ党と紅バラ党の争い―三十年戦争が

かなり楽しい舞台が出来ただろうに、勿体ない話である。

(6)

「ウソッ！本当」というのがプレヒトの「第三帝国の恐怖と貧困」の上演につけた題名、劇団名古屋はどんな新工夫でこの作品にのぞんだのか、大いに期待してしまつた。

（終つて見ると、思い切つた題名のような変更はほとんどなかった。するとあれは客寄せのためだったのか？開演前に下がっているカーテンに描かれた漫画の人物もウソッ！本当！と呼んでいたのに……）

ほとんどの観客にとってヒトラー・ドイツとか、ナチスなどというものについては、立ち入った知識はこの芝居の舞台から受けることになるのではなからうか。時はどんどん流れ、第二次大戦にいつて語りつがれる量は少なくなる一方である。出来栄えよりにかく上演することの意義が重くなって来ている。そういう意味で、プレヒトの狙つたえぐり出す効果よりは紹介する仕事にかたむくのも止むを得ないだろう。ナチスの鉤十字の腕章とヘルメット、兵士達の合唱が流れる雲を背景にカッコよく響き（とうとう最後までカッコいいままだった！）ヨーロッパをのし歩く彼等の背

景―第三帝国をと見えるドイツ国内の実態が11の小品を連ねて描かれる。純朴だった青年が、周囲の人々を恐怖させる突撃隊員となり、心まで変つて行く、娘は「私の背中にもしるしがつけられてるんじゃないかしら？」と泣く。「白墨の十字」。職場の明るさについて無理矢理ラジオのインタビューを受けさせられる「勤労者の時間」。殺害された夫の詰められた「箱」を破ることすら恐れる家族。外国の論文を読む時間の大部分を周囲を警戒し、ビクつくことに使う「物理学者」。暴行を働いた突撃隊員を何とか無罪に出来ないかと絶望的努力をする判事。チョコレートを買に行つた息子を密告に行つたと感違いして疑心暗鬼に苦しむ夫妻：ファシズムが許される時は、許した者が必ずいるのだから……という主張はいいのだが、多くの演技は底が浅く、存在感がない。一つ一つの役、セリフをもっと大切に工夫努力して欲しい。三月にやつた「アンネの日記」の再演では、多少とも進歩が見られたのだから。

かよわい乙女の身でフランスを滅亡から救う戦いに身をささげ、最後は王候・僧侶のみにくい暗斗のため、火刑台上に死ぬジャンヌの悲運、あるいはせむしの醜い身体をかかえ悪事を重ねて王位に昇るリチャードの迫力、こういう一つの話だけを台本化してくれたら、わかりにくい作品だった。

……まだシズン半ばなのだが、コマ切れ芝居が多くてやり切れなかった。役者が上手に出来ないのは、本人の責任ばかりではないのだから、中部ブロックの大きな課題だと思ふ。

「国王物語PART II」は、世界史には詳しくはらずと自分で思っていた私にも、どうにもわかりにくい作品だった。

……か、人間にならせられ……た……か。そつや、人間におなりあそばされたんや。

カンナの咲き乱れるはて

―遠い遠い戦争よ―

こばやし・ひろし

(1)

戦争は遠い

戦争を知らない人が多くなり

私たちが知らない人が多くなり

けやきの梢に吹く風だけが

私たちをなぐさめてくれる

戦争はもう遠い

戦争は遠い

大陸のあの恐ろしい一日一日

咲き乱れる赤いカンナが目にしみる

西陽の傾くあのはてのはてに

私たちの思いは消えて行く

戦争はもう遠い

遠い戦争よ、私の悲しみを忘れないでくれ

私の若き日々を忘れないでくれ、遠い戦争よ

戦争よ

歌が途中で止まってもいい、

中曽根総理の天皇在位六〇年奉祝式典の祝辞

総理 御在位六〇年に加うるに歴代天皇中、

最高の御長寿の御誕生日を迎えられ、衷心よりお祝い申し上げます。

昭和の六〇年は、まさに激動の時代でし。

た。陛下はこの波乱の時代を一貫してひたすら平和と人々の福祉を念願して来られた。今やわが……。

墓になつている兵隊たちABCDE
FG、小道具はなしでもいい。

A そうか、天皇陛下は在位六〇年か、在位六〇年、長生きせられられ、せられられられ、せられ……た……な。

D 変な舌かむような言い方せんとてええわ。昔とちがって神様やなくて人間にならしたんやで。

A そつや、人間にならせられ……た……か。そつや、人間におなりあそばされたんや。

- A けど、どっちにしても長生きや。
 B 俺んたの四倍やもん。
 C 四倍？
 D 四倍や、八五やぞ。
 E 四倍なあ、すると早いこと死んだんやなあ、俺んた。
 F そうやそうや。
 G 女も知らずに。
 H 嘘いえ。
 I いえ、ほんとであります。
 J 女知らんて誰が信ずる。
 K いえ、私はほんとであります。一度も買ったことはありません。
 L 一度も買わんでも、只でクレーン押しこんだやろ。
 M いいえ、それもやりません。
 N ほんと。
 O ほんとであります。
 P ほんとにや。
 Q ほんと。
 R 一度も。
 S 一度も。
 T 変わった奴やなあ。もったいない。
 U 自分でもそう思っております。
 V しかし、女なんて知らん方がええ、今でも忘れられんもん、あーあ、よかったなあ、娼妓で忘れられんの、あれだけやぞ。
 W (しみじみと) あれだけや。
 X あれだけや、あれだけやぞ、ほんとに。
 Y うまいもん喰えたわけやないしなあ。
 Z しかし、俺いろんな奴とやったが、女房が一番よかった。
 AA また、これも変った奴やなあ。
 AB いや、女房が一番ええ、第一タダやもん。
 AC 何んぼとられる心配せんでもええもんなあ。(笑う)
 AD それやて。しかし、あれから四十年たつたんやぞ。
 AE 四十年たつても忘れられんて。そんでもお前の種も立派に稔ったが。
 AF ま、おかげで、もう、四一やぞ、皇太子と十違うで。
 AG というと、皇太子五十こえとるんやなあ。
 AH こえとるこえとる。
 AI ほうか、皇太子様も五十こえあそばされたか。
 AJ それで、五十こえても皇太子か。これめかわいそうやなあ。
 AK そうやて、処女のまま棚ざらしになったみたいやでなあ。もう、あの人白髪があるぞ。
 AL 白髪の処女か。
 AM それに皇太子の皇太子が。
 AN それを皇太孫というんや。
 AO 皇太孫、皇太孫か、ゴタイソウなこっちゃなあ。その皇太孫が嫁さんもらうというんやろ。そうしたらすぐやぞ、皇太孫が。皇室は産兒制限せんて。
 AP サックなしか。
 AQ なしなし、万世一系やもん。
 AR そうすると皇太子が三人できるわけや。こりゃええ。万世一系の皇太子が。
 AS それがみんな処女。
 AT それで人間死に時つてあるんやて。いつまでも生きると万世一系がつまってるで。
 AU やっぱり早よう死んだ方がええか。
 AV あんまり早よう死んでもあかんわなあ。
 AW そうや、時期をえらばにや。俺んたのようにあんまり早よう死んでもあかんし。
 AX ちよつとまで、俺んた死んだんやないぞ。
 AY そうや、死んだんやない。
 AZ 俺、死にたなかつたもん、かわいい赤ん坊おるし。
 BA 俺やって一しよや、七生報国つて、七度

- も生まれかわりやいいぞ。七度どころか一度も生まれ変われん。
 A 四〇年同じとこ。
 B そうやろ、一度も生まれ変われん。何が七生報国や、ずつとこれからもここに、思い起すのは、……あの死んだ時だけ、死んだ時だけや。
 C 死んだ時なあ。
 D 俺、真つ暗な壕の中で待機しとった。突撃隊に選ばれたでもうあかんと思つた。断るわけにいかん、もう最後やと思つた。壕の上をみると星がきれいやった。村思いだしたなあ。虫の声も聞こえた。パリパリ、ドカンドカンと始まった。いよいよ、いよいよと思うと小便がちびるんや。ええい、いらんもん全部出しとけて、出してまっても、まだ出るような気がする。もう緊張も限度やと、その時「突撃！」の命令、無我無中でとびだした。敵陣にとびこんだら、二・三人の敵が転がった。そこへバチバチと手榴弾、思わず伏せたが、右足がジーンと来た。「しまった！」と思つたら「木塚！うしろ」という戦友の声、振り返るや目の前に敵、思わず引金を引いた「ギャツ！」と顔を歪めて敵さん、血を吹き出しつつ重なるように俺に銃剣をつきさして来やがった。ズーンとした。それで気が遠くなった。「木塚！がんばるんだ、がんばるんだぞ！木塚」という声が聞こえた。それがだんだん遠くなっていった、だんだん。「おっ母さん、おっ母さん」とつぶやいたような気がした。それで、それで俺は氣を失つたんや。
 E お前はどいう死に方やったんや。
 F 恥ずかしい死に方やったで。
 G 今さら恥ずかしいってことがあるか。みんな死んでまいったんや。
 H 恥ずかしい死に方やったで。
 I 死に方に恥ずかしいも名誉もあるか。名誉という考え方がおかしいよ。負けた戦争に何が名誉や、俺なんかもつと恥ずかしい死に方や。それだけにクソ！と思うよ、こんな戦争なんかしんだらと。何しろ重裝備というと、銃、弾薬、それに手榴弾、一人三〇キロはあるもんなあ。一週間もしたら食い物は何にもなくなる。畑の大根や、芋のツルをがじって何とかしのぎ、行軍、行軍。その上激しい戦争で体がまいつとるから、すぐ下痢や。飲んだらあかんといわれとるが飲まずにおれん。俺フアラや、もう歩くこともできん。立たんか！歩かんか！上等兵殿、もうだめです。先に行つて下さい。馬鹿者！落伍したら野垂死にだぞ！と銃でなぐられる。野垂死、それにちがいない。立つ、歩く、動けん、立たんか！とまたなぐられる。……せめて軍靴をぬぎたいんやが、雨とぬかるみに痛い足はふやけて、ぬぎもできん。立ち上がろうにも立ち上がれん。もう死なせて下さい、楽にして下さい、お願いです、お願いです！……：もう俺は死んだ方がええ、死ぬことはかり考えとった、そればっか。……死なせて下さい、お願いです。……馬鹿者！一発の弾丸も撃たずに天皇陛下に恥ずかしいと思わんのか！なぐられる、けられる。許して下さい、許して下さい。もう痛くもなんともなかった。よし！弾薬装備一切を取り上げろ！武士の情、手榴弾を一発与えておけ！その俺を見ながら進む戦友たちもただ、うつろな目でフアラ歩いてた。自分のこととて精一ばいで人のことどころでなかつたと思う。……しばらくぬかるみを行く

行軍の音がきこえていたが遠くなると同時に、俺は、気が遠くなった。

間

B 湘桂作戦はひどかったなあ。

C 地獄やったよ。

F そうか中国でもなあ。中国は楽やと思っただが。

C 何いってると地獄や、衡陽なんか四七日奪ったり奪い返されたり、四七日間の激闘やったんや、ガダルカナルやインパール作戦だげやない。

F 義一っあんは、ええ話ばっかさっせるが。

A 俺んたの頃はよかったもん、勝ったもん。女やっと思っままやったんや。ただなあ、鉄砲地べたにおいて押さえこんどるとこみつかると、どえらい叱られた。菊の御紋章を汚すとは何事か！とって。やっとの最中にやぞ。立て！立たんか、一べんにしおしおじゃ。一物出したまま、ピンピンと往復ビンタ。その間に女は逃げてっまうわなあ。わやくちゃや、そんで、それからちゃん銃は壁や柱に立てかけてやったんや。

E そうやねえ、菊の御紋章があった、鉄砲やろうと大砲やろうと。みんなジャングルの中へ捨ててきた。

A そんなもんお前、日本の武器はみんな天皇陛下の武器やもん。それを地べたなんて、どんな戦争の真最中だって許されん。

D 十九年二〇年にはそんなおいしい話は考えられせんよ。何しろ湘桂作戦では三六万人動員されたんですが、十万人死んだるんです。十万人ですよ。

F 負け戦はいかんなあ。俺んたもガダルカナルで、マラリヤと熱と飢えとで、ジャングルの中で、早く死にたい、楽にたいたい。それだけ、それを祈るだけの毎日やった。自分の傷口にわくウジを払う力もなくじつと見つめとった。じつと。

G 何しろねえ、海軍さんが夜の中に食糧をドラム缶につめて一〇〇コ、二〇〇コと海岸に落として行ってくれんんですが、夜の中に、そのドラム缶を五〇コ引き揚げたらいい方で、あと一五〇コは引き揚げられず朝になるんです。何しろ腹がへって、栄養失調ばかりでしょう。力がないんです。だから悲しいかな、引き揚げるにも引き揚げられないんです。そうすると朝必ずグラマ

ンがやって来て、バーと機銃掃射でみんな海のもくず、のどから手が出るような食糧が目の前で。ただ、僕らジャングルの影にかくれて、ぼーっと見とるだけ。海軍さん怒る怒る、命がけで運ぶのになにしとるんや。

吉田治郎、高田秀子、新聞記者と共にくる。

吉田 見て下さい。これが私共の部落の墓です。これだけが戦死者の墓なんですよ。全部で一六基あります。今一〇〇戸をこえていますが、当時五二戸といわれたんです。単純に戸数割にすれば三分の一ですか。記者 戦争は遠くに行ってしまったと言いますが、こういう戦争犠牲者を考えたら。

吉田 そうなんです。テレビを見て、ゲートボールをやって、孫に頼りずりして、何んの苦労もないんですが。この頃、しきりに戦友を思い出すんです。年でしょうか。見てください。私が申し上げたとおりでしょう。二人を除いてあと全部、一九年二〇年に戦死しているんです。

記者 一六人中一四人がねえ。

吉田 例外があるかも知れませんが、どこも

同じだと思えます。戦況があやしくなれば、犠牲者が無茶苦茶多くなるんですよ。

記者 戦死者の多くが一九年二〇年に集中してるんですね。いや、はじめて知りまして。一六人中一四人。

吉田 私は湘桂作戦に参加したのですが、その犠牲者がここに四人もいるんです。吉田金治は別の部隊でしたが。(高田秀子を見て)この方の御主人もその犠牲者なんです。

秀子 治郎さんが行きたいとおっしゃるので。どんな所で死んだか、私も行きたいんです。

吉田 何しろ三六万人動員され十万人死んだんです。咲き乱れるカンナのそばでばたばた死んだんです。ばたばた。中国大陸で昭和二年から二〇年まで、八年間で全部で四八万人死んだんですが。この作戦だけで十万人死んだるんです。

秀子 そのカンナが見たいんです。

B そういや、カンナが咲いとったなあ。真赤な、真黄な、そのそばでウジがわく、ハエがたかる死骸がごろごろ転がった。

秀子 下の子が生まれたばかりの時、赤紙が

来たんです。役場の常さが田んぼへお茶をもって家を出ようとしたら、自転車できて、「来た」と一言、「来たって?」「来た、アカガミヤ……」というんです。もう無我無中で田んぼに走りました。お父ちゃん、お父ちゃん!

田草を取っているC。

C ……。

秀子 お父ちゃん!

C ……来たか。

秀子 来た、来た、来た、赤紙が……。

C ……。

秀子 お父ちゃん!

C ……。(仕事を始める)

秀子 お父ちゃん!

C わかっとうる! (そのまま仕事をつづける)

秀子 そのまま仕事を続けるんです。そして夕方まで……。三日後に行きました。お父ちゃんが行って一週間ほどして息子と面会して来た同じ村の亀さんが「明日の晩、あんたんとお父ちゃん、名古屋駅出るらしいで来てくれや」と言づけてくれたんです。私は翌日、タバコ買って寿司つくっ

て名古屋駅へ駆け付けました。夜の十一時頃やったが、たんと兵隊さんが駅の構内にいました。どこを見て廻ってもお父ちゃんはいないんです。「第二中隊の高田はいませんか、高田です」、気が狂ったように聞いて廻りました。私は駅の構内を走り廻ったんですが、父ちゃんもうプラットホームにでていたんです。それに気づいた時は、列車が出たあとでした。私はへなへなと座りこんでしまいました。それが……こうして父ちゃんが石になってしまっただが、タバコと寿司が渡せなんだのが心残りで心残りで……せめて、この人が死んだ土になんとかタバコを供えてやりたいんです。今でもあの日のことはくり返しくり返し思い出します。

吉田 何しろ、この作戦はですなえ。大陸一貫打通作戦といわれ、潜水艦やB二九の攻撃で制海権や制空権を失った日本が、何とかインドシナを通じて南方との陸上交通路を確保したかったんです。ところが、もうB二九の基地が衡陽や桂林にあり、大陸の制空権もなかったんです。夜行軍し、昼山や壕にすくんでいて、夜襲、夜襲のくり返し、泥沼でした。何しろ十万人をこす人間

が死んだんですから。

記者 じゃ、吉田さん、その戦友の眠っている大陸を訪ねたらいかがですか。私たちが遠くなった戦争を角度を変えてとり上げてみようと思っていたんです。お恥ずかしい話ですが、殆どが一九九二年になくなっていくということは初めて知りました。その戦争を取り上げなければなりません。しかも、ジャングルの激闘でなく、中国大陸のそれを。

吉田 そうなんです。アメリカには負けたが中国には勝っていた。南方は悲惨だったが、中国では楽な戦争をしていたと思っっている人が沢山いますが、とんでもないことです。私たちが戦って来た湘桂作戦を見てもらえば、南方だけじゃない、いや、中国でこそ負けたということがわかんと思うんです。満洲をのぞいて、この大陸に一〇五万の軍隊が釘づけされたんですから。

記者 じゃ、早速社で募集しますので、湘桂作戦の跡を訪ねてとでも題して。私もお供します。行きましよう。あなたという長沙、衡陽へ。

秀子 私も喜んでお供します。お父ちゃんに会えるんやから、妙ちゃんも行くと思いま

す。
記者 早速計画しましょう。

C なんや、お前までなんで泣くんや。
F もらい泣きや。

A 俺も戦地へ行く時、女房やお袋会いに来た。衛門出て、知らしたるでどっかにおる筈や、どっかにおると思ってキョロキョロして行進しとったんやが見つからん。一ぱい人はおるんやがどこにもおらん。なんとか会いたい、一目でええで、なんとかと思ったら、駅の近くになって「お父ちゃん、お父ちゃん！」という声、走りながらついてくるんや、何かいっとるんやが、何いっとるわからん。俺も呼びかえしたいんやが、そんなことできん。俺で休憩があると思いきんどったんやが、それがお前、そのままプラットホーム、そこで終わりや。

D 義一つぁもや。
A うん……。
B おい、行かへんか。
E どこへ。
B あれらについて。
E あれら？
B あれらについてや、治郎さについてや。

C 治郎さについて、どこへ。
B 中国や、あの死んだ衡陽へや。

D ……衡陽へ。
B うん衡陽へや。
E そりゃええ。
B こんなとこにいつまでいたって仕方がないやろ。
D 行こ、行こ、……行こ。
B 四〇年たって死んだとこ訪ねるのもええやないか。俺んたが土になったとこへ、な。
D 土になったとこや、魂は故郷へもどったかも知れんが、もう一度、土になったとこへ戻るんや。土になったとこへ。
C まんだカンナの咲いた土になって俺んた残っとる。
D ……土になったとこか。
B こんなとこにいたって仕方ないぞ。
G それにちがいないが、俺んたガダルカナルやが。
F あんなどこへ行ったって、蚊や蛇がおるだけや。
B 中国はちがう、真赤なカンナが咲いとった、真赤なカンナが。

E そうやったなあ、黄色のカンナも。
D きれいな桃の花も一ぱいやった。あの土

になったんや。

E そうや、行こ、あの衡陽へ、俺んたを吸いこんだ土を訪ねて。
A そうや、俺は衡陽やないが、一しょにつれてっくれ。

F 俺んたもガダルカナルやが、前は中国に行っったんや、戦友もあそこで死んだら、俺んたも行こ、俺んたも。

G うん、広東の三水やった。臼井も、白木も死んだら、あそこはハイビスカスが咲いとった。

B 行こや、俺んたの土を訪ねて。

生まれたところへ帰ってみたいくて
けやきの木の下でみんな眠ったが
いつまでたっても遠い大陸は忘れられ
ない
行ってみよう

あの強い日ざしに輝くカンナの街へ
そして共に立いでみよう、もう一度
カンナの花びらをむしりとして

猛烈な戦闘音、それが遠くなる。

B 次は俺たちかと思ったらふるったなあ。

C 三日間壕の中で同じ姿勢でいたもんやで体が痛くて痛くて。

B 飯盒炊けないし、腹はへるしなあ。後方から、むれたような握り飯が届けられるだけや。それが口に入るの一日一個ぐらい。

C 酔っぱかろうが、甘かろうが、もう、分らんもんなあ。へってへって。

B 腹がへるってたまらんなあ。たまらん。
C (しみじみと) たまらん。

D たまらんよ、たまらん。それで三日目突

撃になったんやが、もう無茶苦茶やった。なんでもいいフラフラで突込むだけ。俺の隣で木田軍曹の鉄兜がカーンと吹っとなんとおもったら。

E 土井も伊藤もここで。
B 六人死んだ。

H Iあらわれる。

B 木田軍曹じゃありませんか。それに伊藤。

H 高田か、お前たちも来たんか。

C はい。ひさしぶりです。

H 俺たちも無性に来たたくてなあ。

B 同じであります。私たちも。

I 旅は道ずれというから、一しょさせてくれよ。

B こちらこそ、いや、なつかしい。これはみんな同郷の仲間たちです。

H そうですか、よろしくお願いします。

C おい、あれは衡山だよ。いよいよ衡陽だぜ、衡陽。

D むかしのままだなあ。そうすると、あれが貝殻陣地になるのか。この沢山の丘で苦労したんやなあ。

B なにしる、この一つ一つの丘をめぐって

四七日間撃闘がつづいたんや。

F しかし、ジャングルよりいいなあ。

E この駅の向こうにある丘が三三高地や。

B 三三高地か、とってとられてとってとられて、死んだ死んだ、ごろごろ死んだ。

C 死骸を収容できなかった。何十人という戦友を崖の下に集めて泥をかぶせるのが精一ぱい。

B 俺はここで死んだんや。七月一四日……。

D おれもや、二日あとの、七月一六日、小隊長も次々死んで鈴木軍曹が小隊長やった。四〇度近い壕の中で、みんな裸でふんどし一丁やった。

B 裸の軍隊か。

みんな物思いにふける。猛烈な戦闘音。

音。

中国旅行者の通訳範、吉田、秀子、記者等あらわれる。

範 今日お供する衡陽の中国旅行者の範です。

記者 毎朝新聞の木戸です。こちら吉田さんです。

範 何でも御要望は出してください。できるだけだけの事はさせて頂きます。

吉田 お世話になります。いや、こんな勝手なことをお願いするのはあつかましいわけですが、申すまでもなく四〇年前、お国を侵略し、言葉で現せない御迷惑をおかけした者の一人です。その折、たくさんの戦友を失いました。いや、それ以上にお国の人々を殺しているわけですが、それを棚に上げて申し訳ありませんが、戦友たちが死んだ土が踏みたくて、こうして参った次第です。こんな恥ずかしいことをいえる義理じゃありませんが、わがままを許して頂きたいと思えます。

範 いや、それはもう終ったことです。それにあなたたちも日本の軍国主義の犠牲者ですから、一銭五厘で召集されたというじゃありませんか。

吉田 ありがとうございます。そういつて頂いて。紹介しますが、この方は死んだ戦友の家族の方です。

範 そうですか、大事な一家の柱を失ったいへんでしたでしょう。

秀子 ありがとうございます。

記者 いや、範さんなかなか日本語がお上手でくわいすねえ、一銭五厘なんて。

範 いや、まだこの前聞いたんです。日本語

はだめです、これからです。

記者 とんでもない。

範 ここが御希望の楊家塘です。

吉田 ここですか、ここねえ。秀さん、健ちゃんはどこで亡くなられたんです。高田上等兵はここで。ここに野戦病院があったんです。秀さんにはずーとかくしてきましたが、ここへ来た以上、正直なことを言いますよ。高田さんは……実を言うと、普通の病

気じゃなく、コレラだったそうです。

秀子 コレラ？

記者 だったそうと言うと。

吉田 噂でしか知らないんですが、もっぱらそういう話でした。軍の機密でしたが、その噂に私たちは恐怖をもって、この村を見守ったものでした。

秀子 コレラ……戦病死ということは聞いてたんですが、コレラで、父ちゃんか。

吉田 そう、ばたばた死んでいったそうです。しまいに二〇〇〇人をこえたと言う話です。

記者 二〇〇〇人、コレラで。

吉田 何しろ、食糧なんて、みんな現地調達ですから、現地調達という聞こえがいいが、中国のお百姓から取り上げるんです。

日本軍が近づくると一斉に逃げ出して、どの村ももぬけの殻ですが、分隊毎に農家を振分けられ踏み込むんです。今でもメシという日本語が中国語になっていますが、「メシ寄せい」と踏み込んで荒らし廻ったから、中国語になったんです。もちろん、どこも大抵かくしてしまっていないのですが、向こうが死にもぐるいなら、こっちも死にもぐるいなんです。かくし場所の山や畑の新しい土を探すんです。ようやくみつ

けて掘り出してみると、前の部隊が徴発したあとなんてたびたびでした。だから、むろん中国人は栄養失調になり、まささに老人や子供が犠牲者になったんです。当然衛生状態が悪くなるが当たり前です。

E なに、コレラ!

B はい、コレラが発生しました。昨夜、第二病棟から猛烈な下痢患者が続出しました

が、単なる下痢でなくコレラの症状であることが判明しました。

E それは確かか。

B 確かだと思えます。もう無臭の透明の下痢と嘔吐を示しております。昨夜から今朝にかけて一挙に六〇名程にふえております。

E よし、緊急に隔離せよ。そして発生源をつきとめよ。

B 発生源は中国人部落にちがいありません。この数日葬式がつきつき出るので見て廻った所、明らかにコレラ患者と思われる者が、どの家にもいることがわかりました。消毒薬は全くありません。

E よし、わかった。師団司令部に直ちに報告し、スルホニアミト剤の供給を要請してくる。

D それではお前は軍医か、医者か。そんな薬があるなんて甘い考えで戦場に來ているのか。この戦争は生きるか死ぬかだぞ。

E はい、それはわかっております。

D わかっていて薬とは何事だ。大学の研究室にいろのとちがうぞ。

E ……。

D 医者だったら、自分で解決しろ。軍医というのを忘れるな。

E しかし、せめて消毒薬の供給がなければ隔離のしようがありません。効くか効かな

いかは知りませんが、竹の黒焼きの下痢止めしかありません。それではコレラの手当てに手ができません。

D 馬鹿者! そんなことはわかってる。わしが聞いているのは、薬がなければ消毒できないのかということだ。

E と申しますと。

D 自分で考える、戦場にいる軍医として。

E ……。

D それではお前軍医大尉か。

E ……その、つもりでおりますが。

D 何寝呆けているか。焼くんじゃ。焼く以外ない。完全消毒じゃ。焼け、すべて焼くんじゃ!

E 焼く。

D そうじゃ、すべて焼く以外ない。

E しかし、中国人部落を焼くことはわかりませんが、……罹患した兵たちは。

D まだわからんのか、報告によれば患者は一日一日増加している。罹病したら助からんことはわかりきったことだ。そうなれば隔離して処分する以外ない。楊家塘に収容している野戦病院を完全に隔離し一兵も入

れるな、一兵も出さな。他の部隊に飛火してみる。どういふことになるか。いいな。

師団司令部の命令だ！わかったか。

E わかりました。(ライトEのみになる)
そして私は中国人居落を焼きまわり、野戦病院を隔離しました。一兵たりとも出入できぬよう完全に隔離したのです。

「動くな！どこへ行く」「水が飲みたいんです、水が」
「ならん、戻れ！戻るんじゃ」
「動くな！どこへ行く」「水が飲みたいんです、水が」
「ならん、ならん。直ちに戻れ、戻るんじゃ！」

E それでも、骨と皮だけの脱水状態では水なしではたまらないのです。川の水を呑みに行き、蟻のようにたかかって、ばたばたとその場で死んで行きました。五〇人も六〇人も。死骸の山がきずかれるのでした。そして一人たりとも隔離された部落から出さなかったのです。コレラは二日三日ではたばた死んで行きます。一日五〇人六〇人と、多い日は二〇〇人をこしたのです。私たちはその日を持ったのです。待つ以外なかったのです。こんな野戦病院なんて……。

吉田 地獄や、地獄。

E 死を待つだけとわかった患者は、自分で死にたいと戦友と立ち上がり、病室から、病室といっても接収した農家ですが、銃剣で差しちがえようとしますが、差しちがえる力もなく、ぶっ倒れるのです。私どもも衛生兵も、それを止めるでもなく、遠くの方から、うつろな気持ちでじっと見ていただけでした。そうした力さへ、私たちは失っていたのです。

秀子 かわいそうに、誰にも看とられず。
C 看とられるどころか、衛生兵も入って来なかった。自分たちに伝染することを考えたら看病どころでなかったんだよ。患者だけがただただ死を待ってごろごろごろ。ミツコーミツコー！と叫んで気が狂い隣の兵隊に抱きつく者もいた。その抱きついた兵隊は骨と皮がっかになって、もう冷たくなっている死骸なのに。

秀子 やめて、やめて！もうやめて！
C そうして、俺もなす術もなく、垂れ流しで、コレラなんて一日五〇回や六〇回やない、いつでもともない垂れ流しなんや。それで骸骨のようになり、気を失っていったんや。その時になってはじめて、知った。

死というものは実にあっさりしたものと。

吉田 秀さ、しつかりして、こんなところへさそって悪かったかも知れんが。

記者 高田さん、大丈夫ですか。
秀子 大丈夫、大丈夫。……戦争ってようわかりました。私の想像していた以上です。父ちゃん、お父ちゃん。これ、タバコや、日本のタバコ、あの時渡せなんだ、日本のタバコ、吸って、十分吸って、……十分。

C 秀子……ありがとう。(消える)
秀子 お、お前さん！
吉田 ……。

秀子 ……ようわかりました、よう。(範に)
あの、お線香上げさせてもらっていいですか。

範 線香、いいですとも、いや、聞いていて、本間に周恩来総理のいわれた通りです。日本人も日本軍国主義者の犠牲者だということがよくわかりました。

秀子 ありがとうございます。中国の方からそういつて頂くなんで、何と感謝していいかわかりません。ありがとうございます。ありがとうございます。帰命無量寿如来、南無不可思議光……。

俺でも犠牲者なのか

ほんとうにそういつていいのかわ
侵略戦争のほんとうの犠牲者から
そういつて甘えていいのかわ

俺らの死の悲しみも忘れられて行く
しかし、侵略された犠牲者の悲しみは
ほんとうに消えて行くのかわ
侵略された犠牲者の怒りは
ほんとうに消えて行くのかわ
カンナは赤い
大陸の夕陽はより赤い

範 ここが台元寺です。きれいなカンナが咲いていますねえ。

吉田 ここです。たしかにここです。
範 なつかしいですか。

吉田 全く変わっていません。昔のままです。
四〇年前のままです。山も、この豊かな田畑も。

範 この辺りは昔からの穀倉地帯です。
吉田 とろろで、範さんの故郷というかわ、生まれられたのはどこですか。

吉田 衡陽。

範 いいえ、武漢です。

吉田 (ほっとして) 武漢ですか。あそこはいいところですわねえ。

範 来られたことがあるんですわ。
吉田 いいえ、通っただけですけど。東湖は見ました。範さん。おきれいですわねえ。

範 (びっくりして) えっ。
吉田 お化粧してらっしゃらないのに。
記者 中国の女性はあまりお化粧しないんですわ。

範 お世辞うまいですね。この頃しないことないですよ。
記者 独身ですか。

範 そうです。
記者 晩婚奨励で一人っ子政策だそうですが、問題あると思うんですが、どうですか。その中には親戚がなくなっちゃうじゃないですか。

範 そうです。確かに問題あります。しかし、ここ十年位と考えると、人口抑制に見通しがつくまでです。

記者 もう一つ聞きますが、教科書問題、範さんどう思いますか。
範 どうって、私の考えですか。

記者 (うなづく)

範 さあ。

記者 率直にいつてください。

範 率直にですか。

記者 そうです。それが聞きたいんです。新聞記者ですから許してください。

範 率直にですか。率直にいつてもらえばですわねえ。私の考えですよ。私は日本の侵略戦争は、これは日本人がもっとも厳しく問いつめるべき性質のものだと思わんです。とすれば中国がとやかく批判する必要はありません。それを批判しなければならぬ所へ追いつまれましたが第一おかしなじゃないでしょうか。私はそう思います。

記者 そうですわ、範さんのおっしゃる通り日本人の問題です。確かにそうです。確かに。

範 吉田さんも犠牲者です。この奥さんも犠牲者です。ここで亡くなったお友だちも、いま、きつとあんな戦争すべきでなかったと悔い改めています。その気持ちを私たちは大切にしてあげたいのです。それを戦争を美化しておられるとしたら、私たちはたまりません。案内できません。

記者 こんなことかかっているかわかりませんが、範さんの肉親の方で、というかわ、親類、親族の方の中に、戦争の被害を受け

ていられる方がいるんでしょねえ。
範 ……いいでしょう。そういう話。ただ、

日本に占領された地域の人々は大なり小なり、被害を受けなかった人はいないでしょう。しかし、それは終わったことです。いまのみなさんの気持ちの方が大切です。

吉田 ありがとうございます。
範 いい時代をつくりましょう。これから本
当に中日友好の時代なのですから。

吉田 ああ、あの白い壁の家が中隊本部でした。地主の家を接収したと思うんですが。いま誰かが住んでいるんでしょうねえ。なつかしいですねえ。もし、許して頂けたら、入れて頂きたいですねえ。

範 さあ、ちょっと聞いてみましょうか。
(去る)

吉田 すみません。あの裏に丘があるでしょう。杉の木がありますねえ。

記者 ええ、あれが。
吉田 いや、いいです。

記者 こうして来てみると平和な部落ですが、四〇年前、遠い遠い日本から、こんな所へ、こんな所へですよ。考えられないことですよ。その侵略を侵攻といい、進出とごまかそうとする、文部省は何考えているんでしょう。

う。

吉田 本当ですよ。湖南満つれば中国飢えずといわれた穀倉地帯ですが、荒らし廻ったんですから。こんな奥地まで。

記者 文部省としては国家意識を養い、日本人としての誇りを傷つけるような記述はさせるようにこのうのです。しかし、範さんじゃないが、事実を事実として見つめる強さ、その強さこそが日本民族の美徳になると思うんです、とくにこれからは。

吉田 そうだと思います。お国のためということをお叩きこまれたおかげで、私たちは何の矛盾も感じず、何の恨みもない中国人をたくさん殺してきたんです。いや、ほんとうに恐ろしいことをしてきましたよ。ここへ来た以上、何でも話さなくちゃいけません、虐殺というのは南京だけじゃないんです。あの思想はずっと中国との戦争の下敷になっていたんです。日本人の値打ちも一銭五厘だったから、中国人はそれにも値しないとされたのかもしれない。殺しまくりました。実は四七日間にわたって死闘をくり返した衡陽作戦も終わって、私たちはこの台元に駐屯したんです。ところがどこでも同じですが、ゲリラになやまされ

るようになったんです。それで討伐ということになり、将校斥候が出されました。それが、運悪く、あの北の山あいで行方不明になってしまったんです。とんで帰った伝令の知らせで私たち出動しました。二、三〇戸の小さな部落でした。片っぱしから引っ張り出して尋問したんですが、誰も吐かないんです。見せしめのために、三人銃殺し、これでもしゃべらんかといったら、とうとう部落の長老が白状しよったんです。それで若い男に、案内させたんです。みんな、そこを一斉に掘りました。

G あっ林少尉殿だ！林少尉殿だ！
H 見よ！鼻も目も耳もないぞ。
I 手の指も第一関節からない。畜生！なぶり殺しにしゃがったんだ、なぶり殺しに！

G やっちなえ！やっちなえ！
I 手殺しにしゃがったんだ、なぶり殺しに！

C 不是我、和我没關係、絶対没關係。(私ではない。私関係ありません。絶対関係ありません。)

A 没關係。何ぬかず！
C 真的、这是真的。和村里的所有人都没關係。我們只是看了一眼(ほんと、ほんとです。部落の者みんな関係ない。私たち見ていただけ。)

A 没關係。何ぬかず！

C 真的、这是真的。和村里的所有人都没關係。我們只是看了一眼(ほんと、ほんとです。部落の者みんな関係ない。私たち見ていただけ。)

I やっちなえ！クソ、クソ、クソ！

Cを銃剣でさす。C悲鳴とともに倒れる。それを馬乗りになってさまくる。

H 村の奴らも皆殺しにせよ、皆殺しだ！

H、G、機関銃にしがみつく。客席に向って。

I あっちだ、あっち。畔道の方だ。

G 撃て撃て、撃ちまくれ！片っぱしから撃ち殺すんだ！あの家の向こうだ、森の方へ逃げる。

吉田 撃ちまくりました。男も女も、赤ん坊をかかえる母親、ヨタヨタ走る年寄り、転びながら泣きさげぶ子供。
A 家も何もかも焼き払うんだ。林少尉の仇討ちだぞ！仇討ち。

吉田 林少尉が無残に殺されたからといって逆上し、無茶苦茶殺し、焼きつくす。……考えてみれば順序が反対なんでしょうねえ。

日本が勝手に攻めこんで暴れまわっているから、少尉が殺されても無理ないわけです。それはしかし、今やから言えるんですが、目の前で戦友が殺されると逆上するんです。狂うんです。気が狂うんです。どうしてこんなことしてしまったのか、ほんとうにそう思います。……いや、むごいことは、それだけでなかつたんです。やめようと思っただんですが話してしましましょう。この台元寺には湘江へ流れこむ蒸水という、あの川ですが、この辺りは豊かな田園地帯で、あの蒸水の橋の付近で月に二回市が開かれるんです。その市の混雑にまぎれ、ゲリラが入りこんでくるので、橋のたもとで私たちは検問に当たっていたんです。

農民の往来、荷物をかついだり、背負ったり、それに市の喧噪。

B まて、まて、またんか、こら！
B、D 追う、二人の女逃げる。往来は混乱し、散ってしまふ。

D (二人を捕まえてくる) おい、どうして逃げた。どうして逃げた！
B おい！いえんのか。いえんのかといってるんだ！
D (籠の中から) やっ、おい、ピストルだ。手榴弾も入ってる。クソ！この女奴、ゲリラの片割れやな。おい！どこから来た。どこから来たんや。
B 吐け！(殴る) 吐かんか。
D おい、中隊本部へしよっぴけ。
B クソ、立て。立つんじゃ！

F ピストル。……ふーん、この女が。どこから来た。
F この台元寺の誰と連絡するつもりだった。誰と誰と誰や名前をいえ。
女 ……
女 ……
F 黙っておいたら、いつまでも攻めぬくぞ。女といつて容赦しない。
B いえ、いわんか！
女 ……

D (二人を捕まえてくる) おい、どうして逃げた。どうして逃げた！

F こいつはそうとう手強いぞ。
B はい、最初から目つきがくさいと思いましたが。

F 日本軍の取り調べの厳しいことは知っているだろうなあ。これは男女の区別なしだぞ！素直に言えばゆるしてやらないことはない。どこから来たか、そして台元寺の周辺のゲリラの状況、兵力、指揮者、そして、この台元寺では誰と誰。それを事細かにい

えば許してやる。

D おい、小隊長殿の方を見んか！

F だんまりをきめこんどるな。そう簡単にはおっしゃらんだらうなあ。それは計算済みだ！よし、逆さづりにして可愛いがつてやれ、まず、こいつから。

B はい、こっちへ来い。立つんじゃ、立たんか！

女二の首筋をもって蹴り上げてつれて行く。

F いいか、こうなりゃ根くらべじゃ。日本軍はなあ。前言ったように女のお方だといったって優しくはせんからなあ、じっくり聞いてくれ、じっくりなあ。

隣の部屋から拷問による苦痛の声が聞こえはじめる。

むせび苦しむ声、せめられる音。

F じっくり聞いてくれ、じっくり。痛そうだが、まだ序の口だ。まだがんばれるはなあ、じっくり聞いてくれ、じっくり。そして、じっくり考えるんだ。いえば許してやる、いえばなあ。なかなか可愛い女じゃないか。お前のような女は遊んでやりたいが、舌をかんで死ぬだけだからなあ。気骨がおりるようだから。いいか、じっくり聞いて考えてくれ。いえば許して頂けるんだぞ。女一……。

F よし、煙攻めにしよ！煙攻めに。いいか、あの方はこれから煙攻めだぞ。じっくり聞いて考えるんだ。

むせび苦しむ声。

F どうだ、苦しいぞ。お前の相棒は息ができなくなるんだ、息がなあ。むせいでむせいで、ポロポロ涙を流して。苦しいぞ。じっくり聞いて考える。こっちを向け！（なぐる）いえ！いわんか！クソ女奴！

F いいか、日本軍の拷問は教科書通りにやるんだ。逆さづりの煙攻めの次は水攻め、下におろして水を飲ませる。飲まないといつたって飲ませるぞ。鼻をつまんで口をこじあけて水を飲ませるんじゃ。腹一ぱいになったら、腹を踏みつける。水をガバーと吐きだしたら、また飲ませる。こっちを向いて素直に聞かんか……どうだ、いわんか。いいなあ、参考のためにいっとくがそれでも白状しなしたら、火あぶりなんじゃぞ。わかっとるなあ。裸にして、岩塩を腹にのせて、真っ赤に焼いた炭火をのせてやる。あついで。岩塩を熱せられてじわじわ、じわじわ。貴様の体を焼いて行くんだ。苦しがつて体をよじっても手足はしびてあるからどうしようもないぞ。これで気を失うだろうが、未だ日本軍の拷問は終わらんぞ。少し休んでもらって何んべんでもやる。それでも白状しなしたら、ヤットコで生爪をいいなあ、一枚一枚ゆっくりはがしてやる。わかったか！

拷問で苦しむ声。

F (隣の部屋へ) どうじゃ、まだ強情はつてるか！

B の声 まだ吐く気配ありません。

F しぶとい女じゃ。女幹部だぞ、こいつは。よし、交替じゃ、こんどはこいつを可愛がつてやってくれ。火あぶりまで。

D こっちへ来い。立て立つんじゃ。

女一引たてられて行く。女二無残な姿でつれられてくる。二人の目があう。優しささえ感じる自信のある目。

F 早く行かんか！早く。(興奮してなぐる)

女一去る。女二崩れるようにして倒れる。

F どうだ、楽しく遊んでもらつて。

B (のぞきこんで) 気を失つたようです。

女二にライトがあたり、暗転。

範 お爺さんが、吉田さんのいう中隊本部と

範、老人をつれてくる。

なっていた家の方だそうです。

吉田 ああ、そうですか。

老人 ……。

吉田 戦時中たいへん御迷惑かけて申し訳ありません。

範 (それを通訳する)

老人 没法子、事情已經過。去了。你到这来

于什么？

範 すんだことだから仕方がないと言っています。何しに來られたんですか。

吉田 戦友が沢山死にしましたので。

範 (それを通訳する)

老人 死的不只是日本人、中国人死的更多。

在那个山丘上兩位女愛國者被殺害、就埋在那个杉樹下。(死んだのは日本人だけじゃない。中国人はそれ以上に沢山死んだ。あの丘の杉の木の下にも女の愛國者が二人殺

されて埋めてある)

範 日本人だけでなく、中国人も沢山死んだ。

あの丘の上の杉の木の下に女の愛國者が二人埋めてあるそうです。

吉田 (驚えるように驚き) 女の愛國者が二人！

老人 這事和你有關？其中一人是我的女兒 (お前關係したのか。一人はわしの娘だ。)

範 (吉田を見) あなたの娘が? (事の重大に気づき) 和他没関係、没関係、完全没関係。(関係ない、関係ない。この人は全く関係ない。)

老人 肯定和他有関係、躲開! (関係しているにちがいない。どけ!)

範 爺々、冷静些、他是無喜的。爺々、我們走吧。別、愆可千萬別那样做! (お爺さん落ち着いて。この人は全く関係ない人なの、ね、行きましよう。ね、やめて、辞めて! 失礼なことしちゃだめ!) (脅える吉田に) 吉田さん心配しないで。

知らぬうちにABCDEFGHI集
まってきた。範、それらを押し
わけて老人をつれだして行く。長い
間。吉田崩れるようにしゃがみこむ。

吉田 中国人の傷はふかい傷です。あまりにも深い。

記者 ……来てよかったですね。吉田さん。
吉田 ……(うなづく)

吉田、とり囲む戦友を見まわす。B、
思わず抱きつく。

夕陽が赤い。その赤い夕陽を背に二人をとり囲むABCDEFGHI。

俺でも犠牲者なのか

ほんとうにそういいいいのか

侵略戦争のほんとうの犠牲者から

そういわれて甘えていいのか

戦争は遠くなった

俺の死の悲しみは忘れられて行く

しかし、侵略された犠牲者の悲しみは

ほんとうに消えて行くのか

侵略された犠牲者の怒りは

ほんとうに消えて行くのか

カナナは赤い

大陸の夕陽はより赤い

1986・6・21脱稿

六三号後記

◇衆参同日選挙の結果は御承知のとおりです。何かが崩れ、何かが構築されてゆくなかで、何かが鮮明になります。これについて作家住井すえさんの言葉に、花は散る前に咲き切るのだから、自民党の三〇四議席も、かえっていい、とありましたが、たしかにひとつの受けとめかたです。ただ、こわいのは、こんな事態になっても、これでいいという方向への馴らされ方、そしてそれに馴れていったときのありようではないでしょうか。猪も、牙を抜かれてしまえば、ただの家畜であります。

◇本号では西会議からの原稿が活潑でした。その分、東が鳴りをひそめた感じですね。その加減もあって、誌面が若干イビツになっている感じは拭えません。全体として63号は何を言いたいのか、きびしいご指摘もありそうです。たとえば「炎の街から」をめぐる又川邦義さんと小松徹さんの評価のちがいは、発表以前の内部評価の問題です。編集企画がそこまで立ち入れなかったことをお詫びします。

その中で唯一の収穫は、劇団通信の猛進撃。これだけは他誌の追随を許しません。

◇臨時定価六〇〇円などにビクつかないで、もっと前向きに、毎号必ず戯曲をのせて下さいという、うれしい励まし声がある劇団からかかりました。元気が出ました。別に、それに合せたわけではありませんが、本号に、こばやし・ひろし氏が新作を提供してくれました。どこか含羞の感じはありますが、些かも衰えてはいません。このほかにも何篇か秀作がとどいております。戯曲掲載はつづけ

られると思います。

◇いよいよ、八月、西は京都で、東は山梨県雨畑で、ともに総会、ゼミです。とくに西は、新加盟の、あしぶえ、かすがいの両劇団を迎えて燃えることでしょう。どちらも大成功させて、次の64号の誌面を飾りましょう。

◇さいごに、わたくしごとですが、七月五、六日、北海道美唄市の演劇祭に参加しました折、たくさんの旧知のなかま、新しいなかまから、ほんとうに心からの暖かいおもてなしを受けました。それはまた道演集の仲間たちの持つ、ふところの、大きさ、深さでもありました。甘えついでに、道演集の各劇団の「演劇会議」のいっそうのご購読をおねがいしたいと思います。(もも)

演劇会議 六三号

一九八六年八月一五日発行

定価 五〇〇円(送料二〇〇円)

編集委員

萩坂桃彦・こばやしひろし

丸子礼二・仲 武司・藤沢 薫

森本景文・栗原 省

発行所

演劇会議 発行所

〒川崎市川崎区渡田四一―一三

はぎ書房内

電話 〇四四(三三三)〇七七五

川崎信用金庫小田支店 一三三三二七

又は郵便振替 横浜〇・一七二二七

誌代振込は